
歌姫物語（ディーバ・ストーリー）

HOTAKANA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディーバ・ストーリー
歌姫物語

【コード】

N4183V

【作者名】

HOTAKANA

【あらすじ】

世に納められる魔歌、その手に全て集めし時、汝は歌姫とてなる

マレーヌ（マリアンヌ・ピアノコ）は風の王国のお姫様。おてんばではちゃめちゃんな彼女が得意とするのは、『魔歌』。

マレーヌはお供のマーロンと共に、世界各地に納められた魔歌を探す旅に出る。その目的は古の魔歌を全て集めて、世界最強の歌姫ディーバに

なること。そして、母親を、世界で苦しむ人々を助けること。

果たして、マレー又は全ての魔歌を集め、歌姫となり、人々を救うことができるのか！？

第1話 おてんば姫（前書き）

初めて書いた作品です。

最後まで読んでいただけたら嬉しいです〇）（〇

おかしい文章&誤字脱字、ありましたら指摘お願いしますm（
m

ではごじぶぞー!!

第1話 おてんば姫

”ドドドドドド”

「マリアンヌ様〜！」

とあたしの名前を叫ぶメイド・リア。あたしは後ろを振り返り、舌を突き出し笑う。そして、前を向いたその瞬間、

”ドッシーン”

「きゃっ！」

巨大な何かにぶつかり、尻餅をついた。ジンジンするお尻をさすりながら、こつこつ言う。

「ちよつと痛いわね！」

「なんだい、ぶつかってきたのは君だろう。マレーヌ」

そ、その声は…。おそろおそろ顔を上げると、やっぱり…。

「お、お父様！ごめんなさい…」

すぐに謝って、頭を下げるあたしにお父様は、

「マレーヌは昔から元気だからな。元気なのはいいけど、前を向いて歩くのだぞ」

と優しく言って、あたしの頭をポンポンと叩いた。それから、何事もなかったように歩いて行った。心の中でホツとし、立ち上がり埃を払う。後ろから、ヨロヨロとリアが来た。

「ハアハア、マリアンヌ様、お勉強の時間です。…急に逃げ出すのは、もうやめてください」

肩で息をし、注意するリア。そんなリアに、

「はいはい。分かりましたよ。それと、マリアンヌじゃなくて、マレーヌって呼んで。前から言ってるでしょ？」

頬を膨らませて言った。

あたしは風の王国の姫。両親からマリアンヌ・ピアノコという名前をもらった。ある人の名前から取った名前で、『マリアンヌ』って名前も素敵だけど、あたしには似合わない。『マリアンヌ』はも

つと可愛い子に似合うもん。いつも走り回るがさつなあたしには、『マレーヌ』の方がいいに決まってる。

「は、はい。失礼致しました、マリ、マレーヌ様」

あたしのお世話係になって半年のリアはなかなかマレーヌという名前に慣れていない。あたしは呆れてふうと息を吐いた。

っていつか、この子に『リアンヌ』って名前合うよね。マリアンヌに『リア』入ってるけど…。金髪のショートボブ。小柄な体にメイド服がずっしり乗っかる感じ。フリフリのワンピース着せたら、お姫様…。いやいや、あたしだって似合う？し、自分が姫だつーの！

「さっ、お勉強に参りましょう」

ズルズルと引きずられ、あたしは勉強部屋に向かった。

今日はあたしの嫌いな魔術歴の時。いわゆる、歴史。あたしはいつも思う、昔の事を知ってもね。新しい魔術とか魔歌（魔術の歌）とかを習いたい。魔術歴の時間はどうしても、眠くなる。また、口に手を当てて、あくび。チラツと教科書に目をやるが、これっぽっちもやる気が出ない。今日、10度目かといえるあくびをする。

”バシッ”

「痛っ！」

頭に分厚い教科書が…。魔術歴の先生、モダンが叩いてきたのだ。顔をしかめるあたしに、モダンはにっこり微笑んでいる。でも、頬がピクピク動いていることが分かる。おお、恐い×2。すかさず、テヘっとする。そんなあたしにモダンはため息をつき、話を続ける。「何十年にも及ぶ戦争が終わった。戦争での死者、負傷者の数は計り知れず、世界の復興は不可能だと思われた。家族を失った者たちも、心に深い傷を負った。そこに現れた一人の魔術師…。マレーヌ、分かる？」

「うん、分かる。マリア・ピアノニコでしょ!？」

自信満々に答える。

「正解。マリア・ピアノニコは古の魔歌で、心身の傷を全て癒した。あなたの御先祖様であり、世界最強の女魔術師ね。じゃあ、今日はこれで」

モダン は説明を終えると、早々と教科書を閉じた。

「え〜、マリア・ピアノニコが出てきたのに、これで終わり? あたしマリアの話なら、魔術歴ずっとするのにい〜」

ガツクリ肩を落とすあたしにモダンはフフツツと笑う。モダンの笑い方はとても上品で、男の人はイチコロ。女のあたしでも、最初はドキツとしたくらい。

「続きは次の時間。次ときはあくびはしなないみたいで嬉しいわ」
モダンが皮肉っぽく言い、手を振る。教科書やノートを素早く片付け、モダンに手を振って、勉強部屋を後にした。

「ああー、もう少しだけマリアの話聞きたかったな」
小さな声で呟く。

マリア・ピアノニコは、あたしの名前の元であり、あたしの憧れ。世界最強の魔術師なのも1つあるけど、理由は2つある。

1つは名前。さつきも言ったけど、マリアの名前からあたしの名前はきている。憧れとは関係ないけど、両親がつけたマリアン又はマリアのようになってほしいからつけたって聞いた。だからこそ縁を感じる(マリアは風の王家だから全くの他人でもない)。あたしには似合わない名前だけど、結構気に入ってはいるのだ。

2つ目は、魔歌がすごく上手だって事。

この世界に生まれた人たちはたいてい魔力を持ち、魔力から魔術や魔法といったものを使っている。魔術や魔法の中の1つが魔歌。歌に魔術を加えると治癒系の魔法が働く。基本は身体の傷を治したり、心を癒したりできる。普通の人だったら、軽傷を治癒させ、心のモチベーションを少し上げるくらい。マリア・ピアノニコは王家の血筋をひくということもあり、魔力が強大だった。だから、最高

ランクの魔術を使え、魔歌も人並みではなかった。マリアの魔歌は1度到大勢の人の心身に負った深い傷を治癒できる。それがマリアがあたしにとって、憧れの存在になった大きな理由。

あたしもマリアのように強くなりたい！だから、魔歌をいっぱい練習して、上手になってやる！！

”ヒューン”

この音は…。ふと聞こえた音はよく知っている。

「マーロン！！」

曲がり角から現れたのは予想通りマーロン・D・ムーケ。彼は20cmくらいの妖精であたしのお供。

「あつ、マレー又探したマロ！」

あたしの姿を見つけ、安堵の息をつくマーロン。

「どしたの？マーロン」

「オイラ、寝坊したマロ。なんで起こしてくれなかったマロ！？」

「だつてえ…」

いつもマーロン一緒に行動する。いつもなら起こしてたよ。今日のマーロンの寝言、笑っちゃうだもん。

「マーロン寝ながら、ムフツ、この栗上手いマロ〜」って言ったのよ？起こせるワケないじゃん。あんなにいい夢見てたのにい〜」

笑いを堪えながら、説明するあたしにマーロンは赤面。

「むむー、失態をさらしてしまったマロ。わ、わらうなマロ！」

あたしはもう我慢出来なくなっていた。お腹を抱えて笑ってしまった。マーロンは今までになく、顔を真っ赤にさせた。これじゃまるで、茹でダコ状態じゃない！！

「フツツ、誰にも言わないから。顔、真っ赤だよw」

マーロンはリュックから栗を取り出し、むしゃぶりついた。すると、真っ赤だった顔は、いつものキャラメル色の肌に戻った。そう、彼は栗を食べるとなぜか落ち着く。不思議だよね。

「ふうー、やっぱり栗はサイコーマロ」

そんなことをぼやきながら、もう1個栗を取り出す。でも、ハッ

として首をふるなり、あたしに急いでこう告げる。

「忘れてたマロ。王様と王妃様が呼んでたマロよ！さっ、そんなだらしない格好せずに、着替えてお二人に会いに行くマロ」
踏み出した1歩を止めて、

「だらしなとは何よ、だらしなとは！」

あたしは”だらしない”と言われた事にムツとしながらも、マローンの小さい背中を追う。

あたしが今着てるのは、水色&白のボーダーキャミと黒いバルーンスカート。これで「私はお姫様です」と言われても、説得力ないよね。普通お姫様なら、長〜いドレス着てるイメージがあるし。あたしはあんなドレス無理だけど！動きにくいし、あたしには似合いません！あたしには、こんなラフな格好が1番いい。

まっ、両親に呼び出された時、パーティーの時は一応着なくちゃね。この格好で行くのもさすがに気が引けちゃう。

部屋に到着した。さて、どんなドレスを着れば良いのでしょうか？派手な赤いドレス？大人っぽいモノトーンなドレス？黄色の下地に花柄が描かれたガーリーなドレス？

「んん〜」

「どうしたマロ？」

「どんなドレス着たらいいと思う？」

あたしの問い掛けにマローンは、

「そうマロね…。これはどうマロか？」

マローンが選んだのは、透き通るような水色の美しいどうしてドレス。落ち着きがあって、柔らかな印象を与えるそんなドレス。お父様にはちゃめちゃんな姿を見せたのだから、落ち着いた感じの方がいいかも。

「うん、そうだね。これにする」

あたしは手に取って、全身が写る鏡の前に立つ。うん、いい感じ。これならあたしも清楚なお姫様に見える。そして、服を脱ごうとし

て、ハツと手を止めた。

「マーロン？出て行って」

マーロンは男だもん。着替える時は出てもらわないと困る。

「わ、分かったマロ〜」 あたしの微笑みに怖がり、慌てて出て行った。

「ふう」

着替えも終わり、髪形も整えてバツチリ もう一度、全身鏡を見た。ドレスの袖口と裾にはフワツとしたファーがつき、全体が光りを帯びている。フワリしたスカートは、女の子っぽいイメージを強くする。髪形はいつも通り耳上のツイントール。ゴムはいつもと違って、ドレスと合わせてみた。水色のフワフワシユシユ。完璧です

「マーロン、入っていいよー」

・・・。

「？ マーロン、どうしたの？」

返事が返ってこない。マーロン何処が行っちゃったのかな？

”ガチャ”

”ポテッ”

「へ？」

ドアを開ける音と何かが倒れる音。一歩か踏み出すと、

”ムギユ”

「んっ!？」

「ぎゃーーーーー!」

ひい、耳をつんざくような悲鳴。耳を塞ぐけど、その場に尻餅をついてしまった。

「うひゃーマロ…」

あっ、やっぱりそうだったのね。あたしは、ドアの前に居たマーロンを踏ん付けてしまったのだ。

「痛いマロ〜」

踏まれた顔をさするマーロン。その顔にはヒールの跡がくつきりついている。

「ごめんぬ、マーロン。返事しないからびっくりしちやって…」

あたしは、近寄って謝った。そしてマーロンの頭を撫でてあげた。

「マロ〜」

撫でられて気持ちいいのか、細い目をよりいっそう細めた。

「アハハッ」

その顔に耐え切れなくなつて、あたしは笑つてしまった。

「マレー又様ー、大丈夫ですか〜!？」

「えっ、リア?どうしたの??」

リアが家来を3人連れて、物凄い形相で走つてきた。リアはハアハアと息を切らして、あたしをアワアワと見回す。家来3人は槍を片手に辺りをキョロキョロしている。

「何があつたのよ?」

あたしはリアに聞いてみた。あたしもマーロンも何がなんだか分からない。

「何かつて…ハアハア、悲鳴が聞こえたものでハアハア…、はれえ〜?」

”パタリ”

「ちよつと、リア!?!」

リアがこつちに向いて倒れてきた。あたしは、支えたものの、そのまま座り込んでしまった。

「のぼせてしまったようです」

1人の家来がリアの顔を覗き込み、呟いた。

「本当だあ〜。顔真っ赤じゃない」

「病室に連れて行きましょう。何もなかつたようですし」
家来が連れていこうとした。

「ちよつと待つて。あたしの魔歌で治す!」

家来を制止させ、リアを仰向けにさせた。あたしは立ち上がつて、

癒しの魔歌を歌い始めた。

く 疲れたときは あなたの 笑顔を 思い出しましょう

あなたの笑顔は僕の心を 軽くする

嫌なことも 辛いことも 悲しいことも

全部吹っ飛ばから

今日も僕は あなたの笑顔で強くなれるんだ

最後の1フレーズを歌い終えたら、リアの顔はいつもの雪のよう
な白い肌に戻っていた。あたしははにかんだ笑顔で、ペコツと一礼。
ハツとした家来は物凄い拍手をしながら、驚いている。

「素晴らしいです！マレー又様」

「こんなにお上手とは、ビックリです！」

「これはお父様やお母様に一刻も早く見てもらわないといけません
よ！」

褒めちぎる家来にあたしはデレデレ。

「エヘヘッ。お父様やお母様にね…って」

『あー…！』 あたしとマローンの声が重なり、廊下
中いや、城中に響き渡った。

「た、大変だマロー。お二人に呼ばれてたマロ！すっかり忘れてた
マロー！」

「そ、そうだったわ！結構時間経ってるよね。ヤバイよ！！」

あたしとマローンは向き合い頷くと二人のいる部屋へと走り出
した。

「えっ、マレー又様!？」

「後のことはよろしく」

一目瞭然に走り去った。

第1話 おてんば姫（後書き）

どうでしたか？

楽しんで読んでいただけたら最高です

次回もがんばりますのでアド&コメよろしくお願いします！！

第2話 誕生日の決意

”コンコン”

「お父様、お母様？マレーヌです」

「うむ、入ってよいぞ」

大きなドアを開けると、部屋の中の家具も床も壁も水色。真ん中には大きなたんがいつきベッド。その周りには、湖が広がっているかのように、一面水。その水は聖なる水で、病弱なお母様の為にあるのだ。お母様は聖なる水からエネルギーをもらっているらしい。そんなことしないで、あたしの魔歌で治せたらいいのに…。なんて考えていると、

「マリアンヌ、こちらへ来なさい」

「はい、お母様」

お母様に呼ばれて、丸い石を渡ってベッドの傍に来た。

「さあ、マリアンヌ座って」

あたしは黙って、お父様の隣に座った。どうして、お父様とお母様はあたしを急に呼び出したりしたのだろう。今までこんなこと無かったから、あたしは少し戸惑っていた。

「ごめんなさいね、マリアンヌ、マーロン。急に呼び出したりして」とお母様は体を起こして言った。

「無理なさらないで」

「ええ、大丈夫よ。今日は話があって呼んだの…。ゴホゴホ」

咳込むお母様の背中をあたしは優しくさすってあげた。

「ありがとう。あなた、話してくださる？」

お父様は小さく頷くと、重い口を開け、話し始めた。

「マレーヌ、君も後3日で15だ。…だから、旅に出てもらおうと思っ」

その言葉の意味を理解するのに少々、時間がかかってしまった。

「ええ！？なんで？」

あたしは時間差で驚き、立ち上がった。でも、慌てて座り落ち着いて質問した。

「一体、どういうことですか？あたしが旅に出るって…」

二人共、一時黙っていた。すると、

「マレーヌ、君は魔歌が好きなんだろう？」

とお父様に質問で返されてしまった。

「そうですけど…」

とりあえず答えてみたものの、それと旅に出ることは、何の関係があるというのだ？

「そして、魔歌で人々を助けたいと思っていると…マールオンから聞いたのだ」 お父様が続けて話し、マールオンを見た。あたしもマ

ールオンを見た。いつの間に、そんなこと話したの！？恥ずかしいから、マールオンにしか話して無かったのに…。

当の本人は話に自分が出てくると思っていなかったらしく、目を見開いていた。困り果てたマールオンを見て、お父様は話を再開した。「助けたいというのならば、世界の国々を渡り、その王国に納められた魔歌を学ぶのだ。」

この世界に7つの王国があるのは知っているだろう」

「ええ、お父様」

えっと…、あたしの住んでる風の王国。火を司る、火の王国。水を司る、水の王国。花を司る、花の王国。空を司る、空の王国。闇を司る、闇の王国。光を司る、光の王国。（闇と光の王国は、幻の大地にあるといわれている。だから、本当に存在するのか分かっていない）1、2、3…7つあるね。そう、あたしたちの世界は、この7つの王国で成り立ってる。見ての通り、自然の力で成り立っている、とも言える。

「7つの王国には、戦争が終わった後、マリア・ピアノコが納めた魔歌があるはずなのだ」

「本当に!？」

びっくりして、声が裏返りそうになった。マリアが世界各地を渡

って、魔歌を聞かせたのは知っていた。だけど、魔歌を納めたのは知らなかった…。違う、少しだけ聞いたことあるような…？ん、思い出せない。

「うむ。マレーヌも魔歌が上達したようだし、もう15歳だろ。こういう経験も必要だからな…」

「そういうことだったんですね」

あたしは少し納得した。未だに旅なんて信じられないけど…。お母様は微笑みながらも、時々苦しそうな表情を浮かべていた。

「それにな、ニーナの体も良くなると思って…な」

お父様の顔は険しかった。しかも、お母様を名前で呼ぶくらいだもん。そんなに悪くなったのかな、お母様…。

「あの、王様たちは言い伝えを知って旅に出るよう考えたマロ？」

マロンが質問を投げ掛けた。お父様は表情を崩して、

「ああ。マレーヌなら、言い伝えのようにできると思ったのだ。そして、アリアや人々を助けられるだろうと踏んだのだ」

言い伝え？聞こうと思って口を開けたけど、お父様に先を越された。

「この決断は3日後の生誕パーティーで発表してもらおう。それまでじっくり考えるのだぞ」

お父様の言葉を聞き、あたしは部屋を後にした。ドアをゆっくり閉めたら、

「…マレーヌ、どうするマロ？」

マロンがボソツと呟いた。「ん？」と振り返りニコツとした。

「そんなの決まってるでしょ？」

そして、ウインクをした。

〜3日後〜

「ふあ〜」

重い体を起こして、朝を向かえた。カーテンの隙間からこぼれ落ちる木漏れ日が眩しい。

今日はあたしの誕生日。そして、決断の時である。ドキドキする。こんなにドキドキするの、15年間生きて初めてかも…。小刻みに震える体を奮いたたせ、着替えを始めた。今日は白のマキシ丈ワンピースに、ド派手なピンクのタンクトップ。髪を整えているとマールンが起きた。

マールンの部屋はあたしの部屋の中にある。部屋というより、ポスト。しかも、郵便ポスト。

「おはようマロ。今日は早いマロね〜」

「だって、今日はあたしの誕生日よ。しかも、決断もしなくちゃならないし」

決断はしてるけど、いざとなるとドキドキして早く起きてしまった。いつもなら、朝食の15分前、リアにたたき起こされる。

「マールン、朝食まで散歩しない?」

今、あたしたちがいるのは”秘密の裏庭”。裏庭の中にある、小さな泉の縁に立っている。

何故ここが”秘密の裏庭”かというところ…。5歳くらいの時、勉強が嫌で逃げ出したことがあった。城の裏側の囲いの一部が壊れていたのを見つけて、幼いあたしはそこに逃げ込んだの。そしたら、ここを見つけたって訳。今じゃ、囲いの壊れたところにあたしが入ることは出来ない。でも、マールンのリュックにあたしが入って、”秘密の裏庭”に行く。なんと、マールンのリュック、中は本人も分からないくらいたくさん入るの!それでも、中は栗だらけで、埋もれてしまいそうになる。

まあ、そうやって何度も訪れている。都合の良いことにこの辺り

に、めつたに人が来ることはなく、今まで誰にもばれてない。

それにしても、ここはうっとりするほどきれい。木は生い茂り、何処からも見えず、すすくと育ってる。花は生えてないけど、あたしが時々来て手入れをしているから、芝生はすつきりしている。

泉の水は底まで透き通って見える。水は泉の奥にある少女の像から出ている。肌も、着ているローブも全て真っ白な像。あたしが見つけた時から錆び付いていない。優しいな笑みを浮かべた少女の像。目を閉じて、口はほころび、胸の前に持ったツボから水が湧き出ている。水がどこからきているのかは、全然分からない。普通の水ではないはず。

木の間から漏れる光。それが泉に反射して、キラキラと輝いている。こんな風景を見ると、不思議と心が落ち着く。あたしは何かあるたび、”秘密の裏庭”に来る。悲しい時、寂しい時、失敗した時、もちろん嬉しい時にもここに来る。

「ねえ……」

「何マロ？」

「あつ、ごめん、マーションじゃなくてこの子」

あたしは泉の前でしゃがみ、少女の像に話しかけた。

「あたし決めたよ。この世界を旅して、マリアの魔歌を集める。それで、お母様の病気を治して、マリア・ピアニコにつづく歌姫クワイバになる」

変な話だけど、この子に話し掛けると、本当に聞いてくれてるみたいなの。

「だから、少しの間会えないからね。これ…持ってきたの」

ポケットに入れていたものを出した。

「指輪…マロか？」

「ん…、そうだよ」

水色の石がはめ込まれた、おもちゃみたいなちっちゃな指輪。昔お母様から頂いた指輪。お母様はこの指輪をネックレスに通して使っていた。小さかったあたしは駄々をこねて、指輪を貰った。お母

様が子供の頃につけていた指輪で小さめで、今のあたしも入らない。昔は毎日のようにつけていた。

「あたしのお守りみたいな物だから、あなたにあげる。あなたに似合うと思って」

指輪の石にそつと触れた。今までのお城での生活を思い出す。刺激の少ない、退屈な生活。楽しい事もあった。でも、なんだか物足りなくて……。あたしはこんな生活をずっと続けるのかと疑問に思っていた。きつと旅に出たら、色んな事が待ち受けてるんだな。不思議と顔が緩んでしまった。期待も不安もあるけど。

「マーロン、これ頭にかけてくれる？」

マーロンに指輪を渡す。彼は丁寧に持って行き、少女の頭にかけた。

「似合うマロ」

マーロンが戻ってきて、にこやかに言った。

「あたし頑張るからね。あたしの事応援してよ？魔歌、上手になつたら聞かせてあげるから」

少女の像をまっすぐ見つめた。返事は返ってこない。来るはずもない。あたしは”秘密の裏庭”をぐるつと見渡し、その場を後にすることにした。マーロンのリュックに入るうとした時、

「待ってるわ、マレーヌ」

そう聞こえたような気がした。

↳ 数時間後

あと1時間でパーティーが始まる。パーティーが始まるのは6時から。あたしはドレスを着て、パーティー会場の裏でいまかいまかと、待ち構えている。

ぞろぞろ入ってくるお客様達に心臓はバクバク！もう、どうしよう。でもでも、あたしは座って挨拶したり、プレゼントをくれる人に笑顔でお辞儀したりしてればいいってリアが言ったもんね！？

「はあ」

長くいたため息をはいて入り口や会場にいる人を数える。1つのテーブルに10人くらい座るから、1、2、3…っていつもより多いよね!? 座ってる人まだ少ないけど、テーブルの数、やたらあるでしょ!?! 今まで100〜200人くらいなのに、500人くらい、いや、もっといる? お祝いしてくれる人がいっぱいいるのは嬉しい。でもなんでこんなに多いの?!?

「うう〜」

ため息の次は呻いちゃったよ…。

「マレー又、そんなにため息とかうめき声をあげないの。せつかくあなたの為に来て頂いてるのに」

モダンに注意された。ビシツと女性用のスーツを着て、キャリアウーマンみたい。

「そうですね、マリ、マレー又様。ほらあ、にっこり笑って〜」

リアはそう言うと、あたしの顔をグイーツと…

「痛い、痛い!」

引っ張ったの!

「はっ、すみません〜」

「いいのよ、リアちゃん。もっとこうやって〜」

やっとリアが離してくれたのに、モダンがあたしの頬をグイーツと…、

「いたゝいゝー!」

さつと後退し、つねられた両頬をこする。

「モダンは手加減つてのを知らないのよ!」

「知ってるわよ〜。手加減くらい」

「まあまあ、マレー又様〜。落ち着いて〜」

「ていうか、あんたが始めたんでしょ!?!」

「あれえ〜、そうでしたっけ?」

リアの天然ボケに、怒りも自然消滅。

「そうよ、リアよ」

呆れた感じで言った。でも、リアは呑気にアハハなんて笑うし、

モダンはいつもの上品な笑いで…。なんなのよ。そんなこんなで会話をしていたら、

「マレーヌ、もうそろそろ席につくマロ」

タキシード姿のマーロンが現れてうながした。深呼吸をして、2人に手を振り、会場に出て玉座に座る。会場にいる人たちも席に座り始める。あたしは真ん中の玉座に、お父様は右、お母様は左の玉座に座ってる。マーロンは相変わらず、あたしの横でフワフワと宙に浮いている。

うー、緊張する。目で人をもう一度数えてみる。1、2、3、4、5…、数えきれません！こんなに沢山の人の前で「旅に出ます」なんて言わなきゃならないの？

「大丈夫マロ？顔引き攣ってて、頬つぺた真つ赤マロよ」

マーロンが耳元で脳天気な囁く。あたしは口に手をあてて、身を少し乗り出す。

「大丈夫じゃないわよ！こんなに大勢いるのよ、緊張するわ」

あえて、頬つぺたが真つ赤…ということには触れなかった。

「あら、マリアンヌどうしたの？大丈夫？」

「え？大丈夫ですよ、お母様！」

慌てて言った。今のあたしは矛盾してるね…。お母様はにっこり微笑み、隣のメイドに話し掛けた。あたしはマーロンに肩をすくめてみせた。

「まっ、なんとかなるわよ…」

そう言っつて前を向く。と同時に、

「皆様、お集まりのようですので、始めさせて頂きます。司会は私、モダン・S・プレッソでございます。よろしく願い致します」

と言っつて（え！？）モダンが一礼する。それに合わせて、お客様は拍手をする。

「では、これからマリアンヌ・ピアノ様生誕パーティーを始めます。開会のお言葉をウィン王」

すると、お父様が立ち上がって、前方のマイクのところまで歩み

寄り、マイクに向かってこう言う。

「ええ、本日はマリアンヌの生誕パーティーに来て頂き、誠にお礼申し上げます。マリアンヌも今年で15歳となりました。これも皆様方のおかげであります。では、本日の一夜を楽しんで下さい」

一礼して席に戻る。なんだか、圧巻。ただ一言、言うだけなのに、威厳に満ち溢れている。あたしもお父様の様にできるかな…？

「ありがとうございます。次に、記念品の贈呈を致します」

スツとあたしは立ち上がり、前に出た。お父様とお母様も前に出て、あたしと対面しきになる。2人の横にメイドがついた。その手に、長方形の小さなトレイ。中にはシンプルなチョーカーが置かれていた。黒い帯に金色のプレート。真ん中にはダイヤ形のクリスタルがはめ込まれてある。クリスタルは風の王国の『証』といわれる宝石。他の王国にも、王家の『証』とも言える宝石があるらしい。

あたしが『証』を貰えるなんて…、嬉しい！いつ貰えるのか、ずっと気にかかっていた。いつあたしが風の王家として正式に認められるか。つつい、顔がほころんでしまう。2人もあたしと同じようで…。

「今ここに、お主を風の王国の、立派な王族とする。如何なる時も風の王族ということを忘れるでないぞ。よって、この品を授けよう」

お父様がそう言っ、お母様があたしの首にチョーカーをつける。

「ありがとうございます」

あたしはお客様に向かって、ドレスの裾を持ち、左足を後ろに下げ、お姫様の様な（あたしはお姫様です）礼をした。そして、大きな拍手が起る。あたしの顔はたちまち笑顔。拍手が鳴り止んだので、席に戻ろうとした。

「マリアンヌ様、そのままお待ちください」

司会のモダンにとめられた。…な、なにかあるの!?

「引き続き、マリアンヌ様から重大発表がございます。マリアンヌ様、どうぞ」

ええ、今!?!まだ心の準備が…。どんな風に言えばいいの??ス

タンドマイクの前でロボット状態。えっと、まず…、

「えー、私^{わたくし}マリアンヌ・ピアノは…た、旅に出ます！」

ちよつと声大きすぎたかも…。みんな、引き気味だし…。

「えっと、何故旅に出るかと言いますと…、世界中の魔歌を知り、学ぶ為です！」

なんか選手宣誓してるみたい。しかも、語尾が強くなる…。

「そして、体の弱いお母様や世界各地の人々を元気にします！」

やっぱり語尾が…、でも、気にしちゃうられない！

「それから、マリア・ピアノ^{ディーバ}みたいな歌姫に…ううん、マリア・ピアノを越える歌姫になります！見ていて下さい！！」

なんか、すつきりした…？そして、今までにない拍手が会場全体に響き渡る。時々、歓喜の声も聞こえる。もう人目気にせず、あたしはみんなにペコペコ頭を下げていた。嬉しすぎて、目頭が熱くなる。唇を噛み締めて、満面の笑みを零す。

「皆様、ありがとうございます。それでは、乾杯のお声をマリアンヌ様。皆様、お立ち下さい」

モダンが頃合いを見計らって、進行をした。あたしはメイドからジューズの入ったグラスを貰い、マイクに向かって高らかに声をあげた。

「皆さん、今日はありがとうございます！！かんぱい！！」

【かんぱい！！！！】

それからは食事をしたり、プレゼントを貰ったりしてパーティーは終わった。今、あたしは自分の部屋のベランダにいる。マールンと、パーティーが終わってからずっとここで星を眺めている。

「ふう〜。パーティーも無事終了だね」

さつきまで帰路につく人々がいたけど、今はもういない。

「そうマロね。マレーヌもよくやったマロ。」

「あはは。でも、重大発表って言われた時はびっくりして、頭真っ白になっちゃった。」

「いや、それでも大したもんマロ。自信持つマロ。」

「うん。…ねえ、マーション？」

あたしはマーションをまっすぐ見つめて切り出した。

「どうしたマロ？」

「あのね、マーションも一緒に旅、行ってくれる…？」

あたしの言葉にマーションは目を見開いた。そして、顔をくしゃつとして、

「もちろんマロ？オイラはマレーヌの忠実なお供マロ！行かないなんて、ありえないマロ！」

あたしは微笑んだ。

「良かった。マーション、頑張ろうね。あたし絶対に、みんなをあつと驚かせるような、すごい歌姫ディーバになるから…」

あたしはこの数多の星の下で1つのもちっぽけで、とても大きな決意をした。

第2話 誕生日の決意（後書き）

さあやっとなマレー 又たちは旅に出ます！

ここまで読んで下さってありがとうございます (^ ^) m

続きをお楽しみに！！

第3話 風の如く(前書き)

かなり遅くなりました。すみません) . . . (

やっと旅立ちって感じです。

~~~~~

### 第3話 風の如く

”ゴソゴソ”

あたしは重いまぶたをゆっくり開け、体を起こした。生誕パーティーから3日。今日がとても早くきたような気がする。

どうしてかな…。ワクワクする。沢山の魔歌を学べるから？冒険の旅(?)に出られるから？なんだか、色んな気持ちがちやませだよ。

「マレーヌ、おはようマロ」

「あつ、おはよう」

既にマローンは起きていたようだ。荷物の中を確認しながら、あたしに聞いた。

「ちゃんと支度出来るマロか？」

あたしは自信満々に、

「大丈夫よ！バッチリ、バッチリ」

と言ってベッドから勢いよくジャンプした。そんなあたしの姿にマローンは呆れた感じで、

「そうマロか。…もう朝食の時間マロ。食堂に行くマロ」

「はいはい」

返事をして、彼の後を追いかけて食堂へと足を速めた。

食堂（大きなテーブルが3つ並べられた、食事をする部屋）には、家来やメイドが沢山いる。大体は座ってるけど、食事係のメイドはいそいそと準備をしている。

あたしが座るのは、真ん中のテーブルの1番奥。あたしや両親、マローン、城のお偉いさんは決まってここ。お父様とお母様はもう座っていた。

「おはようございます。お父様、お母様」

「おはようございますマロ」

あたしとマーロンの挨拶に二人も返した。しかし、お父様が顔をしかめて、

「なんだ、今日もネグリジエのままか」

「あつ、忘れてた。えへへ」

「もーがつくのはいつものことだから。」

「ふふ、マリアン又つたら。これで何回目かしら」

お母様はくすくすと笑ってる。うう、着替えてくれれば良かった。ぶすつとした顔で椅子に座る。

今日のメニューは、クロワッサンにポタージュにサラダ。結構いいメニューじゃない。もう揃ったかな？すると、お父様が立ち上がって高らかと告げる。

「皆のもの、今日も新たな1日が始まった。それでは、1日のエネルギーとなる朝食をいただきこう。いただきます！」

【いただきます】

みんなが口を揃える。そして、朝食を食べ始める。ガヤガヤと話し声が聞こえる。これも当分聞けなくなると思うと、ちょっと寂しい。それにこれからは、朝食もなにかも自分で準備しなくちゃならないのよね。あたしできるかな…。

「あら、どうしたの、マリアン又？食べなくって？」

お母様が心配そうに尋ねる。

「へ！？食べます、食べます！！！」

あたしは慌てて答えた。お母様はあたしを見てにっこり微笑み、食事を再開した。

クロワッサンをほろぼりながら、お母様の食事の量を見つめた。サラダとスープだけで、どちらも少量。あたしなら絶対足りない。朝食だけではない。3食いつも少ない。時々、食べないこともある。しっかり食べたほうが元気になると思う。そのことを話すと、

「私のこと心配してくれるのね。ありがとう。これから、もう少し食べられるよう頑張るわね」

お母様はそつと答えた。なんだか、照れ臭くなって食べる手を速

めた。会話まじりの楽しい食事は終わった。

食べ終わってからは自由だから、あたしはマーロン共に食堂を後にした。と後ろから二つの影が近づいてきた。

「マレーヌ、ちょっと来て」

「はぐはぐ、マレーヌしゃま早いでふね（マレーヌ様早いですね）」

「モダン、リアー!!」

呼びとめたのはモダンと口の中に朝食をいっぱい詰め込んだリアだった。

「どうしたマロ？」

マーロンが不思議そうに聞く。しかし、

「さっ、早く早く」

モダンが急かした。一体何をするつもりだろう？

連れられたのはなんの変哲もない部屋。城には数え切れないほど部屋があり、使われていない部屋がほとんど。この辺りはあまり使われていないはず…。

「開けていいわよ」

モダンが肩をポンと叩き、微笑んだ。何？と顔をしかめたけど、

モダンもリアも微笑んだまま。マーロンと顔を見合わせ、扉を開けた。

朝日が照り輝き、目を伏せた。目が慣れてくる。

「…かわいい」

ふと、あたしの口から言葉が漏れた。

部屋を中心にドレスみたいな服が飾ってある。ドレスみたいな服ってのには理由がある。ドレスにしてはシンプルな柄に布地。裾にフリンジがついてるだけで飾り気がない。肩に頑丈さがムンムンする、黒い肩当て。腰には茶色のベルト、スカートの両側にポケット。

特徴的なのは2つ。1つ、袖が肘まででそこから先はアームカバーになってる。着たら肌が見えるね、これは…。2つ、スカートの縦一直線にジッパーがあしらわれている。シルエットはドレスで、全体的にはシンプル。しかし部分的にいうと斬新。

「素敵でしょ？」

モダンが部屋に入って来て言った。まっすぐドレスを見つめている。

「すっごく素敵!!これどうしたの？」

あたしは率直に感想を述べた。というか、ドレスに心を奪われている。

「んふふー、私とモダン先輩で決めたのです!!」

リアが胸を張って答えた。

「マレーヌ様の旅で着ていただこうと思ひまして!!先輩、ナイスグッドでしたね!!」

いつものあたしならお調子者のリアにツッコミを入れる。でも、今は目の前のドレスしか頭に入っていない。

「マレーヌ、このドレス見たことない？」

興奮気味のリアをよそに、モダンが聞いてきた。確かにどこかで見たことあるのよね。たしか…?

「マリア「マリア・ピアニコのドレスマロね」」

やっと思ひ出して、言おうとした。なのに、誰かさんに先を越されてしまった。モダンは少しも気にせず、

「そう。マリア・ピアニコの肖像画…覚えてる？」

「あっ、ほんと〜!!」

お城に偉人たちの肖像画があるけれど、マリアのは一際大きな肖像画なの!あたしは何度も見ているから、すみからすみまで覚えている。

「こちらのドレスはマリア様が着ておられたといわれて…」

「えっ!?!マリアが!!」

「いえ、実際着ていたものではありませんよ。マリア様のドレスと

似せて作ったのです」

「しかもオーダーメイドね」  
心が惹かれるわけだわ。

「このドレス、パーティーに着ても大丈夫だし、普段はここを開けて…」

モダンがジッパーを開けてみせた。

「動きやすさも抜群よ。お転婆のマレーヌに持ってこいね」

パツと顔を輝かせて、ドレスをマネキンから外す。体に合わせて、ギョツと抱き寄せた。

「お気に入りになったみたいで良かったわ」

「やっぱり私たちのチョイス最高でしたね」

モダンとリアが嬉しそうに言葉を零した。

「ありがとね！モダン、リア！！」

あたしは笑顔で感謝した。

「マレーヌ、もう時間よ早く準備して来なさい」

モダンが腕時計を見て、呟いた。

「え、うん！マーロン行くわよ！！」

部屋を飛び出した。

「じゃじゃーん！どうマーロン、素敵でしょ？」

部屋に戻ったあたしは早速ドレスに着替えた。似合っているか不安だったので、マーロンに聞いてみた。平凡なあたしにこの素敵なドレスが不釣り合いになってないかなって…。

「おお、似合うマロ〜。モダンさんが言ったマロけど、ドレスの中に服を着ておけばいいって」

「ふっふーん、完璧よ〜。着てるもん」

得意げにVサインを見せつけた。

「それでこのジッパーを開けたらいいんでしょ！？」

「そうマロ〜。何で分かったマロ？」

「ん、女の勘ってやつ？」

薄手で通気性のよさそうなこのドレス。中に服を着てもあまり暑くならない様だし、ジッパをあけるなら着ておかないとマズイ。

「ふうん。っていうか、時間無いマロ!!」

「ぎゃー！もうこんな時間、大変！！荷物は？よし、行くわよ、マロン!!」

「オ、オツケーマロ!!」

慌ただしく部屋を出て、廊下を駆け抜けた。

「ふう、どうにか間に合ったみたいね」

「ギリギリセーフマロ!!」

少し息を切らせつつ、どうにか時間に間に合った。お城の前にたくさんの人が並んでいる。両親、リア、モダン、他に家来やメイド（リアもメイドだけど…）がいる。みんな、あたしの為に来てくれているんだなと思うとジーンとする。

「さあ、出発の時間のようだ…。マレーヌ、これからの旅は世話をしてくれるメイドはおらぬぞ。自分の力で一步一步進み、魔歌をしつかり学んでくるのだぞ」

「はい、お父様。あたし、頑張ります!!」

威厳に満ち溢れたお父様をぎゅっと抱きしめ、笑顔を見せ、お母様の方を向いた。

「お母様、無理なさらないでね？あたしの魔歌で元気にしてみせるから」

「ええ、楽しみにしてるわ、マリアンヌ。あなたも無理しないでね」  
頷いて、お父様と同じく抱きしめた。細く骨張った体から優しい温かさが伝わってくる。

「ふえーん、マレーヌさまあ！私のこと忘れないうでくださいねええ」  
「リア、泣かないでよ」。あたし頑張るから、あんたも頑張つてよ  
ね？」

お母様から離れるとすぐ後ろに泣き縋るリアがいた。

「ふあい、マレー又様応援していますう」

「もつリアちゃんたら…。マレー又頑張りなさいよ、あなたなら絶対できるわ…」

モダンにはリアの頭を撫でながら、急に耳元で囁いた。

「闇の王国は気をつけなさいよ。あそこには悪魔や魔物といった邪悪な奴らがいるって伝えられてるから…行かないほうがいいかもね」  
「う、うん。分かった…」

怖くって気のない返事を返してしまった。闇の王国…、なんか怖いな…。

「まっ、とにかく頑張っつてね、マレー又！」

モダンにしては明るい声にちよつとホツとし、微笑みあった。そして、声を張り上げてみんなに伝えた。

「いつてきま〜す！」

「…いつてらっしやいませー！！」「」

あたしはみんなに背を向け、歩き始めた。隣には頼もしいお供・マーションがいる。

清々しい風が頬にあたり、二つに結んだ髪がフワリとなびく。颯爽と駆け抜ける風はあたしの心の不安を吹き飛ばしていくような気がした。

お城が見えなくなり、街中に入った頃、

「マレー又、まずどこの国に行くマロ？」

「え〜つと、マーション地図出して」

マーションは空を飛んだまま、リュックの中をあさった。

「あつたマロ。どうぞマロ〜」

「ありがと。どれどれ〜？」

あたしたちがいるのが風の王国。7つの王国に行かなきゃならなのよね。7つの王国で成り立っているって言ったけど、小国もある。戦争で残った、王国とまではいかない小さな国のこと。地の国・

木の国・岩の国の3つがある。だから、7つの王国と3つの小国の計10国で成り立っている。でも、7つの王国を旅つていわれたから、小国に行く必要は無い。

風の王国の南に、火の王国が、西に水の王国、そのまた西に花の王国。ひとまず、火の王国に行こう。そうすれば、火 水 花…っで行けるからね。空の王国はこの4つの王国がある大陸とは違う、スカイアイランド空島という浮き島にある。そういうことで、空の王国にいくなら、1度風の王国に戻るよう言われた。

「火の王国にしゅぱーっ!!」

片手を空に向かって突き上げた。

「わ、わかったマロ」

あたしの行動に驚いたのか、裏返った返事が返ってきた。

「アハハ。んじゃ、直行で行くよ」。マローン、スクーター用意して!!」

スクーターは屋根つき、高性能バイク。通常は手のひらサイズのカプセルになっており、投げるとバイク状になる。便利な乗り物で訓練すれば10歳から乗車可能だ。

「マレーヌのドレスのポケットに入ってるマロ。たぶん、右上のポケットマロ」

ポケット中を探ると、

「あつた!マローン天才〜(?)」

透明な表面にラメがふりかかったカプセル。

「えいつ!!」

カプセルを地面に向かって投げる。ポワンと音を立てて、スクーターが現れた。シルバーにラメがかかり光沢のある車体、金色の屋根。屋根は収納できてホント便利。あたし愛用のスクーター。

「さあ、行くわよ〜!乗った乗った!!」

「マロ〜、マレーヌ安全運転で行くマロよ…」

マローンは露骨に嫌な顔をしていた。なんでだろ?いつも乗ってるのに。



### 第3話 風の如く(後書き)

ほんと旅立ちって感じでしたよね？前フリ長くてすみませんm

— m

最後まで読んで下さってありがとうございます！—>—

次話も温かい目？で読んでいただけたらうれしいです！<—>—

## プロローグ 旅立ちにあたって

あたしにはお父様とお母様という素敵な家族がいる。

残念ながら、あたしは一人っ子。

だから、兄弟が羨ましくなるときが度々ある。

双子なんかとびきり素敵じゃない!?

お互いのことが分かってて、

ケンカもするけどその分仲がいい。

そんなものに憧れたりする。

この旅でどんなことが待ち受けてるのか、あたしもマーロンもわからない。

初めて踏む地、火の王国。

きっと火のように熱い意思を持った人が待っていて、

炎のように熱い試練が待っているんだ。

そんな火の王国の魔歌は火のように心を熱くするような力強い魔歌なんだろうな。

第1話 新境地と過去（前書き）

ついに火の王国に到着！！

そしてマレーヌの過去も明らかに！？

しゅっくろしゅんぞ

## 第1話 新境地と過去

「ふう〜、なんとか火の王国についたわね〜」

「散々な目に遭ったマロ〜！」

「本当！なんだったのかしら、あの変な人たちは！？」

なんで散々な目にあっただかかって言うとは…

まだ風の王国の領地にいた頃。街から離れた森の中。火の王国に行くにはこの森を通過しないといけない。そんな森での出来事。

「もうそろそろ、昼食にする？」

スクーターでゆっくり走っていたときにあたしは声を掛けた。

「ご飯マロ〜」

丁度いいところに切り株を見つけたのでそこで食事することにした。切り株に布を敷き、持ってきたパンやサンドイッチを広げた。バターの香ばしい香りが食欲をそそる。コップに水を注ぎ、

「いただきます〜す〜」

と手を合わせ、手を伸ばしたとき、

「待て待て、待てーい！」

野太い男の声がした。声のしたほうを見ると、見るからに変な人組が居た。

「お嬢ちゃん、そのパンとサンドイッチオレらに全部ちょうだい〜」

がっしりした豚っ鼻の男が猫なで声で言った。待てと言ったのもこの男だろう。

「…あなたたち何か用？これから食事だから」

あたしは軽くあしらった。せつかく食べられると思ったのに！！

「あ？オレ様の名前は…」

「誰もあなたの名前なんか聞いてないわよ！」

勘違いな男だ。食と書かれたダサイTシャツは大きなお腹のせいでパツパツ。

「いや、聞けよ。オレ様の名は、コツペ・ラハだ!」

黄色い長靴をダダンと踏み鳴らす。ポーズまでつけてる。そして両隣の二人が、

「おらはチヨウウだ」

「おだはナノレスだ」

格好が同じ二人はきつと双子だろう。左右の泣きぼくろ以外顔は瓜二つ。二人とも黄緑と黄色の服を着ている。黄色の魔女帽をかぶって、可愛い感じもする。まあ、変な3人組だってコトは変わりないけど。あたしは声に出して3人組の名前を言ってみた。

「…、コツペ・ラハにチヨウウにナノレス?」

「コツペ・ラハって逆さに読むと『ハラペコ』マロ」

あたしは少し考えてパツとある言葉が浮かんだ。

「3人合わせると…『超ハラペコなのです』じゃん!!--うける、どんだけお腹空いてるの!!--」

あたしとマーロンは吹き出してしまった。

「わ、笑うんじゃねえ!いいからそれ全部よこせ!!--」

「よこすだ!」 「よこすだ!」

ハラペコ3人組がじりじり近づいてくる。

「ちよつと近づかないでよ!あんだ匂うのよ!」  
ツンと鼻につく匂い。

「おらか?」

「違う!」

「おだか?」

「違う!」

「オレ!?!」

「そうよ、あんだよ!!--」

あたしは鼻栓をして顔をしかめる。マーロンなんか天狗みたいに鼻が長いから両手で覆い隠している。

「あんだ、何日お風呂入ってないのよ！」

「え〜と2ヶ月くれえだな！」

自慢げに言うコツペ・ラハ。

「うげえ。マーロン、やつちやっていい？」

「問題ないマロ〜」

気楽に言うマーロン。悪臭に顔をしかめているけど。

「よしっ、いくわよ！ 風よ、嵐のように吹き荒れ悪事を飛ばせ！」

”ゴオーーーーーー”

嵐のような風が吹きたて、周りの木々やあたしの服も髪も音を立てる。マーロンは食事の上に伏せて、お気に入り麦わら帽子が飛ばないように、両手で押さえている。ハラペコ3人組はとぼけた顔で辺りを見渡す。すると、フワリ。3人組の体は浮かび、風と共に飛ばされていった。最後に捨て台詞を残して…

「覚えてるよおーーーーー！」

「……ハラペコ、グーーーーー……」

こういう訳。ほんっと散々な目に遭った〜。あいつらは一体何者だろう？変人なのは分かってるけど…。

「こんにちわ！身分証明書を出していただけますか？」

突然の声。ここは入国ゲートだった。他国に入るときは、入国ゲートを通って入国手続きをしなくちゃならない。じゃないと犯罪になるからね。手にしていた証明書を手渡す。メモをとりつつ、係員が質問を始める。

「風の王国からこられたのですね。ええと、マリアンヌ・ピアノコ様に、マーロン・D・ムーケ様ですね？」

「はい、そうです」

「おお！ってことはあなた様は風の王家の者でしたか！？」

めっちゃめっちゃ驚いてるし…。

「そうですね…」

「はつすみません。なんの御用事で？」

「んっと、なんていったらいいのかな？」

「魔歌探しの旅ってところマロ」

「マーションが補足する。係員は素早くパソコンを打ち込み」、

「そうですね。それではこちらの入国証を。紛失しないようにお願  
いいたします。後、こちらを」

「渡されたのは入国証と何かのパンフレット。」

「ありがとうございます。これは何ですか？」

「こちら、火の王国で年に1度開かれる、不死鳥フェニックスパレードのパンフ  
レットになります」

「へえ〜パレードとかあるんだ〜」

「係員がにこやかに頷く。」

「では、お通り下さい。スクーターにお乗りの場合、速度には気を  
つけて下さい」

「はい。行くわよ、マーション」

「待ってマロ〜」

「胸を躍らせながらゲートを通った。」

「へえ〜、ここが火の王国！素敵〜」

そう、目の前に広がったのは赤とピンクの家並み。家の外壁は淡  
いピンク。屋根は真っ赤。道路は茶色というより、赤茶色。まさに  
『火』って感じ。行き交う人々は活気溢れている。車や馬車が列を  
成している。

「さあ、火の城まで飛ばしていくわよ」

「スピードの出しすぎには注意って言われたばっかマロ！」

「わかってるって！」

スクーターで走ることで20分。赤を基調とした大きな城に着いた。  
「風の城と同じの大きさね〜」

「王様に挨拶しに行くマロ！」

「そうね。さつさとマリア・ピアノコの魔歌、探し出すわよー!!」  
門の前まで来ると、門番に足止めされた。

「お前たち何者だ？」

「何のようでここに来た？」

槍を片手に遠させまいとする。面倒だけど、これが彼らの仕事だからね。

「あたし、風の王国から来ました。マリアンヌ・ピアノコです」

「お供のマーロン・D・ムーケマロ。王様に挨拶をしに来たマロ」

あたしたちが名前を名乗ると、顔色を変えて後ろでここによこによし始めた。

「…マリアンヌ・ピアノコって」

「…風の王家じゃねえか？」

丸聞こえなんだけど…。そんなことも知らずに、前を向きさつきと違う態度で、

「…マリアンヌ様とお供様どうぞ」

声をそろえて言った。

中に入って案内され、王室の大きなドアの前に立たされた。

「こちらに王様と王妃様がおられます。わたくしはこれで」

ゴクンと息を呑み、

「さあ行くわよ…」

「マレーヌ、ドレスのチャックは閉めた方がいいマロ」

うんうんと頷き、アタフタとチャックを閉める。

「マレーヌ、焦り過ぎマロ。落ち着くマロ」

大きく深呼吸をし、ゆっくりドアを開ける。王室は鮮やかな赤茶色の大理石を敷き詰めた豪華な部屋だった。シャンデリアはなく、ランプを使用している。そう思えば、廊下・階段もランプやたいまつだった。火の王国だから火を使う方がいいのかな？

それはともかく、奥には横に広がる階段。1番上に玉座があつて

王様と王妃様が座っている。

「あたしはマリアンヌ・ピアノと申します。こっちはお供のマーロンです」

「そうかそうか、ピアノ…。風の王家のものではないか。いやあ、遙々とようこそ！」

「マリアンヌさんって先日15歳になって誕生パーティを開かれたのよね。おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

「なんだかこの2人面白い。2人のペースで流されてる気がする…。自然と笑顔になるけど。」

「うむう、マリアンヌ姫そなたどうして我が火の王国に？」

「あら、あなた知らないの？この子はこの世界の魔歌を探して旅しているのよ」

「ふむ、それは大変だね」

息ピッタリだなこの2人。会話がどんどん進むもの。そしてあたしは本題にもっていくことにした。

「それで…、魔歌、ありますか？」

「魔歌かあ、マリア・ピアノの魔歌、ううむ何処にあるのだから…ううむ…」

「もしかしてないマロか？」

ずっと話に入れなかったマーロンが口を出した。王様がまたうめいて、

「んん、何処にあるのかわからぬのだ。かなり昔に納められた魔歌で、城に納められた訳ではないのだ。探すように命じるので、少しの間待つて下さるか？数日掛かるかもしれぬから、部屋を手配させよう」

「分かりました…」

あたしはちよつとがっかりして返事をした。

「メイドー、この子に部屋まで案内してちょうだい」

王妃様が声をあげると、メイドが1人現れた。

「ご案内します。どうぞこちらへ」

「あつはい。お願いします」

あたしは微笑んでメイドの後に続いた。マーロンも慌ててついてくる。

部屋まで案内したメイドはこう言った。

「ここがマリアン又様のお部屋になります。お食事は時間になるとお届けしますね。何かありましたら、お部屋のお電話をお使いください。失礼します」

そのまま、仕事に戻っていった。あたしはズカズカと部屋に入り、ベッドに腰を下ろした。

「ふう〜、やっと着いたと思ったのに、肝心の魔歌の居場所が分からないなんて…」

「まあ、そんな簡単に見つかるわけないマロ。ほら、マレー又荷物マロ」

マーロンは気楽に言うと、自分の小さなリュックからあたしの荷物を詰め込んだキャリアバッグを取り出した。あたしはそれをベッドの横に置いた。

そして、ポケットから小型の機械を取り出した。これは通話機能、メール機能、カメラ機能、メモ機能など多種の機能がある機械だ。

名前は『マイコン』（マイコンピューターというそのまんまの名前）。マイコンで何をしようかというところ、

「風の王国に連絡しとくわね。」

あたしのマイコンはタッチ式のスライド型。最新型で高性能だから、すごく便利。あたしの生活にマイコンは必須だわ。アドレス帳を開いて、風の王国をタッチする。すると、発信中となつてすぐに通話中の画面になった。

「もしもし？あたしマレー又だけど…」

『マレー又様ですか！？リアですう。お久しぶりです！』

「リア？全然久しぶりじゃないわよ。まあいいけど…。とりあえず火の王国についたわ。でも、魔歌はどこにあるかまだ分からないって」

『そうですかあ。マリア・ピアノコ様の魔歌となるとそう簡単に見つかりませんよねえ』

リアの声が耳に残る。なんだか体が浮かぶようなフワフワした声。リアって不思議だねえ。

リアってきしゃな体してるのに意外としっかりしてて、みんなから好かれてるし。

お姫様みたいな外見してるし。

リアって名前はマリアから2文字取っただけだし。

なんだか違う意味で懂れる。ん？リア…マリア…マリアンヌ。あれえ、すっごい名前が似てるんだけど！ややこしい。あたしの名前は、両親がマリアみたいな偉大な人になってほしいって願いがあるらしいけど…。

「ねえリア？関係ないけどさ、リアの名前ってどういう意味でつけられたか知ってる？」

ふと、疑問が浮かんだので聞いてみた。リアとは長くおしゃべりをしていない。あたしの話し相手って限られてたから…。昔はあんなだったから…って違う違う。

『どうしたんですか？急に』

「え？えつとリアってマリア・ピアノコと名前似てるじゃん？あたしもマリアにちなんでつけられたから、どうしてかな…って」

あたしは素っ頓狂な声を出してしまった。リアは気にせず、昔話のように語った。

『私が田舎住まいなのは知っていますよね。昔、私の村にマリア様が訪れたそうです。祖父母が幼いころに会ったようでした…。マリア様に憧れたんでしょうね。私の名前は祖父母がマリア様にちなんでつけられたらしいです』

リアの声はどことなくしんみりしていた。たぶん、祖父母はもう

他界していたはずだ。ちょっと悲しい思いさせちゃったかな？

『マレー又様、どうされました？』

「うっん、ありがと。教えてくれて。とりあえず、お父様とお母様に伝えておいてね。よろしく。なんかあつたら、また連絡するわ、バイバイ」

『かしこまりました。応援しております！！失礼します』

通話を終えた。リアの村にマリア・ピアノが行ったんだ。リアの住んでいた村は分からないけど、きっと幸せなところだったんだろうな。リアがあんな雰囲気だから、村の人も家族も周りの人々がいい人たちばかりなのかも。

「マレー又、どうだったマロ？」

「リアに伝えてもらったわ。ちょっと話もできたし」

「そうマロか。リアさんは昔からマレー又と仲良かったマロね。なんだか、楽しそうに話してたマロ」

「そう？まあ、リアと話していると、体がフワフワってなるのよ。不思議と眠くなってきたし…。マーション、あたしちょっと寝るから…」

長旅の疲れがどつと眠気となって押し寄せてきた。マーションの返事を聞かないうちに、寝息を立てた。

『ワーーーイ』 『キヤ~~~~』

どこからともなく、楽しそうな声が聞こえてきた。

「はれ〜ここどこ？」

目をこすりながら、回りを確認する。ぼやけた視界に映ったのは、（公園？）

あたしがいたのは小さな公園。しかも、見覚えのある公園。水色のブランコに緑色の滑り台、大中小の鉄棒、オレンジ色のジャングルジム。

(こっつて...)

そう思った瞬間、1人の男の子がこっつちに向かって走ってきた。ぶつかる！避ける暇もなく、男の子とぶつかった。と、思った。しかし、あたしの体を通り抜け、笑いながら走っていった。疑問に思ったあたしはすぐ、自分の体を見た。ちゃんと体はあるけど、透けてる！？パニックになり、辺りをキョロキョロ。鬼ごっこをしている子供たちの体は透けていない。

(どうして?)

もっとよく見ようと、ブランコをこいでいる1人の女の子を見た。え、あれって…。そんなわけないと思ったけれど、間違いない。その女の子は、紛れもなく“あたし”だ。6〜7歳の“あたし”みただ。小さな“あたし”は鬼ごっこをしている子供達を羨ましそうに見つめている。

「あつ、思い出した」

ふとよみがえったのは寂しい記憶。今になってこんな記憶を思い出すなんて。2度と思い出したくなかったが、リアと話していた途中にふと脳裏をよぎったのだ。

そんなときに“あたし”がブランコから降りて鬼ごっこをしている子供達に歩み寄って言った。不安そうだけど、決心のついた眼差しだった。行っちゃ駄目！手を伸ばして叫んだが、届くはずがなかった。これはあたしの記憶。変える事などできるはずがなかった。

「ね、ねえ…」

“あたし”が男の子に近づいて言った。

「わ、私も一緒に遊んでもいい？」

手を後ろでゴソゴソさせながら、勇気を振り絞って呟いた。その途端、楽しく遊んでいた子供達が、立ち止まって小さな“あたし”をじつと睨んできた。あたしも小さな“あたし”もびくつと体を震わせた。子供達はヒソヒソ話をしていやそうな目で睨んでいる。

目、目、目、め、め、メ…

怖い、こわい、こわい、こわい、コワイ、コワイ、

“あたし”が声を掛けた男の子が口を開いた。

「お前は駄目だよ！母ちゃんが言ってたもん。お前に怪我させたら連れてかれるって」

小さな“あたし”は目にいっぱい涙を溜めている。それなのに子供達は容赦なく、“あたし”にきつい言葉を投げつけてくる。

「お前なんか、自分ちのメイドと一緒に遊んでればいいんだよ！」

「そんな高級な服着て、私たちに見せ付けてるんでしょ！」

「そうよ、そうよ。あんた、自分がお金持ちだからっていい気にならないですよ！」

きつい言葉に合わせて、「そうだ、そうだ」とか、「あっち行けよ」と言つて“あたし”を傷つける。小さな“あたし”は体を震わせて涙を流している。

やめて、やめて、ヤメテ、ヤメテ、ヤメテ、ヤメテ

《お前なんか大嫌いだー！》

あたしの心に、小さな“あたし”の心にグサリと音を立てて突き刺さる。

ネエ、アタシ何力悪イコトヲシタノ？ネエ、ドウシテ？

第1話 新境地と過去（後書き）

こんな悲しい過去があつたなんて!!

と書きながら思いました……。。

最後まで読んでいただきありがとうございましたm( ; ; )m

次回もよろしく願います



## 第2話 双子との出会い

”ガバツ“

飛び起きたあたしは涙を流し、汗をびっしょり掻いていた。目の前に、心配そうに見つめるマーロンがいた。

「ふえ、マーロン…、あたし…」

最後まで言葉が出ず、マーロンにしがみついた。マーロンは静かにあたしに言った。

「マレーヌ、大丈夫マロ。いっぱい泣いていいマロよ」

ポンポンとあたしの頭を軽くたたく。あたしは声を上げて泣いた

少しして落ち着き、あたしが「大丈夫」と言い、ベッドに座りなおした。マーロンの服は濡れてグシャグシャになっていた。でもきつと、あたしの顔の方がグシャグシャだろう。

「マレーヌ、どんな夢、見たマロ？ちゃんと話すマロ。オイラとつても心配マロ」

しゅんとするマーロンにあたしは淡々とあの過去について話し始めた。

話を聞き終えたマーロンは難しい顔をしていた。

「そっか、そんなことも遭ったマロね…。オイラその時は風邪で寝込んでたマロ…」

「そうなのよ、あたしその後すぐ家に帰って部屋で泣いて…。それ以来、同世代の子達と遊びもしなかった。ううん、近寄りもしなかった」

あの時のことを思い出すと、今でも胸が締め付けられる。しかも未だに、同世代の子とは会おうとしない。昔のような目に遭うのが怖いのだ。あたしには友達と呼べる相手がない。あたしより少し年上の家来やメイドがいるけど、本当の『友達』と呼ぶには程遠い。あたしは、心から信頼できる友達がほしい。だけど、どうしても同

世代の子に近づこうとすると、昔の記憶がフラッシュバックのように襲ってくる。

「マレーヌ、この機会に同じくらいの子とちゃんと話せるようになるマロ！」

マーロンがあたしの目をしっかりと捉えて言う。あたしの事を考えていてくれるんだと、心の奥から温かくなる。

「あたしもそうなりたいと思ってるよ。でも、どうやって？」

「それは、えっと、そうだマロ！この火の王国には、マレーヌと同じくらいの王子と姫がいたはずマロ。しかも双子の」

「そうだっけ？知らなかったわ」

「うんうん、これがいいマロね。王様と王妃様だけに挨拶するのもおかしいマロ。挨拶がてらに会いに行くマロ」

「へ??今から行くの？」

あたしの手をグイツと引つ張るマーロン。驚いて、ためらいがちに聞いた。だって、そんな急に話とかできないし、まず会う事自体無理かも…。

「急がば回れって奴マロ」

「わかったよお〜」

マーロンにグイツ引つ張られて、双子の王子と姫の元に向かった。通りかかったメイドによると、ダンスルームでレッスンを受けているらしい。ダンスルームだから、当然ダンスのレッスンだよ。メイドに案内されてきたのは、普通のドアの前。中から、笛や太鼓を使った民族風の音楽が聞こえる。

「こちらです。少し見学いたしましょう」

「は、はい」

緊張で心臓がいつもより大きくなる。メイドがドアを開けると、ワックスの塗られたつるつるの木の床が視界に飛び込んできた。壁はドアがついている壁以外、全面鏡張りで眩しい。

入ってすぐにサングラスをかけた坊主頭の男性。

その目の前には、あたしと変わらない年頃の女の子が2人。1人

は、黒髪の飛び跳ねたミディアムショートで、ティアラをつけている。真っ赤なキャミソールに炎のマークが描かれたスカート。もう1人は、クリーム色の飛び跳ねたショートヘアで、ティアラはつけていない。襟の大きな、薄い黄色のTシャツに、真っ赤なショートパンツ。2人の共通点は、くせつ毛とつま先がくるんとしたミュールと片耳につけているピアスのみ。この2人、双子とは思えない顔をしている。黒髪の子はつり目で、クリーム色の髪の子はたれ目。筋の通った鼻とまあるい鼻。対照的な2人だけど、息ピッタリのダンスを見ていると双子だと分かる。でも、男の子と女の子じゃなかったっけ？

そんなことを考えていると、クリーム色の髪の子がつまずいた。すると、坊主頭の男性が手をたたいて、脇にあったプレーヤーを止めた。

「おい、ファイリー大丈夫か？」

心配すると言うより、あきれた感じだった。ファイリーと呼ばれた子は、

「すみません、先生」

小さな声で言うから、聞き取りにくい。黒髪の子が、

「ちよつとファイリー！これで何回目よ！？パレードも近いのに、ドジってばかり！」

腰に手を当てて、怒り口調で言う。今のが初めてではないようだ。「ごめんね、リリー」

ファイリーはまた小さな声で言う。消えてしまいそうな声。よつほどリリーって子に怒られたんだろう。またリリーが何か言いそうだったので、坊主頭の先生が、

「まあまあ、落ち着け。少し休憩しよう。お客さんも来たようだしな」

とあたしのほうを指差す。びくつと肩が上がった。2人もこつちを見る。な、何言おう。メイドもどこか行ったし、マロンはあたしの行動を待ってるし。うう…。

“ スタスタ ”

「初めまして、リリー・ファランよ」

リリーが近寄ってきて、あたしの手をとった。にっこり微笑んでいる。

「は、初めまして。あ、あたしマリアンヌ・ピアノ。マレーヌって呼んでね」

とりあえず、（カタコトだけど）自己紹介をした。足が震える。

お、落ち着けマレーヌ！

「そう、マレーヌね。OKよ。あそこにいるのは駄目駄目なフィリー・ファラン」

「そ、そんな〜、ひどいよ〜」

フィリーが鳴きそうな声で言う。

「あちらは、ラック先生よ。あたしたちにファイラの舞を教えてくださいださってるの」

ラック先生がうんうんと頷く。

「ええ〜っと、こっちはマーロン・D・ムーケ。あたしのお供なの」

「へえ〜、マーロンね、よろしく」

「よろしくお願いしますマロ」

「うわあ、可愛い！」

「マ、マロ！？」

いつの間にかフィリーがマーロンをつかんでいる。マーロンが可愛いってどうかしてるけど、まあいいか。

「えっと、あたしね、風の王国から魔歌を探す旅で来たの。少しの間、よろしくね」

「そうなの、すごいわね〜。ってあなたってあのマリアンヌ・ピアノコ！？」

「ええ？あのとて…？」

「ほら、数日前にパーティを開いて、マリア・ピアノコを超える歌姫になるって行ったでしょ。有名よ、あなた。あのパーティ、生中継されて世界中で放送されたんですもの！」

えええ！生中継で世界中に放送！？それってアリ！？そんなあたしに、

「あはは、そこまで驚かなくても。僕もバッチリ見たよ」

「ファイリーが言った。んん??」

「え、僕？あなたって男の子なの？」

《プツ！アハハハハ！！》

リリーとラック先生の笑い声。その2人はお腹を抱えて笑っている。ファイリーは真つ赤な顔をして泣きそうだ。あたしとマーロンはこの状況をつかめないでいる。

「ブブツ、まただなファイリー」

とラック先生。

「本当よ！これで何回目かしら。つまずいた回数より多いんじゃない!?フフ」

とリリー。

「ううう、マレー又さん僕はれつきとした、男の子だよ。グスッ」  
目につつすら涙を溜めて訴える。あたしは慌てて謝った。

「ご、ごめんなさい。てつきり女の子かと…」

もう一度、頭からつま先まで見る。本当に男の子なの？ファイリーって肌白いいし、手足は細い。リリーは小麦色の肌だけど、ファイリーと同じく手足が細い。顔は似てないけど、女の子の双子に見えちゃうよ！

「3人とも初めて会ったみたいだし、今日のレッスンはここまでとしよう。」

とラック先生は足早に部屋を出た。それを見送ったリリーが、

「これからどうする？マレー又、あなたって今日来たばかりよね？」

「う、うん。そうだよ」

「それじゃあ、あたしとファイリーが城を案内するわ！時間があれば、街にも行きましようよ！」

「ええ、わかった。ありがとう」

リリーの提案にあたしは賛成した。どんどん会話が進むのは両親

に似てるから？

「オイラも行くマロ！」

マールンはフィリーの腕からするりと抜け出して、賛成した。

「ああ、マールン。じゃ、じゃあ僕も行くよ〜」

よほどマールンが気に入ったみたいで、すぐにマールンを自分の腕の中に戻した。マールンは不機嫌そう。

「あんたは最初から行くの〜」

とリリーがフィリーの左耳をグイッと引っ張った。

「ふぎや。痛いよりリリー。まず部屋に戻ってもいい？」

女の子みたいな悲鳴をあげた。しかも可愛い声で。

「大丈夫よ、順番に案内するから。最後まで待ってて」

「ふあ〜い」

またまた女の子みtainな声で！あたしだってそんな声出せないのに！！

「じゃっ、行こっか。マレーヌ、こっちよ！」

「うん！あっ、待って〜」

ということでもリリーとフィリーに火の城を案内してもらった。フィリーはずっとマールンを放さなかった。

食堂やお風呂、トイレといった普段の生活に使う部屋とか、トレーニングルームやエステルームとか、図書室などを丁寧に案内してもらった。

一時間くらいで城の案内は終わった。今あたしがいるのは、フィリーの部屋の前。右隣はリリーの部屋。このまま、街に行くことになったので2人は支度をしに、部屋に戻った。リリーはすぐに出てきた。特にいる物は無いと言って、お金だけ持っている。フィリーはまだ出てこないなあ。

「フィリー、何してんの！？早くしてよ、この鈍間フィリー！！」

リリーが叫んだ。かなりイライラしてるみたい。

「ちよっと待つてよあ。ないんだもん！」

と返事をするフィリー。すかさずフィリーが、

「ないって何が無いのよ！そんなに時間も無いのよ！」

とまた叫ぶ。リリーの言つとおり日没まであまり時間は無い。

「あれだよお、クマタン専用バツクウ！」

ク、クマタン専用バツク？何それ…？リリーに聞いてみた。

「あのね、あたしたちにお供がついてなくて。その代わりにフィリリーは…」

「リリー！！手伝ってよ〜」

「もう、そのまま持つてくればいいでしょ！さっさとしてよ！」

リリーの一言が効いたのか、フィリーはしょんぼりと“何か”を抱えて出てきた。そうその”何か”とは、クマのぬいぐるみ。しかもへんてこりんぬいぐるみ。これをお供代わりにもっていると言うことね。目つきが怖いんだケド…。

「クマタンが可愛そうでしょ。そのままなんて…」

クマタンの頭をなでる。

「じゃあ、置いてくればいいじゃない！！」

リリーはあきれ返っている。

「そんな〜」

と半泣きのフィリー。そしてリリーは、

「さっ、マレー又行きましょー！」

につこり顔であたしに言う。リリーに連れられて、火の王国の街へと足を運んだ。

## 第2話 双子との出会い（後書き）

どうでしたでしょうか！？

ユニークな双子ではなかったでしょうか？

強気で毒舌なリリー。弱気で女の子に見られがちなフィリー。

マレー又はこの2人と仲良くできることはできますかね〜 W W

最後まで読んでいただきありがとうございます！

感想や指摘、どしどしお願いします〜ペコペコ

次回は双子とお買い物！！

### 第3話 双子と共に（前書き）

少し、更新が遅れてしまいました；；

さあ、双子と共にお買い物に行きます！

ドキドキするマレーヌを引っ張る双子の姉・リリー。

マーロンを気に入った女の子みたいな双子の弟・フィリー。

買い物と前夜祭の話になってます！

どろどろゆっくり

### 第3話 双子と共に

街は先ほどと同じく活気付いていた。人がたくさん行き交う。風の王国だつてたくさん人が行き交っているが、あたしは過去のことがあつて外出を控えていた。でも、こんなに素敵な街並み。存分楽しまなくちゃ！

「マレーヌ、どこか行きたい所ある??」

リリーが歩きながら聞いてきた。

「そうだなあ……」

実の所、行きたいという当てはなかった。それに、同年代の子と話すなんて久しぶりのことで、かなり口下手になつてしまった。言葉がなかなか出てこない。

「2人の行きつけのお店を紹介してもらうのはどうマロ?」

マーションがフォローを入れた。ありがとマーション!!心の中で感謝する。

「いいわね!じゃあまずあたしの行きつけのお店にレッツゴー!」  
張り切るリリーはあたしの手を引く。びっくりしたけど、振り払うなんてことはできず、かえつて嬉しく思った。友達と買い物に行くことこんな感じなのかなつてわくわくしていた。

「ここよ!」

リリーに連れられたのはかわいい雑貨店。ちょっと派手な感じの小物が並ぶ。

「やっぱりリリーはここだね」

フィリーがのんびり言った。

「決まつてるでしょ!?まっ、あんたの行きつけの店なんて承知してますケド!!」

リリーが強気で言った。

「マレーヌ、来て来て。いいものがあるのよ!男子諸君は勝手に見

てて」

「へー？ちよつと、リリー！」

またリリーに連れられ、店内へ入っていった。赤や青、オレンジ、緑、よく見るとエスニックでヒッピーな感じのものばかりだった。おしゃれな女の子たちがじっくり小物を眺めている。出来るだけ、昔のことを考えず、リリーについて行く。

「どう？この髪飾り！！素敵でしょ？」

リリーが立ち止まり、並べられていた髪飾りの1つを頭にかざす。赤くて丸いストーンを囲むようにして白い羽がついた髪飾り。

「かわいい！リリーにピッタリだと思うよ。ストーンの鮮やかさがすごく似合ってる！！」

あたしの言葉にリリーははにかみながら微笑んだ。

「ほんと？やあね、ファイリーと一緒にきて感想聞くのよね。でも、うんいいと思うよ。なんて。適当で！やっぱり女の子と一緒に買い物するのは楽しいわね！」

「そ、そう！？あたしこんなの初めてで…。あたしも楽しい！！」  
リリーは頷きながら、他のものを物色している。

「マレー又は買い物とかしないの？友達と一緒にこついうお店とか…」

「ううん！あまりそういうことしないの！あたしあんまり外出しないから！」

リリーの言葉を遮って、明るく言った。本当のことがばれたくなくて、明るく言った。リリーは少し驚いたようだがかわいいシユシユを見つけてあたしに見せた。

「ちよつと、マレーヌ！これ、あなたに似合うわ！」

白いサテン生地に銀色のラインが入ったかわいらしいシユシユ。シンプルだけど、何にでも合いそうなシユシユだった。

「どうかしら？風の王国って銀色ってイメージがあるから…。マレーヌ、つけてみて…！」

リリーは2つシユシユを取り、あたしに差し出した。2つという

ことは髪につけたらいいのかな？ちょっと緊張しながら、高く縛ったツイントールにつけてみる。

「…っ、つけたよ」

顔を上げて、おずおずと微笑む。リリーは顔を輝かせて、

「うん！あたしの思ったとおり！いいじゃない！！」

「ほんと？ありがと…。うれしいな」

鏡を見て確認してみる。銀色のラインがキラキラ光っている。サテン生地も輝いてる。

「そのシュシュどう？あなたにとっても似合うと思うんだけど」

リリーが様子を見て呟く。

「もちろん、買う！せっかくリリーが選んでくれたんだもん」

髪から取って、もう一度シュシュを見る。なんだか、うれしくなった。初めて会ったリリーに似合うと選んでもらったシュシュ。ずっと大切にしようと思つと決めた。

「んじゃ、あたし他に欲しい物無いから会計しちゃおう？」

「そうする！あたし早くシュシュ買いたい！」

ささつと会計を済ませて店内を出た。しかし、マーロンとフィリーの姿が見当たらない。

「あれ？もしかしてもう行ったのかしら…」

リリーがため息をついて言った。

「どうする？何処に行ったかもわかんないし」

「大丈夫！フィリーのことなら、なーんでも分かってるから。さっ、行こうか」

リリーがずんずん歩いていった。

「待って〜」

置いてかれないように慌てて追いかけた。と、あたしの足元に一枚のチラシが落ちていた。拾って見てみる。

「不死鳥<sup>フェニックス</sup>パレード、ファイアー・1・コンテスト？」

パレードのコンテストの呼びかけのチラシのようだ。手に抱えたまま、リリーを追いかけて聞いてみた。

「ああ、それはね、なんでもいいから自分が得意とすることをやつて、1番優れている人を決めるの！優勝した人は素晴らしい名声をいただけてね、火の王国ではすごく名誉なことなの！」

リリーは生き生きと答えてくれた。

「それに出る為、あたしとフィリーはダンスのレッスンをしたのよ。コンテストに出る為にずっと練習してきて、今年、やっと初出場！ファイラの舞は火の王国の伝統的な踊りで王家の者は必ず踊れなくちゃならない。だからその踊りで優勝できたらすごいと思わない！？」

リリーは今までを懐かしむように話してくれた。その横顔はとても真剣なもので、凜としていた。右耳についているイヤリングが赤い光を放っている。ぼおつと見つめっていると、

「やあね、恥ずかしいじゃない。そんなに見つめないでよ」

「はっ！ご、ごめん。なんだかすごく綺麗で…。イ、イヤリングが！」

勘違いされそうだったから、急いで言い直した。（いや、リリーは綺麗だけど！）

「このイヤリングはアミュレット。火の王家のアミュレットよ。あなたもらつてたでしょ？」

とあたしの首元を指差した。あたしはチョーカーに触れて、聞いてみる。

「これ？」

「そう。王家の者なら王家として認められたときに、証の宝石がついたアミュレットをもらえる。マレーヌの場合、風の王家である証のクリスタルがついたチョーカーね」

リリーの返答に驚いた。このチョーカーがアミュレットだったなんて。ただのアクセサリーかと…。

「そうだったんだ。お守りの効果ってどんなのかな？」

「さあ？あたしのアミュレットの効果でさえ分からないから…」

とイヤリングに触れながら答えるリリー。

「リリーのアミュレットについてる宝石は？」

赤く光る宝石を見つめ、素朴な疑問をぶっかけた。

「これはルビーよ。紅玉とも言われる宝石」

「へえ。赤いから火っぼいね」

「ふふ、そうね。このイヤリングは10歳で1つ、20歳で両方が揃うの。んで、あたしたちは…あたしが右耳でフィリーが左耳につけてって別にどうでもいいわね」

リリーは笑って誤魔化した。なんだかんだ言って、フィリーのことが大好きなんだな。くすつと笑ってしまった。

「ちよ、ちよつと何笑ってんのよ！」

慌てるリリーにあたしは、

「な〜んでもないよ」

納得いかない様子だったリリーだが何かを見つけて走り出した。

「ああ！まっつてよ〜」

追いついた矢先。

” スコーン ”

「いったいーいー！！」

「もう！待ってるって言ったでしょ！？なあと勝手に先行ってんのよー！！」

目の前に頭を抑えるフィリーと拳でチョップを入れるリリーの姿。そのすぐ傍でマーロンが呆然とその光景を見ていた。

「ごめんね、リリー。だって、早く行きたかったんだもん」

「だからって何か言ってるから行くでしょ！？」

とこんな感じで口論が続く。とりあえずスルーして、マーロンに声を掛けた。

「マーロンー！！」

「あっ！マレー又々、助かったマロ〜。次の店に行くとか言い出して、連れて行かれるところだったマロ」

「そうだったの！？いいタイミングだったみたいね」

「うんうん。マレー又はどうだったマロ？」

「とても楽しかったわ。シュシュ、買ったの！しかもリリーが選んでくれたシュシュ！」

「おお、そりゃ良かったマロー！マロー！！？？」

会話の途中、マローンがフィリーに助けを求められ？悲痛の叫びをあげた。

「うえ〜ん、マローン。僕何にも悪いことしてないのに！」

「わっかってるっマツロ！いいから離してマロー！！！！！」

わかってるを言うだけなのに、『っ』がやけに多かった。

「フィリー！！何買った見せなさい！！それで許してあげるわ！！」

「イヤだよ！！…恥ずかしいもん」

イヤだよはハッキリ言った割に、後の言葉は自信なしといった感じだった。

「まあいいわ！！帰ってゆっくりじっくり話を聞かせてもらおうから

！！！」

「そ、そんな〜」

「さっさと帰るわよ、フィリー。さっ、帰りましょう？マレーヌ、

マローン」

あからさまに違う態度。フィリーには無事を祈ることしか出来なかった。

「ふう〜、もうクタクタよお〜」

ドサツとベッドに腰を下ろしたあたし。そしてへろへろとマローンが部屋に入ってきた。

「あのフィリー王子はオイラにベタベタしすぎマロー。大変な目に遭ったマロー」

マローンは疲れた表情でベッドに身を投げた。あたしは苦笑いで、

「ふふ、まあいいじゃない。フィリーに好かれて」

「マローー」

街に行っている間、フィリーはマローンをクマタンと一緒に放さなかった。そしてフィリーはクマタンのバックを買ったらしい。し

かもめちやめちやフリフリな。(by マーロン情報)

街はとてにぎやかで、活気付いていた。リリーによると、パレードが近いので人々が準備に取り掛かり、にぎやかになっているとのこと。パレードは年に1度あり、火の王国誕生を祝うものと言っていた。パレードは火の王国の人以外に他国の人も訪れるほど、盛大に行われるそうだ。風の王国にもそうゆうパレードがあればいいのにな…。

「ところでマレーヌ、パレードはいつ開催されるマロ？」

「ええ〜と、3日後」

「そうマロか〜」

「あ、そういえばリリーとフィリーはパレードのコンテストに出場するみたい」

「すごいマロよね。あの2人はダンスで出場するって言ってたマロね」

リリーとフィリーが踊っている姿を思い出す。一生懸命頑張ってたな〜。

「そうだマロ！マレーヌも出場すればいいマロ〜！」

『出場』という言葉にあたしは驚いた。

「なんで！？あたしが出場しなきゃならないの!？」

「こんな機会めつたにないマロ。大勢の人にマレーヌの魔歌を聞かせるマロ!〜！」

「あたしの魔歌を人々に…?」

「そうマロ。マレーヌの魔歌を聴けば、みんな感動するマロ〜」。

しかも当日までに希望しておけば出場できるって、チラシに書いてあったマロ」

「でも、大勢の人の前で歌える自信ないもの…」

家来やメイドとか、魔歌の先生や両親とか、身近な人の前だったら自信を持って歌える。けど、大勢を前にして歌う自信なんかないけど、もう1人のあたしは歌え歌えてわめいてる。そんなあたしにマーロンの言葉が後押ししてくれた。

「自身なんか必要ないマロ。ただ、みんなが笑顔になってほしい、みんなに元気になってもらいたいって言う気持ちでマレーヌは今まで歌ってたマロ。それを發揮するときマロよ。違うマロ?」

「ううん、違わない。そうよね、魔歌はみんなの為を思って歌うものよね」

「うんマロ。マレーヌ、コンテスト出場するマロ?」

「ええ、もちろん!」

それからすぐ、コンテストに出場する為に申し込みをした。今回は出場するひとが少ないからって、喜んで出場が決まった。毎回約300組出場するのに、今回は180組しか出場しないらしい。頑張って優勝しなくちゃ!...といっても練習する日はほんのわずか。今日はもう遅いし、明日と明後日、明々後日の午前中しかできない。しかも、明後日は前夜祭で夜7時からお城で儀式があるみたい。火の王国誕生説に出てくる『不死鳥』の為に儀式をして、豪華な食事をしてと、みんなが騒ぐそう。ちょっと、心配だけどやるっきゃない!!

～前夜祭～

”ざわざわ ざわざわ”

「騒がしいでしょ。…前夜祭って」

隣でリリーの声があった。周りがうるさくて、かろうじて聞こえた。

「まあ、みんな楽しそうだからいいんじゃない?」

と返した。本当にみんな楽しそう。

「本当は、儀式が終わってからの食事が楽しみなのよね、きつと」とリリーが言った。あたしは今、普通にリリーと話しているけど、それはリリーと(フィリー)が優しくしてくれるからだ。あたしは同じくらいの年の子が苦手だった。少し、ほんの少しだけど、自信が付いてきた。リリーが同じ王家の人だからってのもあるかもしれないけど、すごく楽しい。お城の案内をしてくれたときも、街に行っ

たときも、今も、楽しいときを過ごしている。リリーはサバサバしているので話しやすい。時々、（フィリーに向かつて）毒舌を吐くこともあるけど、それもリリーとしてのいい一部なんだと思う。

「みなさま、静粛に。前夜祭を始めます」

白ヒゲのおじいさんがマイクに向かつて声を上げた。すると、騒いでいた人々が静かになった。ステージの上で白ヒゲの紙を見ながら進行している。あたしは、王家の人に関連する席に座っている。

ステージの真正面に長机が置かれ、そこで座り心地いい真っ赤な椅子に座っている。あたしの後ろにずっとテーブルが何台も置かれて、その周りに5、6人グラス片手に立っている。

ステージの上にリリーとフィリーのお父さんつまり、王様が立ち、挨拶が始まった。

「ええ、本日は待ちに待ったパレードの前夜祭だな。年に一度と  
いうことで他国からも大勢、パレードに参加しようと訪れておられます。誠に感謝申し上げます。今年もまた火の王国として、熱いパレードにしようではないか。」

しかも、今年は100年に一度の『大幸福の年』。ちょうど100年前の『大幸福の年』に、マリア・ピアノが不死鳥と我々火の王国の民の為、魔歌を納めたのだ。そして、その魔歌は100年後の『大幸福の年』の不死鳥パレードで不死鳥と共に今1度目覚める、と書物に記されていた。どのような魔歌は誰も知らぬ。不死鳥の再生と共に魔歌が聞けるのだ。我々は とても素晴らしいときを過ごしているのだと、感じられるだろう」

《フォーー》

”パチパチ パチパチ”

盛大な拍手と歓声が会場に広がった。

「マレーヌ、今の聞いたマロか？不死鳥と共に魔歌が現れるってことマロね！」

「そうみたいね。…なんか、とんでもない時にあたし達はいるのよね！」

王様の話を聞いて、長机座っていたマーロンが興奮して言った。  
100年に1度の時に、再生する不死鳥と一緒に魔歌が現れる。ホント、とんでもない。だって今年、この日（パレードの日）にいないと、火の王国の魔歌を手に入れることはできなかったのよ！？なんかすごい偶然。旅をするのが遅かったり、火の王国を後回しにしたりしてたら、駄目だったってコト。

前夜祭は順調に進み、とりあえず終わった。儀式は退屈だったけど、食事は楽しかったし、豪華でも美味しかった。リリーとフイリーに「おやすみ」と挨拶をして、部屋に戻ってきた。

「うう、マーロン、あたしお腹がはち切れそうだわ」

「オイラもマロ。もっと、控えるべきだったマロ」

チラツとマーロンのお腹を見ると、

「ぎゃ！何そのお腹！お相撲さんみたいよ！？」

短い悲鳴を上げてしまった。だって、マーロンのお腹が服からはみだしてるんだもん。しかも、真ん中の出ベソが目立ってるw

「お相撲さんなんて、言い過ぎマロ」

「そんなこと言われても、お相撲さんとか言いようが無いのよ」

笑)

「うう、言い返せないマロ」

「まあ、明日はコンテストもあるし、さっさと寝ましょ」

あたしはマーロンをユニットバスに入れて、ルームウェアに着替えた。マーロンをユニットバスから出して、（ベッドが1つしかないので、）一緒に寝た。起きた時、マーロンがあたしの下敷きになっていたのは、言うまでもない…。

### 第3話 双子と共に（後書き）

どうでしたでしょうか？

なんと、マレーヌもコンテストに出場することになりましたねえ！

魔歌が不死鳥と共に…復活！？

最後まで読んでくださりありがとうございましたペコ

次回もお楽しみに〜ペコペコ

## 第4話 ケンカにケンカ（前書き）

不死鳥パレード当日です！！

何が起ころるか分からない、ドキドキの幕開けです。

感想お待ちしております〜

どうぞいゆっくり

## 第4話 ケンカにケンカ

不死鳥パレード 当日

「Ah、Ah」

ボイトレ（ボイストレーニング）ルームで今、あたしは魔歌の練習に取り掛かった。まずは、発声練習をやっているけど…。起きたのが8時で焦りまくった。ただでさえ、時間が無いから7時に起きようと思っただのに…。急いで朝食を済ませ、タンクトップとミニスカートというラフな格好で練習を始めた。

コンテストは4時から中央ステージである。中央ステージは中央広場にあるから、そのまま中央ステージと名づけられている。中央広場は普段、人々の憩いの場や市場としても使われているらしい。

そんなところで、パレードが行われるのだから、すごい騒ぎになるだろう。また、中央ステージでは、コンテストの前にも色々なことをするらしい。だから、2時には練習を切り上げて、屋台を見て回ったり中央ステージで行われることを見ておこうと思う。こんな体験初めてだから、めいっばい楽しまなくちゃね！

「よしっ。発声練習はこんなもんでいいか」

「マレーヌ、オイラも一緒に出てもいいマロか？」

マールオンが突然切り出してきた。

「へ？マールオンも一緒に歌うの？ハハハ、無理でしょ」

あたしはマールオンが歌っている姿を想像して言った。しかし、マールオンがモジモジしてるから、あたしはもう一度（今度は真剣に）聞き返した。

「マールオン、あなたにはちょっと無理じゃない？一緒に歌うのは…。それに全く練習してないのに…」

「ち、違うマロ。オイラが歌うなんてとんでもない」

マールオンが慌てて言った。そして、続けた。

「オイラは魔歌に合わせて演奏するマロ」

「え？演奏って、何使うの？」

すると、マーロンが愛用のリュックから小さなギターを取り出した。

「これマロ！このギターは妖精界のギターなんだマロ」  
フェアリーワールド

なぜか、自慢げに言ってるんだけど…。ズバツというけど、あまり自慢する所ではない。

「オイラ、暇さえあればいつも弾いてたマロ。オイラ、妖精界でも結構有名なんだマロ。上手いって評判マロ！それに、マレーヌの魔歌はいつも聞いているから、上手くできる自身あるマロ！！」  
フェアリーワールド

とまた自慢口調。でも、そんなに言うから、上手なのかな？

「ちゃんと、魔歌に合わせて弾けるのね？へましないのよね？練習だって、全然してないのよ？あたしも、マーロンも…」

マーロンに確認する。当の本人は余裕にギターを弾いていた。

“ジャララン”

「任せるマロ！さあ、さつさと練習始めるマロ」

「もう、マーロン、ちゃんと聞いて。あたしにとってはこんなこと初めてなんだよ！？マーロンは妖精界でやったことあるのかもしれないけど、あたしは…」  
フェアリーワールド

「ごめんマロ…。そうマロよね、マレーヌは人前で、しかも誰が見てるのかわからない中で、歌うマロね」

あたしが強く言い過ぎたせいで、マーロンがしょぼんとした。しかし弱々しいけど、でもはつきりした口調で語り始めた。

「オイラは、マレーヌの力になりたいマロ！オイラは何もできないお供じゃないマロ。マレーヌの中ではただのお供って言う感覚だったかもしれないけど、オイラはマレーヌの特別なお供になりたいマロ。家族や兄弟みたいに支えてあげられるお供になりたいマロ」

マーロンはそんな風に思っていたんだ。あたしは、マーロンをただのお供って目線で見っていたのかもしれない。彼の言葉で今、そう気付かされた。マーロンは涙が出そうになるのを堪えながら、

「オイラ、いつかマレーヌの魔歌にオイラのギターを合わせるため

に頑張ってきたマロ。オイラは決して軽い気持ちでコンテストに出ようと言ったんじゃないマロ」

「マローン、ありがと。それからあたし…ごめんなさい。マローンはずっとあたしのそばで支えてくれてたもんね。」

マローンの頬を一筋の涙が落ちる。あたしもいつの間にか涙を流していた。

「あれ？涙が…、えへへ。マローン、一緒にコンテスト出よう！でもって、優勝しよ！あたしとマローンの素敵なハーモニーで泣かせちゃいましょ！！」

そして、2人合わせて笑った。

「いらつしゃい」「これください」「きゃ、こぼしちゃった」  
色々な声が聞こえる。四方から聞こえる声は、どれも喜びや楽しさの声だった。

あたしたちは練習をきりあげて会場に来た。あたしとマローンはかなり息ピッタリで意外にも早く練習を終えることが出来た。

「マローン、このパレードすごく楽しいパレードみたいね」

「み〜んな楽しそうマロ。マレーヌ、オイラも何か食べたいマロ」とマローンが辺りをキョロキョロ見渡している。

「はいはい。じゃあ、あの『火の王国名物・ピリ辛ポテト』食べよっかな〜」

「オイラが買って来るマロ〜！」  
とちゃっかりあたしの財布を持って『ピリ辛ポテト』を買いに行った。

（もう、マローンったら。とりあえず、座るところ見つけに行こっつと）

探してみると、誰も居ない席があった。行こうとしたその時、  
「お嬢さん、かわいいですね」

え？かわいい？まさかナンパ！？くるつと後ろを振り返ると、黒いローブを着た女性が立っていた。

「パレード限定であなたみたいなお可愛い娘にコレ、配ってるの」  
持っていたかごから取り出したのは、

「香水ですか？」

小さなビンにはいつた黒い液。黒といっても、透明な黒ね。

「はい。炎を燃やした後に出てくる灰の成分と特殊なハーブを混ぜ込んだ、香水です。無料で配布しております。さあ、どうぞ」  
「ありがとうございます」

あたしの両手の上にチヨコンとのつた香水。中の液体が太陽の光を受けて、キラツと反射する。顔を上げると、女性はもう居なくなっていた。はや！背伸びして、見てみるけど、人が多すぎて分からなかった。

まあ、いいか。あつと、席とらなくちゃ！急いでさっき見つけた、席に向かって走り出す。

“どんっ”

「きゃっ！」

誰かにぶつかってしまった。

「すみません、だいじょうぶですか？」

ぶつかり声をかけられたのは、（これまた）白いローブを着た女性。こんな日にローブって暑いでしょ！！

「いえ大丈夫です。こちらこそ、すみません…。あ、香水が…」

返事をしたときに、自分の横に割れたビンが転がっているのに気付いた。ビンは無残にもバラバラになり、液体がその周りに広がっている。鼻にかかるのは独特の強めの香り。ハーブにしてはきつい香り。頭がポオツとしてくる。

「ごめんなさい。」

小さな声で謝る女性。その声に我に返った。女性は慌てて、ビンのかけらを拾おうとする。

「ああ、大丈夫ですよ。危ないし…」

あたしが落ち着いて言った。しかし、女性は細く白い指で丁寧にビンのかけらを拾い集めた。そして、こぼれた液体の上で手をふる。液体はすっかりなくなってしまう。周りに広がっていたかおりもすーっと消えていった。

今のは、魔術だろう。そこまでしなくてもいいと思うけど…。

「本当にごめんなさい。お詫びといたらあれなんですけど…」

すつと魔術をかけた方の手を差し出して、あたしの左手の中に何かを入れる。そのまま、すくつと立ち上がり一礼して、走り去っていった。あらら、行っちゃった。あたしのほうも、悪かったのになあ。あたしも立ち上がり、ほこりをはらい、左手を広げる。左手に収まっていたのは、真っ白いハーブだった。

「マレーヌ、遅くなったマロ〜。ん、どうしたマロ？」

とマーロンがピリ辛ポテトを持って走っていや、飛んできた。

「ええと、なんでもない。遅かったわね」

平静を装い、ポケットにハーブを入れた。

「だって、すごい人気だったマロよ〜」

「名物だったみたいだね。とりあえず食べましょ」

幸いなことに、席は空いたままだった。

「う〜ん、いい香りマロ〜」

とマーロンは一本手にとってしげしげと見る。あたしは手に取り、ヒョイツと口に放り込む。その名のとおりピリツとした辛味があった。この味は癖になりそうだわ〜。マーロンも気に入ってどんどん食べている。

「あら、そんなに食意地を張ってるのはマレーヌ姫に、お供のマーロンかしら？」

後ろでからかうような声がした。声の主は…

「リリー！ファイリーも！どうしてここに？」

黒いマントに身を包んでいるリリーとファイリー。不思議に思ったけど、ファイリーに先を越された。

「街を一周してきたから、休憩しに来たんだ」

小声でぼそぼそつと行った。

「大変だったわよ、ホント。つたくう、開会式だけ出ればいいかと思っただのに……」

とリリーはブツブツ独り言を言い始めた。リリーとフィリーは開会式のとときに、火の王国の代表者と一緒に“ファイラの舞”を踊っていた（開会式を実際に見たわけではなく、ボイトレルームのテレビ中継で見た）。2人とも真ん中の方で生き生きと踊っていて、凄くカッコ良かった。しかし、なぜかリリーの機嫌が悪いみたいだ。

「リリー、どうしちゃったの？」

フィリーにこそつと耳打ちした。

「うう、実はね、舞をするのは開会式の時だけって言われてたんだ。だけど、主催者の人が街一周、代表者と一緒に踊って来いって言われて……。練習するつもりでいたのにつて、リリー機嫌悪くしちゃったんだ」

と説明してくれた。

「フィリー王子が怒らしたんじゃないマロね」

マーションがボソツと呟いた。もう、マーションめ！フィリーが涙目に……。

「マーション、ひどいよあ〜。僕のせいじゃないのに」

そんなフィリーにリリーが、

「フィリーめめめそしないの！ああ〜、もうイライラする！あなたはすぐにそうやって泣き出すんだから」

鋭く言い放った。これ、ヤバイ雰囲気かも……。

「そんな、泣いてないよ。リリー……そんなに怒らないでよ！」

フィリーが意外にも強く言った。

「いっつも怒ってばかりで、もっと優しくしたっていいじゃないか！」

今まで溜まっていた気持ちを吐き出すように言った。

「何なの！？怒らしてるのは誰よ！？いっつもあんたじゃない！」

リリーも負けていない。言い争いが激しくなりそう。止めなくち

「やばい!!」

「ちよつと、2人ともやめて!」

「もういいわ。あたし、あんたなんかコンテスト出ないから!」

「…いい、いいよ!!」ぼ、僕だってリリーとなんか…出ないもん!」

あたしの止めも空しく、2人はそんなことを言い合う。リリーは本気で言ったらしい。でもフィリーは流れのままに言ったらしく、言った後にオロオロしている。

「ね、ねえリリー、フィリー、もうちよつと考えない?今まで2人で頑張ってきたんでしょ?」

「そうマロ。こんな簡単に諦めるなんて、絶対駄目マロ…」

あたしとマールオンが説得しようと試みた。しかし、

「フィリー、あんたには失望したわ」

リリーがそう呟いた。フィリーはハツと顔を上げた。今にも涙が零れそう。

「…じゃあね」

リリーの別れの言葉。そう言い残して、リリーは走り去って行った。

「リリー!待ってー!」

叫ぶ弱い声は届かなくて…。涙が地面に滲む。

第4話 ケンカにケンカ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございましたペコリ

## 第5話 仲直りの準備

双子の片割れの声がリリーには届かなかった。フィリーは涙を流して、肩を震わせている。マーロンは自分の一言で事態を招いたのだとオロオロしている。

どうしよう……。リリーはコンテストに出ないって言った。あれが冗談で言ったとは、絶対に思えない。コンテストまであと少しなのに。2人ともあんなに頑張って練習してたのに。こんな仕打ちない！二人を仲直りさせないと……。でも、どうやって？コンテストまで時間もあまりない。それまでにリリーを見つけて、フィリーと仲直りさせるのは難しい。

どうすればいい？あ、そうだ！あたしにだって、できることがあるわ。一か八かも知れないけど、こうするしか方法はない。

「フィリー、絶対にコンテストに出るのよ！」  
フィリーの肩をつかんで強く言った。フィリーは体をビクンとさせた。

「グス、もう無理だよ。リリーがいないと、ファイラの舞は踊れない……」

「大丈夫、ちゃんと仲直りすれば、リリーはきつと……」

「そ、そうマロよ！リリー姫だって許してくれるマロ」

「で、でも、もうコンテストまで時間ないし、リリーは許してくれないよ……」

声が震えている。諦めているみたいだ。

「とにかく、コンテストには絶対出るのよ。あんなに頑張ってたじゃない！」

「でも、僕……リリーの考えてることが分からないよお」  
涙目で訴える。

「そんなことない。あなたはリリーのことを1番分かってる。それにな、リリーもあなたのことを1番分かってるはず。そうでしょ？」

フィリーに優しく問いかけた。フィリーはあたしの顔をじつと見つめて、

「ほんとだよな？じゃあ、リリーは…コンテストに出てくれるよね！？」

フィリーは顔を上げて聞いてくる。あたしはそれにきっぱり答えた。

「ええ、絶対。あなたたちはラストだったわね？？」

「う、うん。そうだけど…」

「じゃあ大丈夫。あたしが何とかする。コンテスト頑張りましょう！マーション、付いてきて！！」

「わ、分かったマロ」

マーションの返事を聞くなり、あたしは走り出した。

人通りの少ない所に来た。

「マレーヌ、どうするマロ？リリーはどこかに行っちゃったマロよ！立ち止まってマーションが言った。

「あたしは最強魔術師マリア・ピアニコの子孫よ！魔歌だけがとりえじゃないのよ！」

腰に手を当てて、鼻を鳴らす。マーションはぼかんと口を開けている。やつの事で口を開いた（既に開けてるから、声を出したかな…）。

「魔歌だけがとりえじゃないと言われても…。どうするマロ？」

「あのね、 “魔術” があるでしょ！」

「ほうほうマロ。それでマレーヌは魔術使えるマロか？」

頷いたのはいいけど、その後の言葉にムツとした。

「使えるに決まってるでしょ！毎日毎日練習してたの」

「へえ、じゃあどんな魔術を使うマロ？」

やっと本題にたどりついた。時間がないのに、もう！

「ビデオレターの魔術よ！名前はあたしが考えたの」

我ながら、素晴らしいネーミングセンスよね

「この魔術はその名のとおり、ビデオレターみたいに映像を遠くの人に見てもらえるの！しかも、録った物を見るじゃなくて、生放送みたいにその時やってることを見れる高度な魔術なのよ！」

「すごいマロ！ビデオレターというよりテレビの生放送マロ！それで、どうやって2人を伸直りさせるマロ？」

マローンの軽いツツコミにドキツとしたけど、それを悟られないように言った。

「ふふーん、とにかく鏡を2つ用意してくれる？」

「えーっと、ちょっと待つマロ」

とリュックの中を探し始めた。そして、2つ小さな手鏡を取り出した。

「OK、ちょうどいいわね。じゃあ、会場に戻るわよ！」

「ええ、それだけマロ？伸直りはどうなるマロ？しかも、ここにくる必要あったマロ？」

また、軽いツツコミを無視し、マローンにウィンクをして宣言。

「まあ、見てなさいって！それと、魔歌変更よ！」

マローンから手鏡を奪い取り、ドレスの右上のポケットに突っ込んだ。会場に直行！

「ああ、マレー又さあん！」

フィリーがパタパタと歩み寄ってきた。

「待たせちゃったね、ごめん」

軽く謝って、受付に近寄っていく、

「すみません、110番のマリアンヌ・ピアノニコですけど…」

「はい、110番ですね。お2人のエントリーでしたね。どうぞ、バツジです。必ずつけて、出場してくださいね。時間まで、会場周辺でお待ちください」

受付の人からバッジを貰い、マーロンとフィリーの所に戻った。

マーロンにバッジを渡して、自分につける。

「マレー又さん…、どうなったんですか？」

「え〜っと、とりあえずあたしの番まで待ってて」

「ええ、リリーはいないんですか？」

困惑状態のフィリー。マーロンが、

「大丈夫マロ。マレー又に作戦があるらしいマロ。オイラも知らないけど…」

しぼった声で言った。あたしは自身ありげに、

「心配しないで、リリーはきつと来るはず。あたしを信じて、ね？」  
微笑んでみせた。

「う、うん」

半信半疑な返事だったけど、フィリーは信じてくれた。

「さあー、始まりました〜、不死鳥パレード最大のイベント、フ  
アイアー・ワン・コンテスト！」

《わぁー》

大歓声に包まれて、コンテストの幕が開いた。コンテスト前はバラバラだった人たちが、会場に集合して一体となっている。

「すごい盛り上がりね」

隣で見ているマーロンに話しかけた。

「そうマロね。マレー又、本当にできるマロ？」

不安げな答えが返ってきた。

「大丈夫よ、魔歌変更はあたしが決めただから」

そう、魔歌変更をして練習したのはわずか数十分。どんなメロデ  
ィーか鼻歌で教えて、1度合わせただけだった。

「違うマロ。フィリー王子達の事マロ。本当にできるマロか？」

マーロンがフィリーを見ながら言った。フィリーはステージから  
離れた椅子に座ってボーっとしている。あたしは本音を言った。

「絶対にできるって訳じゃないわ。そこで、魔歌が大切になるの。」

でもね、正直言って、魔歌が上手くいくか分からない。今回の魔歌は初めて歌うから自信ないのよね〜」

マーロンが反論しそうだったので、すかさず、

「大丈夫だってば。言ったでしょ、あたしはマリアの子孫なの。魔歌は得意中の得意よ。今までたつくさん練習してきたわけだし！」

と笑顔で言った。マーロンはあきれたのか、感心したのか分からないけど、黙ってしまった。あたしは出番までゆっくり観覧する事にした。

コンテストは老若男女、初出場や常連出場者など、色々な人がいた。ジャンルも様々で、歌にダンスにお笑いに得意芸にと、みんな思い思いに披露していた。集まった人々は心から楽しんでいるようだった。マーロンもすっかり楽しんでいるようであった。でも、ファイリーは周りを見渡して、ため息をつくの繰り返しだった。早くあたしの出番にならないかな…。早くしないと、ファイリーまで出たくないって言い出すかも…。

「マレーヌ、もうそろそろ控え室に行くマロ」

マーロンに声をかけられたので、足を運ばせた。控え室前で足を止めた。

「おっと、忘れてた。マーロン裏回るわよ！急いで」

サッツと裏に回った。回ったのは、魔術を使う為だ。ポケットから2枚の手鏡を取り出した。マーロンに手鏡を2枚とも渡して、魔術ノートを下下のポケットから取り出し、ぱらぱらめくった。魔術ノートには今まで習った魔術や効果、準備物、呪文をびっしり書いている。

「いくわよ…。 真実を撮る鏡となれ！」

片方の鏡を指さした。すると、鏡に向かって黄色の光が飛び出した。

「こっちはつと…。 真実を映し出す鏡となれ！」

もう片方の鏡にも同じことが起こった。でも、光はオレンジ色だった。

「黄色のほう貸して」

マーロンから黄色の光を受けた鏡を貰って、あたしの顔を映して見せた。すると…。

「わぁ、マレーヌの顔が映ったマロ〜！」

マーロンから驚きの声が漏れた。あたしは少し微笑んだ。最後にもう1つ魔術をかけなくちゃ。

「んじゃ、マーロンが持つてる鏡をリリーに届けるわよ」

深呼吸して、魔術ノートを見なくてもできる魔術を唱えた。

「風よ、品を使者へと届けよ！」

フワツと風が吹いたかと思うと、マーロンが持っている鏡が浮き、西の方向へと飛んでいった。これでリリーの元に届くわね。

「さっ、控え室で待つわよ〜」

「ええ？分かったマロ…」

控え室で20分ほど待っている、出番になり、呼び出された。

「マーロン、ギターは出来る所だけでいいから」

こそつと声をかけた。

「大丈夫マロ。マレーヌにしっかり合わせて、優勝狙うマロ！」

マーロンが拳をグツと握った。やる気満々みたい。あたしも負けてらんない！！

優勝目指して！双子の仲直りの為！あたしは魔歌を歌ってみんなに笑顔、元気、感動を届けるの！！

## 第5話 仲直りの準備（後書き）

いかがでしたでしょうか？

感想などいただけたら光栄です!!

夏休みも後2日と迫りましたね。

私は今日、宿題が終わりました。。。ぎりぎりセーフです。

みなさんは楽しい夏休みが過ごせたでしょうか？

新学期に入ると、更新率が落ちるかもしれませんが頑張っています！

最後まで読んでいただきありがとうございましたペコ

## 第6話 大切な人へ（前書き）

更新遅れてしまいました！！

リリーとフィリーの仲直りのためにマレーヌが歌います！

どろどろゆっくり お読み（お聞き）ください〜

## 第6話 大切な人へ

「110番、マリアンヌ・ピアノコさん、マーロン・D・ムーケさん、どうぞ！」

司会者があたしたちの名前を呼んだ。2人で顔を見合わせ頷いた。ステージの真ん中に立つ。あたしはスタンドマイクの前に立ち、その隣の小さな椅子にマーロンが座る。

「みなさん、元気ですか？」

マイクに向かって声を出す。大勢の人がイエーイと答えてくれた。「あたしは今、魔歌の練習をしています。ぜひ、皆さんに聞いて頂けたらと思い、出場しました」

一呼吸置いて、

「今回歌う魔歌は、家族や恋人など、大切な人に届ける魔歌です。大切な人の顔を思い浮かべながら、聴いてください」

一礼して、マーロンとアイコンタクト。ス〜と二人の呼吸が合う。

大切なキミを傷つけてしまった ほんの些細なことだったのに

A h 大好きなキミ 一緒にいるといちばん落ち着くんだ

A h キミがいなくて これほど悲しくなるなんて

胸の奥のこの気持ち 炎のように熱く熱く 燃え上がる

キミがいないと僕は 僕じゃないんだ

僕がいないとキミは キミじゃないんだ きつと

分かり合える日が来る そんな日が来るのを信じて

1コーラス歌い終わると、マーロンが引き継ぐようにギターを鳴り響かせた。マーロン、超カッコイイ！さまになってるう〜。ギターが落ち着いた所で歌い始めた。

小さな炎が心の内で灯った あの日の想いが蘇る

そして 夢見た未来が 待っている

手を取り まっすぐ歩いてゆこう

僕はどこまでも歩けるよ 遠く彼方へ

僕はいつまでも灯し続けるよ 希望の炎

キミがいてくれるから

“ ジャジャーン ”

ギターの音で締めくくった。ペコッと一礼。

《フオーーーー！》

拍手の渦が巻き起こる。やった、大成功！！

観客席の人たちは飛び上がったか、泣いたりしている。マーロンが小声で、

「良かったマロね！鏡もぼつちり撮れてたマロ」

と喋ってスピーカーを指差した。そこにはあたしとマーロンが映るように鏡が置かれていた。いつの間にか置いてたんだ。前に出てサッと鏡を取り、みんなに笑顔を見せ、舞台そでに隠れた。

そのまま、フィリーの元へ急いだ。マーロンと話をしたかったけど今はそれどころじゃない。リリーが戻ってきてくれないとあたしが魔歌を変えたり、魔術を使った意味が無い。そう、さっきの魔歌は家族や恋人に向けての大切さを歌った魔歌だったけれど、あたしはリリーに分かってほしかった。もちろんフィリーにも。

身近な人の大切さ。2人は近くに居すぎて、ずっと分からなかった。お互いはいて当然だと思っていたのだ。でもそれはとてもすばらしいこと。あたしは2人としてこう思った。お互いがいてくれないと、リリーとフィリーは本当の自分になれない、と。

「マレーヌ、マーロン！！」

大粒の涙を流しながら走ってくるフィリー。顔を真っ赤にして肩を震わせている。リリーとケンカしたときもこんな感じだったけど、そのときは違う。前は悲しみ、怒り、悔しさといった負の感情を持っていた。今は感動、それから…

「っマレーヌ、すごかったよ。っ僕、いつの間にかこんなに涙が出て…」

微かな声だが、口調はハッキリしている。それだけ、心で感じて心が揺れたんだ。

「聞いてると、リリーのことが頭に浮かんで、急にリリーに会いたくなって」

フィリーは涙が止まらないみたい。だけど、言葉が溢れ出てくる。「リリーに謝りたい。リリーにありがとうって言いたい！！…リリー

にも聞いてほしかった」

「心配要らないマロ！リリー姫にもちゃんと聞いてもらったマロ！」

マーションが励ますように答えた。続けてあたしも、

「フィリーみたいに、リリーも感じてるはずよ？」

と告げた。

「後は出番までにリリーが来てくれればいいんだけど……」

「絶対来る！あの魔歌を聞いたなら来るよ！僕そんな気がするんだ

！！」

不安げなあたしと対照的にフィリーは強く言い張った。

「リリー。どこ？」

風に乗って聞こえた微かな声。すぐにあたしは悟った。

「リリーの声だわ！フィリーを探してる！」

フィリーは敏感に反応した。

「リリー！僕はここだよ！！」

また、涙を流しながら大声で、血を分けた双子の名を呼ぶ。

「どこ？フィリー？ いるの？」

双子の姉も、弟の名を呼び探している。フィリーはしきりに辺りを見渡している。あたしは風に乗る声を頼りにリリーを探す。人が多すぎて何処にいるのか分からない。

そのとき、フィリーのイヤリングが赤く光る。太陽を浴びて反射する光とは違う。何かに反応するようなハッキリとした光。

「何？これ……」

フィリーが左耳にぶら下げているイヤリングに触れる。すると、

光が一直線に光を放つ。

「こっちなんだね！？」

光の方向にフィリーが走り出す。それをあたしとマーションが追いかける。

「見つけた！リリーこっちだよ！」

人ごみの中、手を伸ばす。2人の涙がとめどなく溢れる。こっちまで泣いちゃうわよ……！

「ファイリー!? ああファイリー!!!」

リリーがこちらに駆けて来る。リリーも大粒の涙を流している。周りの人はびっくりして道を開けていく。そして、やっと2人は再会して、抱き合い、その場に座り込む。2人とも名前を呼び合い、子供のように泣いていた。

「マーロン、あたし泣いちゃうかも…」

「マレー又よくやったマロ! 魔歌の力で、2人の心を衝き動かすことができたマロ!!!」

マーロンは興奮している。

「それに格段に魔歌が上達してるマロ!!!」

「ほんと!? あたし上手になったんだね? 自信持ってもいいの!?」  
マーロンに言われて少しずつ自信が湧いてきた。

つて浸ってる場合じゃない。感動するのはいいけど、周りの人たちすごい目で見てるよ! 大声で、火の王国の姫と王子が泣いている。つてとんでもない光景だよ!!! 2人とも未だに涙を流しているけど、落ち着きだしこの状況をすこしずつ飲み込み始めたようだ。

「マレー又! 早くこの2人を他の場所に連れて行かなきゃまずいマロ!!!」

なかなかその場を動けない2人を見て、マーロンがあたしに助けを求めた。あたしは2人の元へ駆け寄り、

「い、言われなくても!!! 風よ、汝とその使者を運べ!!!」

と呪文を叫ぶ。強い風が吹き、4人を空へと舞い上げた。あたしたちは風に乗る、人気の少ない場所を目指した。そして、中央広場からそう遠くない所に降り立った。時間的にも、休憩が入るから問題はない。

「ふう、2人とも大丈夫?」

あたしは肩で息をしながら聞いた。魔歌を歌って、色んな魔術を使ったから、結構体力を消耗したのだ。

2人はほこりを払って立ち上がった。目は真っ赤で腫れている。予想以上に泣いたみたい。

「ええ、あなたたちにまで迷惑かけちゃったわね。ごめんなさい」  
リリーが鼻をすすりながら答えた。

「それから、ありがとう。あたしたちの為にあの魔歌を歌ってくれたんでしょう?」

「ま、まあね 2人にお互いの大切さを分かってほしかったから……」  
リリーに言われて、照れくさくなっちゃった。

「リリーごめんね。リリーは、いつも僕のことを思って怒ってくれてたのに」

フィリーがぼそりと呟いた。

「そんなことないわ。あたしこそ、強く当たってごめんなさい!」

リリーがフィリーの手を取りながら言った。両手をぎゅっと握り締める。

「これからよろしくね、フィリー・リリー」

ほぼ同時に言った。2人は可笑しくなって声を上げて笑い出した。それにつられてあたしもマーロンも一緒になって笑い始めた。笑い声が晴空に響き渡る。

「じゃあ、行って来るわね!」

「ちゃんと見ててね!」

順番がきたリリーとフィリーはそう言って、楽しそうに控え室に向かった。そんな2人を見ているとわくわくしてきた。

「マレーヌ、顔がにやついてるマロ」

マーロンに突っ込まれて、顔を引き締めた。

「だって、楽しみなんだもん!! 2人のダンス!!」  
と笑顔で言った。

他愛のない会話をしながら待っていると、

「いよいよ、ラストとなりました!!! 186番、リリー・ファラン

さんとファイリー・ファランさん!! どうぞ!!」

だが、2人は出てこないし、照明まで落ちてしまった。周りがざわざわし始めた。何かあったのかな? あたしも不安になってきた。

”ドンドコ ドンドコ ドンドコ ドンドコ”

太鼓の音が鳴り始める。

”ジャーン ジャジャジャーン”

琴のような音も鳴り始めた。照明がパツとつく。真ん中にはポーズをとって立つリリーとファイリーの姿。

かつこいい!! 目を輝かせた。

音楽が再度強くなり始めると同時に、2人がバツと顔を上げた。しっかりとした眼差しを向ける。

太鼓の軽快なリズム。広がるような琴。高く響く笛の音色。民族的な音楽に合わせてリリーとファイリーの手が、足が、体全体がしなやかに動いている。2人がぴったりと同じ動きをしたかと思うと、全く違う動きをして、あたしたち観客を魅了する。

音楽が盛り上がり、あたしたち観客を魅了するとき、リリーは左手、ファイリーは右手を、音を立てて手を叩き、

「 炎よ、飛び舞う不死鳥となれ! 」

手を離れた瞬間、叩いた場所に炎が生まれ、その炎は不死鳥の形を成した。炎の不死鳥は3メートルほどの大きさで、2人の周りを優雅に飛んでいる。

「うおお〜」

観客が一齐に声を上げた。あたしもマーロンも他の人たちも心を打たれたのだ。魔術で生み出した不死鳥と共に2人はまた踊る。

音楽が終わると同時に2人が、

「ハッ！！」

と叫び、不死鳥を指差した。すると、あたしたちの頭上にいた炎の不死鳥ははじけ、光となって降り注いだ。夕暮れに染まる空と共に降り注ぐ光は、目を見張るほど美しかった。

あたしたちは盛大な拍手と歓喜の声で2人を称える。しかし、誰かが、

「あれは何だ！？」

活動していない火山を指差した。そこには真っ赤に燃え上がる何かがいた。もしかして、

「不死鳥！？」

あたしは落ち着きながら、しっかりとした口調で告げた。

さつき、2人が魔術で出した不死鳥とは比べ物にならないくらい大きさだった。火山から離れたこの場所でも分かる。8、いや、10メートルはあるだろう。大きな翼をためかせ、こつち向かって飛んでくる！！悲鳴をあげて逃げ惑う人たち。しかしあたしはその美しさと迫力に立ちすくむ。マーロンはあたしにピツタリくつついて怖がっている。コンテスト主催者や警備員たち、リリーとフィリ―は舞台から降りて、必死に人々を誘導させている。

「マレーヌ、逃げるマロ！！ここは危ないマロ！！」

マーロンがあたしの服を懸命に引っ張る。危ないのは分かってる。だけど、あたしは不死鳥を待っていないくちやいけない気がする。それに、

「待つて、マーロン。聞こえない？メロディが…。あたしには聞こえる！！」

そう、風に乗って微かにメロディが、魔歌が聞こえる。その魔歌があたしの体に沁みこんでくる。マリア・ピアノコの魔歌、これが伝説の魔歌…！意識がだんだん遠のいてゆく…。あたしの目の前に不死鳥がゆっくりゆっくり降下してきた。

「マレーヌ、しっかりするマロ！！」

マーロンが叫び、あたしの腕を揺する。はっと我に返る。

”ブワアーアー”

熱い！熱風が吹き上がり、髪やドレスがバタバタと音を立てる。周りに誰もいない。不死鳥は地面に足をつけると。野太い声を辺りに響かせる。

「我は、不死鳥。<sup>フェニックス</sup> 100年に1度、再生のとき時を迎えた。お主は、マリアか？」

不死鳥はあたしの頭の中に、それでいて辺りに広がる声で話す。あたしは手をぎゅっと握り締めた。

「あ、あたしはマリアじゃありません。マリアはあたしのご先祖様でマリアンヌ・ピアニコといます！」

「先祖、だと？マリアは、死んだのか？」

また質問をしてきた。100年前にマリアに会ったみたい。でも、それから100年経った訳だから、こんな質問しなくても…。それでも聞かれたのだから答えた。

「100年前に消息不明になって、亡くなりました」  
不死鳥は一息ついて、

「そうか。マリアから、託された、魔歌は、お主に届いたか？」  
抑揚のない声で不死鳥は話を続ける。

「はい！あたしの体の中に沁みこんでいます！」  
あたしは声を張り上げた。

「ならば、安心だ。我はまた、100年の眠りに、つこうぞ」  
”パアーアー”

白い閃光が不死鳥から放たれた。眩しくて目が開けられない。周りに悲鳴が聞こえる。その中で、不死鳥の声が頭の中で響いた。その言葉は思いもよらないことだった。

「え、そんな！うそでしょ！？」  
驚きのあまり呟いた。返事が返ってくることはないけど…。

そんなことがありえるわけない！でも、不死鳥が嘘をつくとも思えない。

「マレーヌ、マレーヌ！！目を開けるマロ！？」

パツと目を開けた。目の前にはマーロンと双子の姿。不死鳥の姿はもう無かった。

「大丈夫よ。ふ、不死鳥は何処へ？」

ドキドキしながら確認した。しかし、

「それが閃光のせいで見えなくって。誰一人としてわからないと思うわ」

「でも、被害はなかったから良かったね…」

双子がそう言った。あたしは力なく頷いた。そして、2人は観客を呼び戻す手伝いに行った。

「マレー又どうしたマロ？何かあったんじゃ…？」

マーロンが察したように聞いた。あたしはまだ心の整理がつかなかったので、

「後でゆっくり話すわ。今はコンテストの結果に集中しましょ、ね？」

マーロンの目を真っ直ぐ見ていった。何か言いかけたマーロンだったが、あたしの目を見て理解してくれたようだ。

「ありがとう、マーロン」

## 第6話 大切な人へ（後書き）

どうでしたでしょうか？

2人は仲直りできて嬉しいばかりです！

さあ、火の章も終わりへと向かっていきます！！

読んでいただきありがとうございます！

次話もお楽しみに！

第7話 結果発表！？（前書き）

コンテストの結果がついに発表されます！！

結果はどうなるのか〜！？

どんぞいゆっくり

## 第7話 結果発表！？

満席の客席は落ち着きを持たず、興奮を隠せない。

コンテストはすぐに再開。という訳にもいかなかった。被害は出なかったけど、審査が長引いたの！結果はどうなったのか…。長引くほどだから…。うう、考えるのが怖い！！

「大変長らくお待たせしました！！ファイアー・1・コンテストの審査発表です！」

「……イエー……イ……！」

「受賞は優勝、準優勝、特別賞が1組ずつ、審査員賞が3組ずつ。計6組です！」

6組かあ、狙うは優勝！心臓がバクバクする……！！

「まず、審査員賞からです。1組目は……」

審査員賞では呼ばれなかった。安心したような、不安なような。残り3組。この中に入らなければいいんだけど……！

「次に特別賞の発表です！特別賞は、エントリー？25ポラポラ団の皆さんです！！おめでとございます……！」

受賞したポラポラ団は、7人の人たちが愉快的芸を披露していたものだった。サーカスを見ているような気分でかなりの観客の人たちが楽しんでいた。

「続きまして、準優勝です。準優勝は、エントリー？110マレーヌ・ピアノさんとマーション・D・ムーケさんです！おめでとございます……！！」

「やったー！マーション、準優勝よ……！！」

あたしたちの名前が出た途端飛び上がった。周りの目も気にせず、舞い上がる。マーションを掴んで、ぎゅっと抱きしめた。マーションがペチャンコになりそうだったので離してあげた。

「やったマロ……！優勝じゃなかったのが悔しいマロね……！！」

と言ったが、満足している様子だった。あたしも同じ。

「では、優勝の発表です!!!唯一、栄光に輝いたのは...?」

”ダダダダダダダダダ　ダダン”

照明が落ちて、ライトが回り、太鼓が鳴り響く。そして照明がパツとつく!

「エントリー?186リリー・ファランさんとフィリー・ファランさんです!!!!!!おめでと~~~~ございませ〜す!!!!」

「~~~~~~~~!!!!!!」

”パチパチパチ”

拍手喝采の中、あたしの隣で泣き声が…。リリーとフィリーだ。

「フィリー、ゆ、優勝よ~~~~!!!!」

「リリー、やったよ~~~~!!!!」

その後ろでサングラスを外して二人の肩を叩く、ラック先生。

「お前ら、よくやったぞ!!!!うっ、先生はうれしいぞお!!」

3人で泣きながら喜んでいる。

「受賞された6組のみなさん、ステージへお上がりください!!!表彰式を行います!」

あたしはマーロンを肩に乗せて、双子と共にステージへ向かった。

ステージに上がった人たちは凜とした表情で。

あたしたちは賞状と小さな銀色のトロフィーを貰った。リリーとフィリーは賞状と金色の大きなトロフィーと真っ赤なローブを貰っていた。羨ましい!!!!

最後に優勝した2人が挨拶をした。

「みなさん、リリーです。あたしたちは優勝を目指してずっと頑張

つてきました！今この瞬間をいつまでも心に刻み、一生忘れません！本当に優勝をありがとうございます！！！」

「僕はこのコンテストで、リリーと言う双子の存在を、改めて大切だと感じました。リリーがいてくれたから、僕がいて、ここで優勝することが出来ました！もちろんたくさんさんの支えがあつての優勝です！！」

2人の挨拶にはまた拍手喝采だった。会場全体が拍手で包まれる。そんな中、2人を見つめながら、

「双子っていわね」

賞状を大事そうに抱えるマーロンに耳打ちした。

「そうマロね。マレー又にも双子や兄弟がいなくても、オイラがついてるマロ！」

マーロンが胸を張って囁き返した。あたしはその言葉にちょっと照れながら、

「そうね。マーロンはあたしの家族で兄妹だもんね　ありがとう！」  
感謝の言葉をそつと呟いた。

あたしたちの準優勝も、双子の優勝も、マーロンの言葉も心の底から嬉しく感動で…。会場の人たちの笑顔も、歓声も心を打つもので…。

大歓声に包まれながらコンテストの幕は下りた。

火の城に戻ると、リリーとフィリーの優勝、あたしとマーロンの準優勝でお祭り騒ぎだった。

前夜祭であんなに大騒ぎしたのにまたまた大騒ぎ！？と思っただけ、王様たちがお祝いしてくれるのを見ると、すごく気持ちが良いか

った。あたし以上にリリーとフィリーは喜んでいた。だって、ずっと練習してきて想い入れあるからね。みんなにトロフィーと賞状を自慢げに見せていた。王様と王妃様は目に涙を溜めて、とても嬉し  
がっていた。

夕食会は1時間ほどで終わり、部屋に戻ろうとした。

「マレーヌ、ちよつと！」

リリーがあたしを呼び止めた。隣にフィリーが立っていた。

「今日は夜更かしOKって言われたの！この後あたしの部屋に集合よ」

「お菓子いっぱい用意しておくから！お菓子パーティだよ！！もちろんマーロンも来てね〜」

ウイंकをするリリーと親指を立てるフィリー。あたしは顔を輝かせて、満面の笑み。

「分かった！部屋に戻って、すぐ行く！！」  
走って部屋に戻った。

部屋に戻ってトロフィーなどをテーブルへと移した。このまま眺めてたい所だけど、お菓子パーティに呼ばれたんだから急がなくちゃ。マーロンを部屋から出して着替えた。ドレスを脱ぐと、体が軽くなった。きつと一緒に緊張や疲れがとれ、心も軽くなったんだと思う。ルームウェアにパーカーを羽織り、マーロンを部屋に入れて聞いてみた。

「マーロンもいくでしょう？お菓子パーティ」

「ん〜っと、行くマロ」

マーロンは少し考えて答えた。あたしはククツと笑って、

「フィリーに捕まるのがこわいんでしょ！？」

ズバリ言っちゃった。

「まあ、それもあるけど…。マレーヌの話聞いてないマロ〜」

ぼそぼそと言った。あたしは何のことか分からなくて、口を開こ

うとした。

「どづいづ…」

「さあ、リリー姫の部屋に行くマロ〜」

と遮られてしまった。疑問を抱えたまま、足を運んだ。

リリーの部屋では既に双子が準備をして待っていた。お菓子とジュースがたくさん置かれた丸いテーブル。リリーに手招きされ、リリーの傍のオレンジ色のクッションに座った。マーロンが困っているとフィリーが一回り小さなクッションを出した。フィリーはニコニコして、リリーはあきれていた。とりあえず、出されたクッションに座り、お礼を言うのと固まってしまった。

「つま、とりあえず、盛り上がるわよ!」

リリーが第一声をあげた。続けてフィリーが、

「準優勝と優勝を祝して乾杯だよ〜」

ジュースをグラスに注いで、みんなが手に持つと、フィリーが声を上げた。

「かんぱ〜い!」「かんぱ〜い!」「かんぱ〜い!」「かんぱ〜い!」

”カーン”

心地よい音が響いた。そこから、他愛のない会話が始まった。同じ年頃の子とこんな話すの初めて〜!リリーとフィリーが王家の人だからってのも普通に話せるのかもしれないけど。でも、こんなに簡単なことなんだもん。他の子達とも普通に話せるようになって、仲のいい友達ができるよね!?

パレードの話になっていた。

「ねえねえ、あの時、リリーとフィリーのイヤリングが光ったけど…。あれって、アミュレットの効果だよな?」

あたしはずっと思ってたことを口にした。2人がケンカをして、再会するとき。イヤリングから赤い光が放たれた。2人のイヤリン

グが共鳴するように…。

「お父様に聞いたなら、心の意思がイヤリングに伝わって、2人を巡り会わせる力となった…んじゃないかって」

とリリー。

「このイヤリングは昔、僕らみたいな双子が使ってたて、2人が離れ離れになったとき、会いたい！って強く願うとお互いのイヤリングが反応したんだって。だから、このイヤリングは気持ちをつなげる、アミュレットだって言ってたね」

とフィリー。

「ふーん。じゃあ、あの時、2人の気持ちはつながってたんだね」  
あたしが思い出しながら呟いた。2人は顔を見合わせて、苦笑した。照れ隠しだな。ほんと双子っていいな。

そしてリリーは何かを思い出したみたいで顔を曇らせた。心配して声を掛けると、

「あのね、あなたたちを呼んだのは相談があったからなの」  
そして、リリーはパレードでの出来事について、重々しい口調で話し始めた。

「パレードでフィリーとケンカしたでしょ？今思い返してみると、気になることがあってね。マレーヌに会う前、中央広場に向かった時…。フィリーがトイレに行ってる間に女の人に声を掛けられたの。その人ったら頭からすっぽり真っ黒のローブを被ってて、見るからに怪しそうだったわ」

黒いローブの女の人…。

「あたしも話しかけられた！！その後、黒い香水をもらった…！」  
ふと思い出して立ち上がった。

「そう、あたしも貰ったの。リラックス効果があるって言われて…」  
リリーはあたしに座つてと笑いかけ、話を続けた。

「どこか行っちゃったから女の人には知らないけど…。気にせずつけてみたら、なんだか嫌な気持ちにが溢れてきて…。怒りとか悲しみとか嫉妬とか、色んな負の感情が…」

と言うと身震いした。フィリーが話を紡いだ。

「僕が戻ってくると、リリーの足元に割れたビンが合って…。香水は無かったよ。」

どうしたのって聞いたけど、既に機嫌が悪くて…」

そこまで言うと、フィリーも黙ってしまった。あたしは自分の体験を話す。

「あたしは他の人にぶつかって、ビンが割れちゃって、香水は魔術で消してもらったの。だから、何もなかった…」

言った後に、あたしはラッキーだったんだなと思った。あの香水を知らずに使ってたら、あたしも大変な目に…。想像しただけでも背筋がゾクツとする。あつ。あの後貰った、ハーブ…ポケットに入れたままだ。くしゃくしゃになってるかな？

「そっか、良かったじゃない。あたしたちに配ってたってことは他の人たちにも…」

リリーがそつと呟いた。みんな一斉に顔を強張らせた。と、ここでマーロンが切り替えるように、

「あつ、マレー又も何か他の話があったんじゃないマロ？」

明るく言った。まだ何の話か分からない。そんな顔をしていると、  
「ほら、不死鳥に会ったとき、何かあったって…。後でゆっくり話してくれるんじゃないマロか？」

思い出した

硬直するあたしをよそにリリーとフィリーは楽しそうに、

「でも、本当に不死鳥が出てくるなんて思わなかったわ」

「うん！しかも、マレー又は不死鳥と話してたし。あれ？マレー又どうしたの…」

フィリーがあたしを覗き込む。あたしは震えながら、

「あのね、不死鳥が消えるときに、あたしにあることを言ったの」  
俯きながら話すけど、みんなの視線を感じる。言ってしまったもいいのか？こんなこと信じるのかな？でも、言わなきゃ。顔を上げ、とんでもない事実を告げた。

「不死鳥が…」マリア・ピアノコは生きている”って…」  
その瞬間、静寂が訪れた。

「それは、ありえない話では…ないかもしれないマロ」

静寂を破ったのはマーロンだった。みんなが彼を見つめる。

「不死鳥は『不死の玉』と言うものを持っていて、それを授かった者は不死…、不老不死になれるって伝説があるマロ。で、でもあくまで伝説マロよ!？」

「そんな伝説があったなんて。でも、その件と黒いローブの女性の件は関係なさそうだね!」

フィリーがなるべく、明るい口調で。続けて、

「でも、調べないと駄目だね。マレーヌ、この2つの件は僕らが引き受けるよ!」

頼もしい言葉がフィリーの口から出た。

「マレーヌは、旅で忙しいだろうし、不死鳥のことについては火の王国の方が詳しいしね!黒いローブの人の件は被害に遭った人たちは火の王国にいるだろうし!」

「そうね!フィリー、あんた意外とやるじゃない!」

頼もしいフィリーにリリーは驚きの声を上げる。フィリーは照れて、頬を赤らめている。

「ありがとう!! すごく助かる! あたしもマリアについて詳しく調べてみる! 全部2人に任っせきりは駄目だもん!」

「このことはあまりしゃべらないほうがいいマロね。この2つの件はみんなの秘密マロ!」

「おお、それってかっこいいわね。まあ、しっかり調べて解決させましょ!!」

マローンの意見に賛同するリリー。

「これから大変なことが起こるかもしれないけど、僕たちならやれるよね!？」

「ええ、絶対やれるわ!! がんばりましょ!!」

「」「」「エイエイオー!!」「」「」

フィリーの言葉にあたしが力強い返事を返し、みんなで頑張ることを決意した。

「ところで、マレーヌ、あなた火の王国はいつ出発するの?」

「えっと、明日の午前中には出発しておこうかなって。次は水の王国に……」

「わかったわ。フェリーの手続きをしておくわ」

リリーが早口で言った。手続き? 質問しようと思ったけど、先を越された。

「もう遅いし、寝ましょっか。マレーヌたちは明日出発するんだし。おやすみ!」

「」「おやすみ!」「」

リリーは片づけを始め、手伝いを申し出たが「早く寝なさい」と言われた。朝も早いので甘えさせてもらった。

楽しいお菓子パーティーもお開き。厄介な事だらけだけど、きっと大丈夫。なんだか強くそう思えたの。

第7話 結果発表！？（後書き）

どうでしたか？

問題ばかりですが（汗）きっとマレーヌたちなら心配は要らない  
！ハズ？

最後まで読んでいただきありがとうございますペコペコ

感想などお待ちしておりますペコペコ

## エピローグ 悲しい別れなんてない！！

（翌日）

「リリー、フィリー、短い間だったけど、本当にありがとう！！」  
あたしは双子に心からの感謝の気持ちを込めて言った。潮風があたしの髪を優しく撫で付ける。ここは火の王国の船乗り場。リリーが気を利かして、水の王国行きフェリーを手配してくれたのだ。  
「マレーヌ、魔歌探し頑張っただね！あたしたちも色々頑張るから！！」

「うん！あたし、他の国の魔歌もちゃんと手に入れてみせる！」  
笑顔で言葉を交し合う。そして、無言であたしはスツと髪にあるものを着ける。すると、同じ事を考えたのか、リリーもあるものを着ける。

「あたし、これ一生大事にする！！」

着けてから同じ言葉を発した。あたしはシュシュを。リリーは髪留めを。

「はもっちゃったね」

「ふふ、シンクロだわ！」

お互い微笑んでぎゅっと抱きしめた。隣でフィリーが

「マーロン、僕、君に会えなくなると思うと、さびしいよ」

涙声であたしじゃなくて、マーロンに。ちょっと期待しちゃったじゃない。

「オイラは安心…じゃなくて、寂しいマロ」

マーロンはぎこちなく答えた。吹き出しそうなやり取りだ。マーロンはフィリーに抱きしめられて、やっと放してもらえると、さつとあたしの近くに逃げてきた。そして、慌てて言った。

「リリー姫、フィリーをしっかりと鍛えてやって…じゃなくて、フィリーと仲良くしてくださいマロ。マレーヌ、時間マロ」

「もう、マロンったら。フィリー、あなたは結構強いんだから！  
！リリーと一緒に頑張ってね！」

双子は満面の笑みで頷く。

「じゃあ、お別れだね。さよなら、リリー、フィリー」

別れの挨拶を告げて、フェリーに乗り込んだ。

”ホーーーーー”

船の汽笛がなる。出航の合図だ。階段を駆け上がり、甲板に向かう。そして、甲板から身を乗り出して、手を振り叫ぶ。

「ありがとうーーーーー！！さようならーーーーー！」

船乗り場から、双子が手を振り返す。

「バイバイ！」

あたしたちはお互いが見えなくなるまで手を振り続けた。

汽笛の音と共に不死鳥の鳴き声が聞こえた気がした。

エピローグ 悲しい別れなんてない!! (後書き)

火の章やっとなりです!!

みなさんのおかげで完結までこぎつくことが出来ました。

本当にありがとうございました!!

次回から、水の章に入ります

これからもどうぞよろしくお願いします ペコリ

## プロローグ 魔術・魔力について

この世界に住む人は大抵魔術が使える。

それは自分の中に魔力が存在しているから。その魔力で魔術が使える。

魔力は普通の人より、あたしたち王家の血筋を引くものが強いとされている。

普通の人で強いつて人もたまにはいるけど、

基本的に、王家の人の方が強い…らしい。

強いから、国を支配できる。魔力がないと、人々に認めてもらえない場合があるからね。

皮肉な話よね。

今は力で支配することはないけど、でも、魔力を持ってるほうがいいんだって。

それじゃあ、魔力を持ってない人はどうなるかって？

あたしには分からない。

普通の人が魔力を持っていないのは別に問題はない。

でも、王家の人の場合…。どうなるんだろうね…。

水の王国。豊富な水に囲まれた清らかな国。

水のように清らかな心をもって

水のように流れに逆らうことなく意志を貫く人が待っているはず。

だから、水の王国の魔歌は水のように汚れのない美しく澄んだ魔歌なんだろうな。

プロローグ 魔術・魔力について（後書き）

水の章、始動です！！

私も学生でなかなか更新できませんが…

温かい心で読んでいただけたらと思いますペコ

次回からお楽しみに！！！！

## 第1話 船の中（前書き）

運動会も終わり、頑張って更新したいと思います！

始まりはフェリーからです。

ここで新たな出会いが……！！！！

どしどしゆっくら

## 第1話 船の中

「ああ〜暇だわ〜」

水平線をボーッと眺める。

火の王国から水の王国行きのフェリーに乗って1時間。あたし、船に乗るのは初めてで、ひたすら待つのは苦手。だから退屈だ!! 後1時間も何をして待つてろって言うの!?

「仕方ないマロ。だって、水の王国まで遠いマロから」

「マーロンは宙をただよいながら呟いた。

「マーロン、あたし寝るね。時間になったら起こしてちょうだい」  
力なく言って、客席に戻る。そこに、

「お姉ちゃん、お船の後ろにプカプカ浮いてるの」

と小さな男の子が服を引っ張ってきた。フェリーの後ろを指差している。

「んん??そこに連れてってくれる?マーロン行くわよ〜」

興味をそそられ、あたしは男の子に案内してもらった。眠気も吹っ飛び、わくわく。

男の子が連れてきたのはフェリーの後方で下の海を指差す。

「あのね、このロープの先に何かくっついてるの。海の中でね、あつ、ほらあれ!」

手すりにきつく縛られたロープは海の中へ消えたいった。でも、光が反射したときに大きなタルが見えた。異常なほどに大きなタルから筒のようなものが出ている。

「怪しいわね。ありがとね、僕。危ないかもしれないから、中で隠れててね?」

男の子はこくと頷いて走り去った。

「オイラが引き上げるマロ!!」

マーションが両腕にはめられたリストバンドを外す。

マーションは20センチくらいの妖精だけど、見た目と裏腹に怪力なのだ。マーションを甘く見てると痛い目見るのよ。普段はリストバンドで力を押さえつけてるから心配要らないけどね。それに、彼は温厚な性格だから、怪力で暴力を振ることなんてないから。

「うぬぬぬぬぬ〜マロオ!!」

”ザバーン”

お見事!ロープが波打って、タルは空へと飛び出した。そして、タルは甲板へ向かって勢いよく…

”バリバリバリ”

甲板に激突し、タルは真つ二つに割れた。中から生まれたのは…?  
「いってーな〜って…お前!?!」

「ハラペコ3人組!!」

コツペ・ラハ、チョーウ、ナノレスのハラペコ3人組が生まれた。じゃなくて、出てきた。

「うう〜2度と会いたくない奴らマロ〜」

マーションの言葉にあたしは同感だった。

「なんだと〜」

「だと〜」

「だと〜」

ペッコ・ラハの後に続くチョーウとナノレス。しかしここで、突然声が響いた。

「ここですわね!!」

3人組の後ろから、長く艶のある黒髪の女の子が現れた。あたしと同じくらいの年。

「ここは危ないわ!戻って!!」

あたしはとつさに叫んだ。人質に取られたりしたら大変なもの!女の子はワンピースの上に着物を羽織っている。淡い青色の布地に、水の模様が描かれた高級そうな着物。長い髪を後ろで束ね、い

かにもお嬢様。しかし、この状況を見て、逃げずに声を張り上げた。「そこのおかしな3人組!!!ここで何をしているのです!?!」

か弱いイメージが吹っ飛んでいくような口ぶり。ハラペコ3人組は、目を丸くしている。

「今だ!魔術を使おうとした。」

「すぐに答えられないと言っなら、見過ごせませんわ!観念なさい!!!」

水よ、龍となり邪悪な者を追い払え!」

女の子に先を越され、魔術を唱えられた。海の水が伸びてきて龍となった。龍は3人組に向かい、大きな音を立てて、3人組を空高く飛ばしてしまった。そして、また捨て台詞を残す。

「船の豪華な食事が食べたかっただけなのにー!」

「「ハラペコ、グー!」

”キラーン”

「あなた方、大丈夫ですか!?!」

女の子が心配そうに駆け寄ってきた。あたしたちは苦笑して、「はい、大丈夫です。いいところ取られちゃったね、マールン」

「そうマロね。それにしてもあの3人、こりないマロね」

安否を確認すると、女の子は頷いた。

「私、サラサ・イネットと申しますわ」

その名前を聞いてマールンが目をぱちくりさせた。

「イネット?王家のものマロ?水の王国の...」

「ええ、そうですね。水の王国の姫ですわ。もしかしてあなた方も...?」

「あつ、はい。あたし、風の王国の姫で、マリアンヌ・ピアノコです。こっちがお供の...」

「マールン・D・ムーケですマロ。なぜ、すぐにお分かりに?」

マールンが自己紹介をして、唐突に言った。

「マリアンヌさんは生誕パーティーで有名ですわ?それに、火の王国のコンテストでお2人は準優勝になられたと聞きましたの。15歳と準優勝、おめでとう」

笑顔で答え、お祝いまでしてくれた。

「ありがとうございます。えっと、サラサさんは何歳なんですか？」

「私も今のところ15ですわ。でも、今年で16になりますの」

あたしの1つ年上かあ。それにしても年下と分かってても丁寧なしゃべり方…。

「とにかく、ここで立ち話するのなんですから、一旦客室に戻りましょう?」

手招きをして、サラサさんが言った。

連れてかれたのは一般の客室じゃなくて、サラサさんの個室。

中にはソングラスをかけたスーツの男性が、白ひげのおじいさんが待っていた。スーツの人はドアのすぐ近くで、おじいさんは窓の近くの椅子に座っていた。

「じいや、ウオーテル、今戻りましたわ」

サラサさんが静かに言った。じいやさんはピョコピョコと近づき、ひげで隠れた口から声を出した。

「心配しましたぞ、姫!はて、この方はどなたかの?」

「こちらはマリアンヌ・ピアノさんとマーロン・D・ムーケさん

「ほう!ピアノコとは風の王家の者ではござらんか。ささ、お座りください」

椅子を指差して言った。あたしは慌ててじいやさんに、

「あ、あたしは大丈夫ですよ??お構いなく、座ってください」

「いやいや、このじいは大丈夫ですぞ。じいだと思って甘くみなさんな、ほっほっほ」

と軽く笑って、あたしを椅子に座らせた。サラサさんはふふつと微笑み、

「マリアンヌさんは魔歌探しの旅で水の王国に?」

「そうです。あっ、マリアンヌじゃなくてマレーヌって呼んで下さい」

「あらそうですの?じゃあ、私のことはサラサとお呼びになって。」

それに敬語は使わなくても良くてよ？マレーヌ、マーロン、水の王国へようこそ。でも、まだ水の王国じゃありませんわね」

楽しいサラサ。

「ありがとうサラサ。少しの間よろしくね」

「なんだか楽しくなりそう。」

「ええよろしく。こちらの紹介がまだでしたわね。こちらはじいや、ロベル・タイタン。水の王国に勤めて長い。王様の補佐役ですわ。」

そして、こちらがウォーテル。ウォーテル・スイーザ。私の執事わたくし兼ボディーガードよ」

「どうぞ、よろしくですじゃ」

「…どうも。自分のことはお気になさらず」

2人は挨拶をして、頭を下げた。あたしも慌てて頭を下げた。

「あの、サラサ姫は何の御用事でこの船に乗ってるマロ？」

「不死鳥パレードに呼ばれてましたの。でも、開会式しか出席してなくて…」

サラサはマーロンの質問に恥ずかしそうに答えた。

「実は、開会式から体調を崩して…。パレードやコンテストが拝見できなくて、残念でしたわ。今はもう元気ですけど…」

頬を赤らめた。あのパレードを見られなかったなんてほんと残念。あたしは励ますように声を掛けた。

「そうだったんだ。でも、来年もあるだろうから、大丈夫よ！」

「うふふ、そうね。ありがとうマレーヌ」

といった風楽しい会話をして、水の王国に到着するのを待った。

「マレーヌ姫よ、我が国についてたらどうなさるのじゃ？」

じいやさんに聞かれた。

「えっと、まず王様たちに挨拶して…。それから魔歌を探すので…。」  
「そうですか。よかったですな、姫」

「ええ？その魔歌はすぐに用意できるんじゃないやなくて？」

「マリア・ピアニコが納めた魔歌ですからな。本で読みましたが、その国で起こる難を解決することで魔歌が手に入るそうですぞ」

へえ、そうなんだ！でも、火の王国の難って？リリーとフィリーを仲直りさせたこと？仲直りで魔歌が手に入るってどうなのかな…。コンテストで準優勝したこと？でも、普通なら優勝だよな。

とにかく、水の王国でも頑張らなくちゃ！！

「皆さん、着いたようですよ」

ウォーテルさんが静かに告げた。いよいよだわ！拳をグツと握り締め、気を引き締める。サラサが、

「もちろん、私達と一緒<sup>わたくし</sup>に城まで行かれるのよね？」

とにっこりした。あたしはぺこっと頭を下げて、

「よろしく願います！！」  
にっこりした。

いよいよ水の王国だ！！

## 第1話 船の中（後書き）

水の王国のサラサ。礼儀正しく、真っ直ぐな女の子です！！

水の王国で、何が起ころのか！！

最後まで読んで下さりありがとうございました！ペコ

次回もよろしくお願ひしますペコペコ

第2話 魔歌の行方（前書き）

第2話です！！

水の王国に到着ですね〜

かわいい新キャラもちよっぴり登場です！！

どろどろゆっくら

## 第2話 魔歌の行方

馬車に揺られること、数時間。ここ30分は街を通っていた。ここまで辿り着く間、川がたくさんあった。そして、その水源は…

「おつきい！あの真ん中にあるのが、水の城！？」

声を上げるほどに広がる湖。水平線にのび、底が透き通って見える。その真ん中にたたずむ、和風なお城。水の王国はこんな風になつてるんだあ！

「城に行くのには、この屋形船に乗っていきますの」

サラサはにこやかに屋形船に向かう。あたしとマーロンも後に続く。

屋形船の中は、畳が敷き詰められて、中央には長いテーブル。壁は全て障子張りで、外の景色を楽しめるようだ。中央にサラサ、その隣にじいやさんが座る。あたしはサラサの目の前に座った。ウオ―テルさんは入り口の近くで立っている。サラサは正座をして、行儀よく座っている。これが大和撫子やまとなでこってやつね。

「時間は掛かりませんわ」

サラサが静かに言った。すると、じいやさんが、

「マレー又様よ、そなたはどのようなにして火の王国の魔歌を手に入れたのじゃ？」

興味深そうに聞いてきた。あたしはざっと火の王国であったことを説明した。でも、マリアが生きているかもという事と、あたしとリリーに起きたことは伏せながらだ。説明が終えると、サラサはじいやさんは目を爛々と輝かせていた。

「双子さんの仲を元通りにさせて、しかも魔歌が手に入るなんて素晴らしいわー！」

「姫、その2つはきつと関連があるはずじゃ。不死鳥と言うのは肺の中から100年に1度よみがえる伝説があるんじゃない。まあ、それ

はマレー又様が体験済みのようだしのお。

しかし、他の説に不死鳥は初めはただの鳥であり、双子であった。片割れが死んでしまったときに、生き残った方も自らの命を片割れの死体と共に炎で焼いてしまったのじゃ。すると、灰になって無くなったつの体が1つとなり不死の魂を得たと…」

そ、そんな伝説があるんだあ。

「じゃから、ただ不死鳥が蘇るのを待つてるだけじゃ駄目だったかもしれんのう。双子の仲を元通りにさせるといふ難により、魔歌が手に入ったのだろう」

あたしは驚いた。だって、あたしがパレードにいたのも偶然だったし、リリーとフィリーがケンカしたのも、仲直りさせたのも偶然だし。ただの偶然だと思ってたけど、こうなる運命だったのかも…。「マレー又、その魔歌を聞かせてくだらない？」

サラサが期待を込めた目で言った。マーションも続けて、「そういわれれば、1度も歌ってなかったマロね。マレー又、聞きたいマロ〜！」

とマーションまで言う。あたしは目を伏せ、弱々しく事実を述べた。

「…実は魔歌が歌えないの」

「「ええ!?!」」

「でも、手に入れたんじゃなくって??」

「そうマロ!自分で言ったマロよ…?」

2人が慌てて言った。そんな2人にあたしは訂正した。

「手に入れたし、体の中に沁み込んでるわ。上手くいえないけど、歌おうとすると、声が出なかったり、歌詞やメロディーがふっと消えたりするの…」

胸の前で両手を握り締める。

「何度も何度も歌おうとしたのよ…？でも、歌えないの」

力なく言った。歌おうと幾度も挑戦した。でも、魔歌はあたしの奥底に引っ込んでしまふ。もしかしたら、魔歌は手に入ってなくて自分でそう思い込んでるだけなの？

「ただ、確かに魔歌は 1文字1文字、1音1音は、あたしの体に沁みこんで血液のように流れている。」

「きつと、それは…」

とじいやさんが声を漏らした。みんなが揃ってじいやさんを見る。「きつとですな、7つの魔歌が全て揃い、ふさわしい時に、ふさわしい場所で、ふさわしい人を前にして歌えるようになるんじゃないか…？」

「落ち着き払って、自分の考えを言うじいやさん。ふあ、納得かも…」

「そうかもしれませんね！…にしても、じいやさんはなんで、マリアの魔歌についてそんなに詳しいんですか？」

じいやさんに聞いてみた。今までの話の中でじいやさんはマリアの魔歌について色々知っていた。じいやさんはほっほっほと笑って、「わしは長く水の王国に勤めておりましてのお。新米のときは城の図書館の担当だな。その時に書物を読み漁ったのじゃ。早く上級の仕事をしたかったから、あの時は必死じゃった…」

「遠い昔を思い出し目を細めている。マーションが耳元で、」

「マリア・ピアノニコや魔歌についての本が沢山あるって事マロよ！調べてみる価値はあるマロ…」

と囁いた。マーションにはいい考えじゃない

「じいやさん、そうだった書物はまだありますか？」

じいやさんは首をひねって、

「うむ、わしが担当しとったのも何十年も前だからの。ある分は用意しておきますぞ」

と言ってくれた。あたしは即座にお礼を言った。

「ありがとうございます！助かります！！」

やった！これでマリアの事、いっぱい分かるかも。魔術歴ではそんなに詳しくやってなかったもんね！（やったかもしれないけど、あたしはモダンの話をぜんぜん聞いていなかった）

「みなさん、到着です」

ウォーテルさんが呟いた。続けてサラサが、

「マレーヌ、マールン、改めてようこそ！水の王国へ！！」

水の王国！あたしは期待で胸を躍らせて、足を踏み入れた。

「サラサ様〜〜！お帰りなさいませー！！」

屋形船から降りると、白い生き物が丸い体を一生懸命揺らして近づいてきた。

「コテツー！ただいま帰りましたわ〜」

サラサが白い生き物に駆け寄り抱きしめる。コテツと呼ばれた生き物は、つるつるの肌をもったアザラシだった。愛くるしいくりくりした黒い目。鼻と口は小さく、突き出た鼻にはひげがピョコンと生えていた。かわいい〜！あたし、こんな間近でアザラシ見たの…初めて〜！

「サラサ様、そちらの方は??」

コテツ君が短いヒレであたし達を指しながら尋ねた。そういう姿にきゅんとする。

「こちらは風の王国のマレーヌ・ピアノコさんとマールン・D・ムーケさんですわ。魔歌探しの旅でこちらにいらしたの」

「それはそれはどうもです〜。僕はサラサ様のお供でコテツと申します」

「よろしくね、コテツ君」

「よろしくマロ」

簡単に挨拶をして、サラサが王の間へ案内してくれた。

王の間は最上階にあつて、サラサが城の内部を説明してくれた。「この水の城は地上に3階、地下に5階ありますの。地下は地中ではなくて、水中に存在しますのよ?」

そして、地上1階は食堂や大浴場など。2階はトレーニングルームや勉強部屋にレックス室、会議室などがあるらしい。最上階は王の間とお偉いさんを通す部屋があるという。地下は後で案内してもらふことになった。

ちなみに風の城は5階建てで、横に広い。火の城は3つの塔で成り立ち、真ん中が6階、両端が2階建てとなっていた。以上、マレーヌの雑学(雑談)でした。

水の城内部には水路があつて、廊下の片側に小川のように、水が流れている。静かに流れる川を見ていると、心が落ち着く…。そんなことを考えていると、もう着いちゃった。

「こちらが王の間ですわ。私も帰ったことを告げに参りますわ。さあ、入りますわよ?じいや、ウォーテルありがとう」

サラサが振り返つて言った。あたしは返事をして、身だしなみを整えた。じいやさんとウォーテルさんは静かにその場を去つて行った。

”ギーーーーー”

重々しい音を立て扉が開く。畳張りの豪華な部屋に厳格そうな男性と色っぽい女性。この人たちが王様と王妃様。サラサのお父さんとお母さん。

お殿様みたいな格好をした王様は、きりりとした顔立ち。男の人にしては珍しい艶のある長髪。色は青っぽい。威厳な態度であぐらをかいて厳格なオーラを出す。

隣には十二単を着て、どこか色っぽいオーラを放つのは王妃様。健康的な唇に色気を感じる。王妃様は黒い髪を頭でまとめている。しかし、耳に垂れていて髪もあり、これまた色っぽい！

あたしは座布団に座るなり、2人のオーラに圧倒され、硬直してしまった。

「父上、母上、火の王国から戻って参りました。パレード期間中は、わたくし私…体調が優れなくて参加できませんでした。でも、じいやとウオーテルによると、とてもにぎわっていたそうですわ」

サラサは背筋を伸ばして、はきはきと話した。こういった場に慣れているのだらうと、感心していた。

「ほう。無事に帰ることが出来て何よりだ。では、隣の方は何卒なにこそこちらへ参った？」

お腹の底からの低い声。我に返り、緊張気味に声を出した。

「あたし、風の王国から魔歌探しに来ました。マリアンヌ・ピアノコです」

「オイラはお供のマーロン・D・ムーケですマロ」  
マーロンの後にサラサが、

「マレーヌとマーロンは火の王国で、パレードのコンテストで準優勝をし、魔歌を手に入れたそうですわ。丁度、同じ船でしたので、お招きしました」

と経緯いきわづらひを説明してくれた。王妃様が垂れた髪を耳にかけて、「それは素晴らしいわね。ということは、水の王国の魔歌も探しにいらっしやっただのね？」

色っぽい声で言った。この王妃様、どこをとっても色っぽい。王妃様の誘惑に負けじ？と、

「はいそうです。唐突ですが、マリアが納めた魔歌はありますか？と尋ねた。いい答えが返ってきますように…。」

「うむ、少し込み入った話があつてな…」

王様が腕組みをして、重々しく話し始めた。

「そなたの国と我が王国の間に、土の国があるのは知っておるか？」

「はい…。100年前の戦争で分かれた小国と…」

魔術歴で習ったことを懸命に思い出して答えた。

土の国は元々、水の王国の領地だったけれど、戦争の為、分かれた国らしい。他の岩や木の国も同じ感じ。反発はさすがにないけど、国の合併にはどこの王国も踏み出していけないみたい。難しい話だからよく分からないけど…。

「うむ、そうなのだ。土の国とはいい関係を築きたいのだが…。

長くの戦争が終わり、土の国が水の王国であった時、マリア・ピアニコが魔歌を納めたのだ。その魔歌は巻物に印され、ずっと守られてきた。しかし、土の国が分かれる時、巻物の半分を持っていかれてしまった。それから、土の国とは和解できずに巻物も半分なのだ。

といっても、残っている方も、魔歌が暗号のように印されており読めぬ。学者達が手を尽くしておるのだが、分からぬ状態だ」

眉をひそめて、険しい表情で語る。やっぱりそんな簡単にいく訳ないか。

「この件については試行錯誤が必要になってくる。長くなってしまいが、待ってくれぬか？マリアンヌ姫よ」

「…はい。お願いします」

そして、部屋を後にし、サラサにこれから寝泊りする部屋へと案内してもらった。

水の魔歌は手にいられることができるのかな？？

あたしの胸の中には不安の文字がぐるぐると交差していた。

## 第2話 魔歌の行方（後書き）

どうでしたか？

なんだか、上手くいく予感がしませんね…w

どうにか魔歌を手にいられるように応援してくださいwwww

感想などお待ちしています!!

最後まで読んでいただきありがとうございましたペコリ

### 第3話 メールで…

案内してもらったのは地下3階。サラサや王様達王家の人や王家直属の人たち、位の高い人たちの部屋がある階。ちなみに、地下1階はパーティ会場、地下2階はメイドや家来の部屋、地下4階は図書室や研究室がなど、地下5階は家宝や珍しい品を保管する部屋があるらしい。

あたしは入って右側の奥から3番目、角を曲がった部屋になった。もう一つ角を進むとサラサの部屋、向かい側にウォーテルさんの部屋となっている。

和の部屋かなと想像していたが違った。意外にも部屋の中も家具も洋風であった。

どのくらいこの部屋で過ごすのかな？部屋に入った途端、そんなことを思ってしまった。ネガティブになっちゃ駄目だぞ、マレーヌ！

「私は反対側の部屋だから、いつでもお呼びになってね。私、これからレッスンの予定を立てに2階に行つてきますわ。では、失礼」

と言い残して、コテツ君と長い廊下を歩いて行つた。それを見送つて荷物を整理した。そして、ため息をついた。

「ふう、着いたのはいいけど、どうなるんだろ？何だか、上手くいきそうにないね」

「マロ、火の王国では思いのほか、すぐに魔歌が手に入ったマロね。今回は水と土の和解で魔歌が手に入るって感じマロ？」

苦笑いするマロン。

「むりむりむり！王様達があんなに悩んでるんだから、あたしが出来るわけないじゃん…。とりあえず、風の王国とリリーたちに連絡入れとこうかな」

あたしはマイコンを手に取り、まず風の王国向けにメールを作成した。

「えっと、まず、火の王国の魔歌を手に入れましたっ」と  
マイコンのタッチパネルで文字を入力していく。

「コンテストで準優勝したことも伝えておけばいいマロ！」

「そうね、喜ぶかも」

といった具合に風の王国とリリーたちに向けて、メールを作成し送信までいたった。

「無事完了！早く返信こないかなあ」

メールを送る相手があまりいなかったあたしは、メールの送信者があること、先進が来ることを嬉しく思った。マイコンをテーブルにおいて、椅子に座ってウキウキしながら返信を待った。その様子を、

見たマーションが、

「何だか、この旅に出てマレー又変わったマロね」

そつと呟いた。あたしはびっくりして、振り返り聞いてみた。

「え？何で？」

「だって、少しの間で成長した感じがするマロ。ものの考え方も、魔力も、魔歌も、顔つきも。迷いがなくなってきて、強くなった感じがするマロ。」

魔歌もお城にいた頃とコンテストでは違う感じがしたマロ。音程も安定してたし、声が伸びやかになったんじゃないマロ？？顔つきだって、すっかり前見てる感じマロ。昔はなぜか、どこか俯いて無理して、心がばあっとしきれてなかったマロ……」

マーションが淡々と言った。

自分でも変わったなと思っていたけど、マーションに言われてすっかり時間した。

そしてマーションは、こんなにもあたしのことを見ていてくれたんだ。しかも、旅をする前から。きつとお供として仕えたときから、ずっと見ていてくれたんだと、マーションの話聞いて思った。

「マーション、ありがと。あたしもこの旅に出て良かったと思うよ！」

笑顔で言ったら、マーロンは照れた様に帽子を深く被りなおした。ちよつと頬を赤く染めて。こういう姿は可愛いよね〜。

「そうマロね。水の王国でも頑張るマロよ。オイラもが…」

”ピロロロン”

マーロンが喋っている途中、マイコンが鳴った。

「あううマロ…」

マーロンは悲痛の声を上げた。あたしは軽く苦笑してマイコンを開いた。風の王国からだ。

『マレーヌ様、マーロン様

おめでとうございます！無事に到着も出来たようで、御両親を始め、メイド、家来一同、喜んでおります！

水の王国でのご活躍を期待しております。

最近は王妃様の体調も優れており、落ち着いた日々を過ごしております。

ここで悲しいお知らせが、

モダン先輩が学習院に戻って、再度お勉強することになりました。私どもも承知していたのですが、秘密にしてほしいと言われ、このような形でお伝えします。

3年間、勉強した上で、戻ってこられるそうです。再開するのが待ち遠しいですね！！

戻ってこられたときには全ての勉強を見ると張り切っておられました。

最後になりましたが、マレーヌ様、マーロン様、お2人の健闘を祈っています。ファイトです！

リア『

「リアからだ！モダン、何も言ってくれなかったから…。マーロンは知ってた？」

メールを一緒に見ていたマーロンに尋ねてみた。

「オイラも始めて知ったマロ。まあ、教え子がいないんだし、3年間だけマロよ」

マーロンも知らなかったんだ。マーロンの言うとおりだし、モダンは気まぐれな人だったしね！少し寂しいけど、3年間だけよね！そう思うとあまり悲しくなかった。

”ピロロロン”

30分程経ってから、もう一通メールが来た。

『マレーヌ、マーロンへ

無事に到着してあたしもフィリーも安心しました！大変みたいだけど、頑張つてー！！

サラサは何度も会った事があるけど、とってもいい人よ！！  
琴が上手だったはず。最近はハープも始めたって聞いたわ。デュオとかしちやえば（笑）

いい結果を楽しみにしてるわ！

丁度、パレードの件について情報収集していたところよ！入った情報を報告するわね！！

何人かが黒いローブの女性から香水を貰ったらしいわ。

匂いを嗅いだら、怒り、悲しみ、恐怖などを感じて、あまり良くない状況になったみたい。

ローブの女性の素顔はあまり分からなかったみたい。  
虚ろな漆黒の瞳をしていて、見た途端寒気がしたらしいわ。

特徴的なのが、額の真ん中に横一直線、傷があったって。  
傷から何とも言えない威圧的なオーラが出ていたらしい。

少ない情報だから、まだまだ調べてみるわ！何か嫌な予感がするけど、お互い頑張りましょ！

んじゃ、バイバイ！！』

漆黒の瞳に額の傷。あたしは顔をあまりよく見てないけど、血色の悪い肌で、瞳と同じ漆黒の髪をしていた。ほんと、嫌な予感がしてならない。リリーのメールを見た後、なかなか言葉が出てこなかった。

あたしは何も言わずにマイコンを閉じた。マイコンから反射する光を見ていると、胸騒ぎがした。椅子から立ち上がり、窓の前に立った。窓の外は湖が広がる。色鮮やかな魚が集団で泳いでいる。澄んだコバルトブルーを見ていると、少しずつ落ち着きを取り戻すことが出来た。

「マーション、どう思う？黒いローブの女性のこと…」

窓に手を当てて、その冷たさを感じる。マーションと顔を合わせる事が出来ず、水中を眺めながら聞いた。怖くてこうしていないと、声が出せない。

「危ない感じがするマロ。放っておけないけど、どうしようもできないマロね」

マーションはため息交じりの声で答える。

”どうしようもできない” その言葉に自分の無力さを恨んだ。くるつと、マーションのほうを向き、

「ここで立ち止まっても駄目よ！あたし達に出来ることをやりましょー！」

強く言い張った。驚いて後ずさるマーション。

「出来ることって何をやるマロ？」

「えーっつと…」

マーションが怪しい顔で、

「何も考えてないマロね??」

あたしを見る。焦りながらも、

「あつ！じいやさんに資料を頼んだでしょ？マリアについて調べましようよ！何かヒントが得られるかも。図書室へ直行ー！」

ぱっと思い出す。即行動があたしのモットー？マーションを引っ張って図書室へ向かった。

第3話 メールで…（後書き）

どうでしたか？？

なんとも言えませんね？？アハハ

とにかく！！たくさん更新するので、

これから水の章をたっぷり楽しんでください！

最後まで読んでいただきありがとうございましたペコリ

第4話 マリア・ピアノを調べまじょう(前書き)

何も言じことはないかもですw w

いじりていへいじり

## 第4話 マリア・ピアノを調べましょう

地下4階 図書室

「へえ、結構広いんだあ。図書室なんて久しぶりに来ちゃった〜」  
「ってゆうか、マレーヌが本読んでる姿見たことないマロ」

「失礼ねえ！あたしだって読んでるわよ。『ストロベリーPOP』」  
「それは雑誌マロ。文字がびっしり入った活字の本、読んだことあるマロか??」

マロンがズバリという顔をあたしに向ける。ちなみにストロベリーPOPとはファッション雑誌で、あたしの愛読雑誌。

「べ、別に〜。じいやさん居るから急いで!」

話を逸らし、じいやさんの元へ急ぐ。じいやさんは分厚い本をテーブルにたくさん重ね並べていた。あたしの中指くらいの分厚さだ！こんな本を読めって言うの!?読む前から頭痛が〜。

「おお。マレーヌ様、マロン君。丁度、呼びに行こうと思っていたところじゃ」

「良かったです。これ…全部読めばいいんですか?」

「そうじゃ。しかし、わしが探したのはこれだけなんじゃ。すまんのう」

じいやさんが謝る。嫌々、謝らなくても!これだけあれば充分過ぎますから!!

「かなり分厚いマロね。マレーヌの集中力でどれだけ読めるマロか」  
「…」

マロンめ!言いたいことはとにかく言うんだから!後でこらしめてやるわ。

「まあ、じっくり読めばいいわい。本は片付けずにそのまま置いてもよいはずじゃ。では、わしは仕事に戻りますの」

「ありがとうございます。時間もとってもらって…」

「いいんじゃないよ。こんな老いばれが役に立てて嬉しいぞ」

じいやさんはそう言い残し、図書室から出て行った。

「さあ、手分けして読むマロ」

「じゃあ、あたしこれ」

あたしが手にしたのは『世界を支えた偉人たち』という、中でも薄めの本。

「薄い本を選んだマロね。まあ、最初は慣れマロ。がんばって読むマロ」

マーロンが選んだ本を見るなり、皮肉混じりに言った。ムツときたけど、聞こえないフリをして、マリア・ピアニコのページを開く。

マリアのプロフィールに、生まれてから亡くなるまでの出来事。

初めのページにはマリアの挿絵が載っていた。実際の顔は分からないけど、可愛いよね。

腰まで伸びる金髪を靡かせて、苦しむ人々に魔歌を聞かせる。そして、何も言わずに去っていく。と言うのがあたしのイメージ。

とにかく、読みましょうか。

〜マリア・ピアニコ

風の王国の血筋。127代目の王の次男がマリアの父にあたる。

王位継承はしていない。

風の王国の情報大臣の父の元、不自由なく生活をしていた。マリアは末っ子であり、姉が2人、兄が1人がいた。

幼少の頃より、魔術の訓練を受ける。素直で穏やかな心の持ち主だったといわれる。そしてその頃から、強大な魔力を身につけていた。

学校には通わず、王家直属の家庭教師から教育を受ける。成績は優秀。好奇心から多くのことを学び、記憶力に長けていた。

12歳の頃、魔歌に興味を持つ。その頃には大抵の知識を身につけ、魔術を操ることもできた。歌に魔力を混ぜ込ませるといふ、現代でも高度な魔術である魔歌。その魔歌を数年の歳月を経て、強大な魔力と共に身につけた。

魔歌の練習を行っていた15歳の頃。思いもしれない事が世界で起こった。大不幸の年とも言われた年に起こった悲劇の戦。4年間も続き、多くの民の命を奪った、魔術大戦争。大不幸の年に起きた、伝染病の流行、大災害、権力争い、民の不満から悪循環を生み戦争になったのである。そして、権力を持った国が小国を支配し、土地がなくなると、他の国とぶつかり合い、大勢の命を奪うものまで発展した。

マリアは王家のものとして、家族と共に安全な地で終戦するのを待った。その間もマリアは魔歌の練習に励み、希望を捨てなかった。戦争の反対者で、終戦を訴え続けたと言う。

そして4年間の激闘の末、魔術大戦争は終戦。各地は焼け野原と化し、幾多の命が亡きものとなった。生存者も心身ともに深い傷を負ったのだ。復興を始めるものの、順調に進まなかった。

月日は過ぎ、新たな1年を迎えたある日。20歳となり、大人の仲間入りを果たしたマリア。魔歌を我が物とし、人々に希望を与える為、マリアは世界各地をまわる旅に出た。

ここまでが、マリアが旅に出るまで。あまり知らなかったことばかりで勉強になった。でも、これといった情報はない。きつと、旅に出てから何かあるに違いない。

マリアの旅は困難の連続であった。世界を渡り歩くのはかなりの時間を費やし、小さな村から大きな街までも旅をした。それに、簡単に受け入れてもらえず、交渉を重ね、魔歌で人々を癒した。国の中心部には伝説の魔歌を納め、人々にあがめられた。

　　旅をしている間、マリアの魔力はどんどん強くなっていたという。魔術を使っても疲労が出ず、最高ランクの魔術や、王家の者でないと思えない、風以外の属性魔術を使えるようになっていた。

　　素晴らしい成長を遂げ、地上の国を旅し終えたマリアは、空の王国にも身を乗り出した。戦争被害の薄かった空の王国は、文明が遙かに進んでおり、マリアの興味を引くものばかりであった。

　　そして、マリアは空の王国から幻の大地へ行くことと決意した。幻の大地には光と闇の王国があり、そこが世界の原点だと言う説がある。その原点への行き方を発見した空の王国だが、未知の領域へ踏み込もうとする者は誰一人として居なかった。

　　決意したときのマリアは20代とまだ若く、幻の大地へ行くことを誰もが反対した。しかし、マリアは自分の理念を貫き通し、ついに幻の大地へと旅立った。

　　マリアは幻の大地へ旅立って、ひと月ほどすると何の前触れもなく、戻ってきたのだ。しかも原因不明の病にかかっていた。目は虚ろで、会話もままならない。寝たきりの生活で、3日目を迎えた朝、マリアは最後の息を吐き終えた。

　　こうして、世界最強の魔術師マリアは、『美風の歌姫』と呼ばれ、人々の胸に残っている。

”パタン”

「ふう〜、つかれたー」

　　ぐっと背伸びする。体全身が麻痺したみたい。目もシヨボシヨボする。たった数ページだけど、小さな文字を読んでいると疲れてし

まった。

「やっと終わったマロか？マレーヌにしては読んだほうマロかね」  
マーションに突っ込まれたが、何かを言い返す元気さえ無くなって  
いた。それにこればかりは言い返せない。普段、本を読まないあ  
たしがこれだけ読めば、すごいことよ。…たぶん。

「たいした情報はなかったよ。知らないこともあったけど、知っ  
てることばかり」

「こっちもマロ。どれもこれも変わらないマロよ」

「そっか。でもまだまだこれからよね！」

気合いを入れて、もう1度文字と戦うのであった。

「起きてください…。申し訳ありません。利用時間が6時半までと  
なっております。借りる本があったら急速に」

頭の上で係員さんの声がする。本を読みながら。うとうとしてい  
たので、ハッと我に返った。室内の時計を見ると、6時半ぎりぎり。

「ごっごめんなさい！マーション、本借りる？」

慌てるあたし。マーションは本を綺麗に並べて、

「借りないマロ。ここに置いたままでいいマロか？」

「構いませんよ」

あたしたちは係員の返事を聞き、急ぎ足で図書室を出た。

「いつの間にか、時間が経ってたみたいマロね！」

「本当！あたし、ちよつと寝てた…」

廊下を歩きながら話す。集中して読んでなかったから、本の内容  
があまり思い出せない。でも、思い出せないぐらいだから、内容に  
変わりはないのだろう。結局あたしは寝ていた…。

「道のりは長いマロね」

マーションがため息交じりに呟いた。あたしは呻いて、重い足で階

段を昇った。

#### 第4話 マリア・ピアノを調べましよう(後書き)

どうでしたでしょうか？

今回までは水の章の前フリ…そおんなことはない!?

この4話で、マリア・ピアノについて少しでも分かって頂けたらいいですw

そして、次話!!

物語がついに…

あわわ。これ以上言ったら駄目ですねw(言ってるようなもんで  
すか?)

最後まで読んでいただきありがとうございましたペコリ

これからますますしくお願いいたします。

## 第5話 姫と執事(前書き)

第5話、更新です！！やっとココまでたどりつけたあ！！

姫と執事って誰のことでしょうか…???

まじまじと

## 第5話 姫と執事

「ふー、気持ちよかった」

何が気持ち良かったって？お風呂から上がったんでーす！水の城には大浴場があつて、毎日開放されている。水の城にきて2日目から、毎日大浴場に入っている。大浴場のお湯はやわらかくて、肌に優しく、体にとつてもいい。ここ数日でお肌がスベスベになった気がする。体の疲れもすっきり取れちゃう。

ここ4日間、図書室で本を読むか、街をふらつくかのどちらかだった。圧倒的に図書室に居る時間の方が多い。あたしの場合、マリア関連の本から、興味のある本に移り変わってばかりで、しょっちゅうマーロンに注意されていた。全く読んでないわけじゃないのよ??それに、マーロンの集中力さえ切れかけてきたし…。それでも今日は全ての本を読み終えた。その後、マーロンと話をした。

「今まで読んだ中で気になる所はあつたマロ？」

「気になる所も何も、どれも同じ内容だったもん」

「そうマロよね…。オイラはやっぱり、幻の大地に行つて帰つてきた所、つまり幻の大地に行っている間が気になるマロ」

マーロンは一呼吸置いて、

「きつと、幻の大地に行つてから何かあつたはずマロ。それに…」

次は声を潜めて、

「不死鳥がマレーヌに言った事、マリア様は生きてるって」

不死鳥ははつきりそう言った。しかし、マリアは幻の大地から帰つてきて、原因不明の病で亡くなつたと、どの本にも書いてあつた。

「じゃあ、そのことについて詳しく調べないとね」

「マロ！幻の大地についてかいてる本を調べるマロ！！」

こんな感じ。幻の大地について調べるのは明日から。さすがに今日は読みきったのでもういいだろう、ということになったのだ。

「マレーヌ、遅かったマロね」

風呂上りでゆでだこ状態のマーロンがそこにいた。

「そうかなあ、いつもよりすこし長かったかも」

濡れた髪を乾かしながら答えた。あたしの腰まである長い髪はなかなか乾かない。ドライヤーで乾かしたつもりなだけだ。乾かすのについつい時間が掛かってしまったのかも。

「まっいいわ。部屋にもどりましょ」

自分の部屋を目指して、階段を下っていく。そして地下3階に着き、廊下を突っ切って自分の部屋に向かう。そのとき、

「ウォーテル、ウォーテル…？」

あたしの部屋のもう一つ次の角からサラサの声がした。弱々しくウォーテルさんの名前を読んでいる。何かあったのかな？気になって、自分の部屋のある角をそのまま進み、声のした角から顔を出してみる。

サラサはウォーテルさんの部屋の前に経っている。でも、サラサの部屋の前とも言える。しかし、ウォーテルさんの部屋のほうを向いてるんだ。深刻な表情のサラサに声を掛けられずにいた。何なんでしょうか！？この、家政婦は見た！的な状況…。

”ガチャ”

キターーーーーー！！！！

あたしはドアの音に心の中で叫んだ。

「…どうされました、姫？」

出てきたのはもちろん執事兼ボディガードのウォーテルさん。黒いスーツにサングラス。いつもの格好をして、サラサを不思議そうに見つめている。

「ウォーテル、そんなに警戒なならないで。今は会議中で誰もいませんわ」

警戒心を解くようにそつと言った。どうしたんだろ、このサラサの意味深な発言。ま、まさか!?

ウォーテルさんは短く刈り込んだ頭をガリガリと掻き、部屋から1歩出た。いつものような冷静な態度。サラサは…。

「ウォーテル!」

名前を呼んで、サラサは抱きついた。驚いて声を上げそうになったが、自分で自分の口を押さえた。まさか、本当にあたしの考えが当たるなんて。抱きつく、それが意味するのは…?

ウォーテルさんは少し驚くものの静かにサングラスを外した。きりりとした瞳。誰かに似てる??そして、右手でサラサの頭を優しく撫で、左手でサラサの背中をゆっくりさする。まるで、声を押し殺して泣くサラサを慰めるように…。

「つごめんなさい、ウォーテル。こうして話すのは久しぶりだから…」

サラサは涙と嗚咽は止まったが、声を詰まらせている。

「サラサ、俺とお前は姫と執事なんだ。赤の他人であってお前が思ってるような関係じゃない」

ウォーテルさんは尚も抱きしめるサラサに、

「俺はお前のお兄さんじゃないんだよ、サラサ」

そうそう、2人はそうゆう関係になったら駄目なんだよ。

…っってお兄さん!?

「っつそ!それならどうして、私を名前で呼んだの?いつもなら、姫わたくしって呼ぶじゃない」

取り乱すサラサ。

「ちょ、ちょっと待って！あたしはすごく勘違いしていたようだ。は、恥ずかしい…。でも、この会話から2人が兄妹だったことが分かった。それもそれで信じられない！！だって、ウォーテルさんが言ったとおり、2人は姫と執事で赤の他人じゃないの！？」

「ウォーテルはれっきとした私わたくしのお兄様よ！」

腕の中で叫ぶサラサに、ウォーテルさんは驚いた。そして、サラサを自分の体から離し、

「わかった。兄妹だったことは認める。」

だが、俺は魔力を持たずに王家に生まれてきた。魔力のない俺はここに…王家には必要ないんだ。でも、執事としてサラサと赤の他人だったら必要とされる。分かるか？俺たちは…今は兄妹じゃない！これからだってそうだ」

声を震わせながらも、また泣き出しそうなサラサに冷たく言い放った。その横顔はサラサのお父さんに似てる。

「それでも、私わたくしとウォーテルは兄妹ですわ。…お父様達は知っているんでしょ？」

「ああ。しかし、それを知ってどうするんだ？」

なんとなく予想がついているウォーテルさんに、サラサはきつぱり告げた。

「お父様達に認めさせるんです。ウォーテルは、お兄様は、あなたの子供だって。魔力は持ってなくとも、王家をの血筋を引いているって！」

サラサは本気だ。決心のついたあの目を見れば、誰だって分かる。「そんなことしたって無駄だ。王様達は忙しい。それに…。いや、いつ話したって同じこと。しょうがないんだ、分かってくれ」

ウォーテルさんは力なく言う。ウォーテルさんは何言い掛けたのだろう？

「そんなのあんまりだわ！」

わっとサラサはまた泣き出してしまった。今度はウォーテルさん

がサラサを抱きしめる。そつとサラサの頭を自分の胸につずめさせて…。

「サラサ、俺とお前は兄妹だが、姫と執事っていう関係なんだ。俺が兄でなく、執事という立場だからサラサの傍でいられるんだ。俺はそれだけで幸せなんだよ?」

穏やかな口調。言われてる訳じゃないけど、あたしまで泣きそう。「俺も兄妹でいたいと思う。でも、仕方ないんだ。…だから、しまつておこう。兄妹つてことは心の奥にしまつておこう」

そして、サラサをぎゅつと力強く抱き締める。サラサは小声で何かを言う。ウォーテルさんはそれに静かに頷く。

サラサは手で顔を覆い隠し、部屋に戻った。ウォーテルさんは口をきゅと結び、サラサの部屋のドアを愛おしそうに見つめる。目を伏せると、静かに部屋に入りドアを閉めた。”パタン”という音に心が締め付けられた。

あたしは無言のまま、暗い気持ちで部屋に戻った。罪悪感とやりきれない気持ちで胸が押しつぶされそう。

「マーロン、この状況…理解できる?」

ベッドに腰を下ろし、重い口を開けた。一言言うだけでも精一杯。聞いてはいけないものを聞いてしまったマロ

「マーロンも混乱しているみたいだ。でも、この状況を整理しておかないと。」

「ほ、本当にあの2人は血のつながった…兄妹なのね?」

兄妹という言葉にどうしても、抵抗を持つてしまう。

「ウォーテルさんまで認めてたから…。でも、ウォーテルさんは王家の人として認めてもらえなかったみたいマロね」

「ねえ、どうして魔力がなかったら王家として認めてもらえないの!?!?」

「きつと魔力は王国の強さの象徴なんだマロ。魔力が強いほど、権

力が強いとされるマロ。魔力がない王だと、弱いとみなされ、その国をまとめあげる事が出来ないと考えたマロ。きつと」

じゃあ、あたしに魔力がなかったら、あんなに楽しい生活を送ることなど出来なかったのか…。そう思うとぞつとする。でもそれを、ウォーテルさんは強いられている。

「話を戻すけど、サラサは兄妹でいたくて、ウォーテルさんは今の関係で幸せなんだよね」

「どちらの気持ちも分からないでないマロ。姫として王家の裕福な暮らしをして、実の兄は執事として仕えている。サラサ様は自分だけいい思いをしているのが嫌マロね」

あたしもそう思う。マーロンはさらに深刻な表情で、

「でも、ウォーテルさんは、執事の立場でいないと、サラサ様の傍にいられないみたいマロ。執事だとしても、それだけで…満足してるマロね」

と言った。あたしは1つ付け加えた。

「だけど、ウォーテルさんだって兄妹でいたいと思ってるんでしょ…!?!」

これは絶対に間違っていないはず。だって、ウォーテルさんのあの寂しい瞳を見れば…。

「これから、あの2人どうなるの!?!」

モヤモヤした気持ちのまま、誰にも悟られないように、いつもどおり『姫と執事』の関係で過ごすなんてあんまりだ!

「あ、あたしサラサ達と話してくる!?!」

拳を強く握ってベッドから立ち上がった。しかし、

「だめマロ!?!」

マーロンに反対された。顔をしかめると、

「サラサ様はまだどうしていいか分からないはずマロ。そんな所に行っても、かえって混乱させるだけマロ!今はそつとしておくマロ…」

声を小さくしながら、マーロンは訴えた。

「でも…」

「マレー又だつて混乱してるマロ。ちゃんと寝て、明日きちんと心の整理をして、話してみるマロ。分かったマロ？」

マーションがあたしの目をしっかりと捉える。彼を見ていると、何も返す言葉が出てこなかった。あたしはため息をついて、力なく微笑んだ。

「お望みどおり、眠ってあげる。マーション、おやすみ」

マーションはあたしの素早い行動に驚いたようだ。いつもなら、反抗するから。

「お、おやすみマロ」

言葉を詰まらせながら言った。あたしは滑り込むようにしてベッドに潜り込んだ。顔を出して、

「1人で寝てよねー」

ウインクもおまけして、布団の中に顔も隠した。そして、布団の中で体をこれでもかというほどに丸める。

泣きたい感情を押し込めるように。

あたしが泣いたって何の解決にもならない。泣きたいのサラサとウォーテルさん。

すぐにパチンと電気を消す音がした。続いて、スイーつと音が通り過ぎた。マーションだ。

きつと泣き出しそうなことに気付いたはず。あたしは嘘をついたり、誤魔化すのが下手。特にこの手のことは。マーションに「おやすみ」と言ったところから、分かっていただろう。それでも彼はあたしをそつとしてくれる。彼の優しさを痛いほど感じた。

サラサとウォーテルさんがかわいそう。やすやすと眠る気になれない。

サラサも、ウォーテルさんも、兄妹として生きていきたいはずなのに…。細かい事情は知らない。それでも、幼い頃から兄妹という関係でいられなかったはず。

なのに、我慢して我慢して毅然きぜんと振舞っている。誰一人として、あの2人を兄妹だとは思わないだろう。水の王国の可憐な姫と忠実に仕える執事。人々の目にはそうとしか映っていない。

誰にも悟られないように、サラサとウォーテルさんは『兄妹』という真実を、『姫と執事』という仮面で隠している。兄妹でいたいという気持ちを心の奥にしまっている。

抑えきれないはずなのに、溢れてしまいそうはずなのに、心の中に沈めている。

そんなサラサとウォーテルさんの悲しさとマーロンの優しさに胸を打たれた。

でも、涙は流さない。あたしは強くなってみんなを救うって決めたから。みんなを支えるって決めたから。

## 第5話 姫と執事（後書き）

サラサとウォーテルさん

姫と執事

妹と兄

悲しい事実です。

マレーもそんな2人に心を痛めているようで。。。

このごたごたした中、何が起こるのでしょうか!?

最後まで読んでいただきありがとうございましたペコ

感想&辛口コメ&指摘待ってますペコリ

題6話 翌朝（前書き）

更新がたいぶ遅れてしまいました。本当にすみません（汗）

学生っているいろいろ忙しいですね（）言い訳…

ぶんぞういぢくく

## 題6話 翌朝

いつの間にか眠っていたあたし。マーロンに体を揺さぶられて目が覚めた。身支度をして、朝食を食べに1階へ向かった。

朝食もバイキングだから、適当に食べ物を取り分ける。そして、窓の外を眺めて食事をする1人の少女の下へと足を速めた。

「サラサ、おはよ」

腰をかがめて、元気よく挨拶をした。うつろな目も、瞬時にして輝きを取り戻す。

「マレーヌ、マーロン、おはようですわ」

明るく振舞っている。あたしはすぐに感じ取った。マーロンも挨拶を返す。続けてあたしが、

「隣座つていい？」

笑顔で聞くと、サラサも笑顔で答えた。でも、どこか笑っていないような気がした。

「今日は王様達と一緒にじゃないんだ？」

いつもなら、王様や王妃様たちと中央のテーブルで食べている。

しかし、今日は1人のサラサだった。

「父上と母上は昨日の会議でお疲れになったらしいの。だから今日は、個々でお食事をするのですって」

サラサが緑茶をすすった。あたしはパンをほうばりながら頷いた。「大変マロね」。会議でどんな話をしたか知ってらっしゃるマロ？」

「少しなら…。土の国との対談について、議論したそうですわ。いろいろ話すことがあるみたいで。土の国とも和解しなくちゃいけませんからね。でも、まだ決定していないそうですわ」

サラダを丁寧<sup>に</sup>食べながら、サラサが説明する。そういう会議だったんだ。どおりで昨日の夜、あたし達しかあの階にいなかったわけだ。

「なんととっても、土の国は科学者ばかりで、他国の力を借りずに自分達でやっていけると言い張っているそう。他国との交渉や取引、対談には応じない事で有名なんですわ。だから、そんなことをしても、無駄だと言う意見が半数あるんですって」

「なかなか進んでいないみたいマロね」

「そうなんですわ。だから、また今日も会議らしくて、大変そうですわ」

2人が難しそうに話をする。他国との付き合いって難しいのね。特に、小国との付き合いが難しいって勉強したような。

「まっ、あたし達はその結果を待つだけだし。気長に待ってましょ」

もう難しくくて、込み入った話はおしまい。サラサに元気になってもらう為に来たんだから。もっと楽しい会話をしなくちゃ！

「ところでサラサは、いつも何やってるの？」

水の王国に来たものの、図書室にこもりつきりで、サラサがどんなことをしているのか気になった。

「私は、<sup>わたくし</sup>そうですわね…。お勉強やレッスンかしら？もちろん自由な時間もたっぷりあってよ」

「レッスンってどんなことやってるの？あたしは魔歌ばかりだったな、アハハ」

魔歌ばかりと言うより、魔歌以外やる気がなかったからね。

魔歌以外は、ピアノとか社交ダンス、手芸に料理とか？どれも退屈で、そのことを周囲は知っているので、レッスンは魔歌中心となっていた。

「ええと、お琴、舞踊、茶道に華道に書道などかしら。」

サラサは指折り数えて、楽しそう。

「ハーブも始めたった聞いたけど??」

「ええ、そうなの！いつか、豊水のハープを弾けるようにと、レッスンを始めたんですわ」

「豊水のハープ？？」

あたしとマーロンの声はもった。

「うふふ。豊水のハープは枯れた地に恵みの水を湧き上がらせる、素晴らしいハープなの。それを弾けるのは極わずか。だから、弾けるように頑張ってるんですわ！！」

サラサが意気込む。

「まあ、どの魔歌も楽しくってよ」

「ふーん、レッスンが楽しい。あたしは魔歌以外、退屈で退屈で…」  
苦笑い気味に言った。それを聞いたマーロンが、

「ほんとマロ！マレーヌときたら、レッスン前は駄々こねたり、脱走したり…。レッスン中もあくび連発、ブーブー文句言って、先生方も呆れてるマロ」

とあたしのレッスン中の態度についてべらべら話す。サラサはあららと、少し驚いている。

「うう。でも、魔歌のレッスンは頑張ってるもん！」

あたしは負けじと言い返す。しかし、

「魔歌のレッスンだけマロね」

マーロンに痛いところを突かれた。その光景を見たサラサが優しくこう言ってくれた。

「ふふ、1つだけでも夢中になれることがあればいいと思いますわ」

「だよね、だよね！あたし、魔歌上手になりたいもん！」

嬉しくって、ついつい目を輝かせた。でも、

「他のこともしっかり出来たら、もっといいと思いますわ」

と言われてしまった。そのとおりなんですけどね！

「ねえサラサ、あたしサラサのレッスン見たいな」

冗談で言ってみた。

「構いませんわよ？今日は昼食後にお琴のレッスンがありますわ」

「やったー！」

つて、んん??

「ええ、本当にいいの？冗談で言ったのに…」

「いいのよ？マレーヌがレッスンを好きになってもらえるきっかけを作れるんですもの」

「冗談だったけど、サラサが頼もしく言ってくれたから、見学しちやお！」

「レッスンは1時半からですから、10分前にお部屋に呼びに行きますわ。そうだわ、レッスンだけじゃなくて、お勉強も見ない？あ、一緒にやればいいですわ！」

「い、いや…」

「いい提案マロ！マレーヌは、レッスンより勉強の方が出来てないマロから。うんうん、そうして下さいマロ！！」

サラサの提案にマロンはすっかりその気。勉強なんて、レッスンより嫌！！

「えっと、まだ調べることがあるから。レッスンだけでいいかな」

「そんなことな…ふがつ！？」

口を滑らしそうなマロン。また余計な事を言いそうだったので、慌てて口を押さえてあげた。

「あははは！10分前に部屋に呼びに来てくれるのよね？」

冷や汗たらたらあたし。半信半疑だが、優しい表情のサラサ。分かってくれたみたい。

だが、その顔は一瞬にして青ざめて、悲しい表情へと化した。表情の変化に、サラサの視線を追う。楽しそうに会話をしながら食事をするメイド、きびきび食事をする家来、食べ物を選んでいく人の列。その間をぬって、こちらに近づいてくる人影。

「ウォーテル…」

サラサの執事であり、唯一無二の兄である、ウォーテルさん。昨

日の口論から、サラサは立ち直っていないみたい。ふるふると小刻みに体を震わせている。ウォーテルさんは…どうなのだろう。

「姫、もうすぐお勉強の時間になります」

いつもの冷静な態度。サングラスに隠れている瞳。昨日は寂しくて悲しい瞳をしていた。今どんなことを思い、妹の前に立っているのか。

「…コテツは？」

「ああ、そういえば、コテツが2人に話があるって言ってましたの。コテツは私の部屋わたくしで待っていますわ。じゃあ、お勉強の時間だから…」

名残惜しそうに、スツと立ち上がる。食器の並んだトレーを取ろうとすると、ウォーテルさんが、

「自分がお持ちします。行きましょう。マレーヌ姫、マーロン君失礼しました」

トレーを持って、サラサの後に続く。どことなく寂しそうな背中に見えた。ウォーテルさんもサラサも。

「マレーヌ、大丈夫マロよ」

マーロンがあたしの様子に気付いて声を掛けた。

「うん、ありがと」

「それにしても、コテツチは何の話があるマロか？」

「そうねえ、コテツチじゃなくてコテツ君」

マーロンはコテツ君といつの間にか仲良くなっていた。だから、コテツ君をコテツチと呼んでいる。

「と、とりあえず、部屋に戻ってからね」

コテツチと呼んでしまったあたしに、マーロンがやっと笑ってきたので慌てて言った。

コテツ君はあたしたちに何を話す気だろうか？

題6話 翌朝（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに 更新率上げられるように頑張ります。

最後まで読んでいただきありがとうございましたペコリ

第7話 心配するお供（前書き）

どうも！！

更新率全然上がらなくて、本当にすみません！

頑張りますので… ^ p ^

どうぞ！ゆっくら

## 第7話 心配するお供

「コテツ君、いる？マレーヌよ。マーションもいるわ」

朝食を済ませ、部屋に戻ってそのまま、コテツ君の元へ来た。サラサのお供コテツ君に呼ばれて、訪ねることになった。

”ガチャ

「お待ちしていました。どうぞ、入ってください」  
つるつるした白い体が姿を現した。すぐさまコテツ君の部屋に案内してくれた。

部屋はサラサの部屋でもあり、淡い水色を基調とした家具が並んでいた。整理整頓され、清楚で清潔なイメージ。部屋は2つに区切られており、カーテンで仕切られた奥は寝室。入ってすぐのこの部屋は、テレビを見たり、何かを書いたりするところみたい。

寝室とは反対側の横長のドアに案内された。コテツの部屋と書かれた札が掛けられている。コテツ君専用の部屋らしい。

サラサ、優しすぎる！あたしなんか、ポストみたいな部屋なんだけど…。こんなに差があつていいのか！？と内心思い、マーションをちらりと見る。マーションは啞然とし、口を『お』の字にしている。風の城に戻ったら、ちゃんとした部屋にしてあげよあ…。

コテツ君は低い位置につけられたドアノブを、ヒレで器用に開けて中に入れてくれた。入り口のドアにも、低い位置にドアノブがあった。コテツ君のためのドアノブだったんだ。

8畳くらいの小さな部屋。天井を見上げると、大きな水槽が部屋の奥まで続いている。小さな階段を上がると、水槽に入ることがで

きるみたい。水槽の前に犬用のクッション。これはコテツ君のベッドだろう。左側の壁には、ミニ冷蔵庫とタンス。右側には、本棚が並んでいる。入った手前の右隅には、高々とテレビが飾られている。アザラシにはなんと、贅沢な部屋なの!? コテツ君の背丈から考えて、テレビ以外は小さな家具が使われている。動物園のアザラシが見たら、なんと言うだろう? 太陽ががんがん当たった外に放り出されてるんだぞ!

コテツ君が貝殻の形をしたクッションを取り出して、座るよう促してくれた。ふかふかのクッションにあたしたちは座ると、コテツ君が目の前で止まった。座ったと言う方が、正しいはずだ。

「マレー又様、マロツチ、来ていただいたありがとうございます」  
ペコツと全身でお辞儀をする。

「サラサ様から聞いたけど、話って何マロか?」

「マーションが率直に聞いた。すると、コテツ君は瞳を濁らせ、話し始めた。」

「昨夜、サラサ様とウォーテルさんのお話、聞いてらっしゃいましたよね...?」

「!!! やっぱり。」

「ご、ごめんなさい。盗み聞きする気はなかったの。サラサの様子がおかしかったから、気になっちゃって...」

あたしは正直に認め、謝った。

「いいんです。仕方ありませんよ。サラサ様は本当に気が動転していましたし、マレー又様は優しいお方って... あっ」

コテツ君がそこで言葉を切らせた。なぜか、気付いたように言葉をつぐむのであった。その先も言ってよかったのに。

「コテツチ、昨日はどこにいたマロ?」

あたしも気になってたこと!

「部屋の中です。僕もサラサ様の様子がおかしいと思って。2人は口論で気づかなかったみたいだけど、僕は部屋の中からお2人が見えちゃったんで」

「そうだったんだ。あの、コテツ君はいつから知ってたの？2人が兄妹だって事…」

どうしても、『兄妹』って言葉にどもってしまふ。

「それは、僕がサラサ様のお供になってすぐ聞かされました。

国民に王子は、ウォーテルさんはサラサ様の生誕一ヶ月で病死したと…」

「そんな、ひどい！」

拳をぐっと握り締める。

「ウォーテルさんは、ある家に養子として引き取られ、静かに暮らしていたそうです。自分が王家の者だと知って。

あるとき、執事になると言って家を飛び出し、執事育成学校に通い始めた。成績優秀で学校側から、学費が支払われ、ここまできたと。卒業後はすぐに水の王国の執事として採用されたそうです。16歳と若いながらも、その優秀さで採用された。王様方は、初めは気付かなかったけど、やはり気付いてしまったそうです。」

コテツ君は静かにため息をつき、続けた。

「辞めさせられそうになったのですが、条件付きならばと…」

「条件？」 「条件マロ？」

あたしとマーロンが声をそろえる。

「けっして、サラサ様と周囲の人たちにはばれてはいけない。1人にも気付かれたら、国外追放、サラサ様にも2度と会わないという条件です。そして、見張り役を兼ねて、僕がお供として配属したんです」

コテツ君の声は重く暗い。あたしは声を出すことが出来なかった。サラサとウォーテルさんだけでなく、コテツ君もつらい思いをしている。

「兄弟だと知っているのは、王様と王妃様、ウォーテルさん自身、じいちゃん、僕。後、あなたたち2人です。そして、サラサ様まで…」

涙をボロボロ流しながら、

「どうか…このことは内密に!!」

体を寄せて訴えた。コテツ君はサラサたちを引き離したくないのだ。

「当たり前じゃない!! 2人を引き離すなんて絶対ダメ! ねえ、サラサはいつ知ったの…?」

『2人が兄妹だということ』 この言葉は続けられなかった。コテツ君は少し考え、

「どうやって知ったのかは分かりませんが、1年前くらいです。何の前触れもなく、僕に聞いてこられました。自分達は兄妹なのか、と。」

驚きました。それまで何も知らずに過ごしてきたはずなのに。どうやって知ったのかも、教えてくれませんでした。ウォーテルさんも知っているのかは分からなかったそうです…」

「あの、実はウォーテルさんが認めたのは昨日が初めてだったんです。」

これまで2人であのような話をしたのは数回程度みたいで…。その数回の間、しらを切り続けていたけれど、昨日になって初めて認められたのです」

コテツ君が頭を抱えながら説明する。

ウォーテルさんはどうして急に認めたのだろうか? あの口論で立場が悪くなったから? しらを切ってももう無駄だと思ったから? しかし、他に理由があるのだと、あたしは直感で思った。

「僕、昨日は本当に驚きました。認めたのが王様達に行き渡れば、ウォーテルさんの立場がなくなってしまうのに」

「オイラもそう思うマロ。しらを切っていれば、まだ安全なのに…」

「あたしもよ! 何か他に理由があるのよ」

「そうですね。でも、どんな理由が?」

直感で思っただけで、理由は分からない。あたし達の中で理由が分かる人なんていない。

「と、とにかく、これからどうすればいいの??」

今後どうするかなんて、全く考えもつかないあたし。

「このまま、様子を見るのが1番マロかね?それとも…」

マーロンはそこで言葉を途絶えさせた。コテツ君が顔をしかめて、「やはり様子を見るべきです!2人とも、しっかりしていらっしゃるから。サラサ様が突飛な行動に出なければいいのですが…」

「大丈夫!心配要らないわ。サラサには、あなたというお供がいるわ。そうでしょ?」

あたしの言葉にコテツ君は自信を持ったようだ。そして、今まで1番頼もしい言葉を発した。

「はい!任せてください。本当にありがとうございました」

「頼りになる!あたし達でなんとかできるはずよ」

「そのためにも、これからしっかり考えないといけないマロね」

みんなで微笑み合うのだった。

絶対に2人を離れ離れになんてさせない。

いつか、2人で笑い会える日を届けてあげたい。ううん、届けてあげる!!



第7話 心配するお供（後書き）

どうでしたか？

心配するお供は、コテツくんのことでした。

マーロンはいつの間に、コテツ君と仲良くなったのか…w

最後まで読んでいただきありがとうございましたペコ

次回もお楽しみに！！



## 第8話 緊急事態、眠りへ

↓地下4階 図書室↓

コテツ君と話し終えて数時間。また、図書室で本を読んでいる。マリアが幻の大地から帰還して、病死したことに目をつけて、幻の大地について調べている。今までに調べた本には手がかりがなく、どの本も個人の意見が記述されているだけで、想像されたものが多い。

闇の王国は、地に飢えた悪魔や怪物が住んでいる。悪魔の水飲み場・血の泉。針が無数に生えている山など、地獄のような場所。

光の王国は、精霊や天使、神に近い存在の聖者がいる。光の溢れる花畑に、聖なる水の流れる小川などがあり、幸せの楽園と称されている。

どれも大差はなく、今読んでいる本に期待するしかなさそう。

マリアの生死、謎のローブの女性、サラサとウオーテルさん、水の王国に納められた魔歌。問題が多すぎて頭が混乱してしまう。今にもそんな問題から逃げ出したい気持ちでいっぱい。

風の城での生活は退屈だったけど、少なからず問題は起きなかった。たとえ問題が起きても、いつの間にか解決していた。今となつては、風の城生活が懐かしくなってくるほど…。

でも、楽な道ばかり通っていていられない。1人でどうにかしていかないと！そうしてあたしは強くなれるんだ。マリアを超える歌姫ディーバになるって決めた。この目標を実現させる為なら、何時間でも何冊でも、読んでやるー！！

そんなことを心の中で語っているうちに、やっと1冊読み終えた。

分厚い本でかなり苦勞した。幻の大地についての本は、後2冊。今読み終えた本にたいした情報はなかった。この2冊もあまりいい手掛かりを得られそうにない。小さくため息をつき、次の本に手を伸ばした。

「マレーヌ、オイラ読み終えた本を戻してくるマロ」

マーションが背中を伸ばした。背骨がボキボキと鳴る。

「オイラが読んだこの本、特に気になることはなかったマロ。残りの本も同じだろうし！」

戻してくるついでに、他の本を探してくるマロ」

読み終えた本をマーションが丁寧に重ねる。それを見て、慌てて笑顔を作る。

「あたしが行く！マーションは持ちきれないでしょ？」

完全な嘘。マーションは怪力の持ち主なんだから、分厚い本が何冊積み重なっても楽勝なはず。しかしあたしは、本を読むのに飽きて、1度本から目を離したくてとっさに嘘をついたのだ。時間つぶしよ！！

「いいよ、いいよ無理しなくて！じゃあ持つて行くわね」

マーションの返答を待たず、重ねられた本を持ち上げる。ズシツとした重みがあるけど、顔には出さず、急ぎ足でその場を去った。

作戦成功！重い足取りにもかかわらず、心は軽い足取りで、本棚を突っ切っていく。幻の大地について書かれたこの本たちは、図書室の1番奥で左端の本棚にあった。結構時間、潰せそう。さっきの決意はどこへ消えたのか。たまにはいいのよ！！

来たときよりも美しく。どこかで聞いた言葉を繰り返しながら、五十音順に並べていく。少し手間が掛かるけど、ちゃんと並べないとね。鼻歌交じりに作業を進めていく。

全てを戻し終えたら、お腹が鳴った。マナーモードのマイコンを覗くと、もう12時を過ぎていた。早くお昼ご飯を食べて、サラサのレッスンを見学しなきゃ！！少し余裕があるので、他の本も探

しておこう。鼻歌を続けながら、棚と棚の間をジグザグ歩いていく。そのうちに、反対側（右端）まであと少し。と、足音が近づいてくる。図書室はカーペットだから、足音が鈍い。反射的に曲がり角に隠れ、鼻歌も止める。誰かがひそひそと会話をしているようだが、足音は1つ。あたしは結構耳がいい。魔歌のために鍛えた聴覚がこんな所で役に立つとは！外なら、風に乗って聞こえる音をたどるのだけ……！

人影は角で立ち止まった。丁度、あたしの曲がり角から見える。あれは、じいやさんだ！マイコンを両手で持ち、誰かと会話をしている。だから、声は2つで足音は1つなんだ。って、図書室でマイコンの通話は禁止だったはずだけど……。

「ええ、上手くいっておりませう！」

「楽しげな声を上げるじいやさん。会話相手が、

『そうか、そうか。では、いつごろ実行するのだ？』

「落ち着いた声を出す。50代男性ってところかな。何を実行するのだろう？」

「もうそろそろじゃ。すぐにも決定するだろう、そっちに行くのが！それから実行じゃ」

『ほう。で、あの執事は手のうちか？』

「大丈夫じゃ。わが国の薬は素晴らしいのう。あやつはわしらの操り人形じゃ」

「じいやさんがにやりと笑う。これって何の話なの！？絶対に危ない話だ！！冷や汗が溢れ出る。

「あのローブ女は素晴らしい知恵の持ち主じゃな。王子を使うのは考えもつかんわ。しかも、風の小娘が来るのも分かったなんて……。ほっほっほ」

不気味に笑う。ローブ女に王子に風の小娘！？それって、火の王国にいたローブの女性とウオーテルさんとあたし？？じいやさんは会話相手と何を企んでいるの？

『おしゃべりなじいさんだな。あまりペラペラしゃべるな。いいかこれは…』

「分かっておる。水の王国を破滅へ追い込ませ、我が土の国を繁栄させる。そうでしょう?」

息が詰まる。足がガクガクと震える。

『分かっておればよい。この計画は必ずしも成功させなければなるまい。ではな、親愛なる友よ』

プツンとマイコンの画面から光が消える。じいさんはマイコンをスーツの中へしまい、杖を右手で持ち、来た道に戻っていく。遠くでマーロンの声がある。「さよならマロ〜」、じいさんに挨拶したのだろう。じいちゃんも挨拶を返している。聞こえなくなった途端、その場に崩れ落ちた。頭の中で色々な考えが交差する。分からない分からない!!!

時間が経つと、落ち着いてきた。そして、力のこもらない足を奮い立たせ、まずマーロンの元へ急ぐ。

「マーロン急いで!」

汗を流し、今はあたし達しかいないから構わず大声で呼ぶ。

「どうしたマロ?そんなに焦って…」

首をかしげるマーロン。そんなマーロンを掴んで、図書室を出る。

「マレーヌ!何があったマロ!?!」

あたしは答えることすら、できず走る。

状況を理解できていない、今、マーロンに土の国が水の王国を滅亡させようとしていることを話しても2人で混乱することになる。とにかく、王様達に話さないと!だって、滅亡を企む土の国に行くこととしてるんだ。

でも、待つて?土の国の計画を話すってことは、ウォーテルさん

が王子だって事も言わなきゃならない。ウォーテルさんが王子だって事がばれたら、サラサとウォーテルさんは引き離されちゃうよね。でも、水の王国が滅亡したら元も子もない？2人がもう2度と会えなくなる？サラサとウォーテルさんはもつとつらい思いをする。

それでも話さないよ。いやでも、土の計画を話したら2人が…。  
ああ、もうどうしたらいいの!?

廊下を突っ切り、階段を駆け上がる。その時だった。放送が流れる。

『速報をお伝えします。昨夜の会議を引き継ぎ、先ほどの会議で決定されました。土の国との対談が決まりました。会談日は明後日9時、対談場所は土の国。王様と王妃様、同行者として補佐役のロベル・タイタン、王家直属の執事兼ボディガード、ウォーテル・スリーザ、他メイド3名、家来5名がつきます。』

王国を出発するのは明日午前11時になります。出発式が10時30分から行われます。

対談内容としては、両国の政治や貿易についてです。今回の会談で土と水、素晴らしい関係を築けるよう祈りましょう。以上です』

そんな!?!遅かったって言うの?!そのまま、階段を上りきったが、前のめりにこけてしまった。

「マレーヌ、大丈夫マロか?!立ち上げれるマロ?？」

マローンが心配そうに手を差し伸べる。マローンの顔が歪む。

「マレーヌ!?!どうしたマロ?何で泣くマロ」

「あたし、どうしていいか分からない!」

泣きじゃくるあたし。そのわけも分からず、背中をさすることし

か出来ないマーロン。

「どうされたんですか？」

声が振ってくる。冷静な低い声。今は顔を見たくない人の声。サラサの執事で、サラサのお兄さんの声。

「ウォーテルさん……」

「大丈夫ですか？もうそろそろレッスンの時間なので」

「あの、ちょっと待ってください。今はそんなことしてる暇はないの！」

あたしは声をからして叫ぶ。それでも、ウォーテルさんは見下したまま、

「サラサ様がお待ちしています」

あたしの体を無理矢理起こす。強い力に抵抗も出来ない。

「いたっ」

「やめるマロ！痛がってるマロ！」

マーロンが引き離そうとするが、今の彼はリストバンドをつけていて、そんな力はない。

「聞いたんでしょう？自分たちのことも計画のことも……」

冷淡に聞こえる声。あたしは抵抗をやめた。

「計画……？」

何も知らないマーロンは首を傾げた。

「知らないのか……マレーヌ様は知っていますね。では……」

”ドスッ”

「かはっ……！」

ウォーテルさんの拳が、マーロンのお腹に入った。マーロンの体が後ろに吹っ飛び、壁に当たり、鈍い音を立てる。

「マーロン……！」

ウォーテルさんに腕をつかまれたまま、叫ぶ。マーロンが、マーロンが……！

「大丈夫です。気絶したくらいで、怪我はしてないでしょう」  
冷たくあたしを見据える。ウォーテルさんってこんな人だった？  
ていうか、なんで土の計画を知ってるの！？ウォーテルさんは利用  
されてるだけなはず。王子として…。

ジャア、執事八誰ノコト？

じいやさんが手の内だと言った、あの執事は？ウォーテルさんは  
サラサの兄で王子。サラサの『執事』。

ウォーテルさんは操られている！あたしは計画を知っている。操  
られているから、他の人に計画を話させないようにするため、あた  
しを足止めしている。

「ロベルさんは気付いていたんだ。俺達のことにも計画もあなたが盗  
み聞きしていると…。だから、俺に  
あなたを止めるようにこれを渡した」

スーツの中から、何かを取り出す。黒い香水。これは、ローブの  
女性が持っていたのと同じもの！

「あなたには眠ってもらいます。自分たちが土の国に行っている間、  
計画を実行する間…」

「待ってよ！あなた、そんなことして、サラサが喜ぶと思うの！？」  
ウォーテルさんが顔を歪める。サラサのこととなると、ウォーテ  
ルさんだつて…。ふいにあたしを掴んでいた手で頭を押さえた。歯  
を食いしばって、頭の痛みに耐えている？

「えっ！？どうしたんですか…！」

がくと座り込むウォーテルさん。

「あなたに、心配される理由はない…。それに、サラサは…」  
”シュッ”

言葉を閉ざし、あたしに向けて、香水をかける。きつくて甘い匂いが鼻につく。頭がボーっとする。体に力が入らない。

「マレーヌ!？」

遠くから、サラサの声が聞こえる。

あたしはウォーテルさんに抱きとめられ、眠りの世界へと落ちていく。

「あなたはただ眠っているだけでいいんです」

そっと呟くウォーテルさんの声は、何の感情も込められていない。

「マレーヌ!どうなさったの!？」

そして近寄ってきたサラサがあたしの名前を呼び、ウォーテルさんがあたしの体を揺する。

消えゆく意識の中見えたのは心配する2人の兄弟の顔。

どこか寂しそうな瞳も見えた。

眠ったら、駄目なのに。頭が真っ白になる。

2人を、水の王国を助けたかった。既に手遅れか…。

眠りの世界へ…

第8話 緊急事態、眠りへ（後書き）

マレーヌが、マーロンが、水の王国が大変なことに…！！

物語が大きく動き出しました！！（）遅っ

最後まで呼んでいただき、ありがとうございます！

コメなどお待ちしております！ペコペコ

第9話 小さき供のせつなる想い（前書き）

やあつとテスト期間が終わりました！！ふう。。。

更新が随分遅れてしまい、本当に申し訳ないです…。

今回はあの人の目線で、お送りしたいと思います！！

とじごじゆっくり

## 第9話 小さな供のせつなる想い

「…レーヌ、マレーヌ」

誰かがあたしの名前を呼ぶ。ここはどこ？

肩まで掛けられた布団。あたしを覗き込むお供の顔。

「マーロン？マーロン！！」

ぱつと起きて、そのまま抱きつく。。

「マレーヌ…」

マーロンも優しくあたしの名前を呼び、穏やかに微笑む。あたしは、涙混じりに声を出した。

「良かった、良かったあ！！」

ぼんやりとだが、あたし達の身に起こったことは思い出せる。マーロンはウォーテルさんに殴られて、気を失った。死んじゃったのかと思った。

「マレーヌも無事でよかったマロ」

ほっとしたように、マーロンも声を漏らす。ぎゅっとお互いの存在を確かめ合うように抱きしめる。温かい体温が伝わってきて、今までのことも少し忘れることが出来た。

「マーロン、あたしはどのくらい寝てたの？」

あたしはマーロンを放して、尋ねた。

「えっと…3日マロ」

「3日も！？その間に何かあった…？」

あたしが眠らされた次の日に、土の国へ出発すると放送で聞いた。

「長くなるけど。ちゃんと聞くマロよ？」

## マーロンSide

目が覚めた。体を起こそうとするが、腹部に痛みを感じた。うつと小さく声を漏らす。寝たまま、あたりを見渡す。ここはオイラたちの部屋だ。オイラは棚に置かれた小さな籠の中にいるみたい。

ベッドには、マレーヌの姿。眠っているようだ。しかし、窓の外の水中は明るい。今は何時だろう。

時計の針は3時を過ぎている。

確かオイラは…。図書室でマレーヌが大急ぎで出て行って、ついに行ったら、放送で土の国との対談が決まって、喜ぶことなのにマレーヌが泣き出して、ウォーテルさんが現れて、無理矢理マレーヌを引っ張るから、引き離そうとしたら殴られたんだ。

なぜ、殴られたのだろう。計画を知らないからって殴られた。計画って何のことだろう。マレーヌはものすごく焦っていた。そしてマレーヌはあの後、どうなって今この部屋で寝ているのだろうか。

今までの経緯が全く分からない。ここで、誰かが座っていることに気がついた。

「サラサ様…?」

椅子に座って俯く少女。オイラの声にハッと、駆け寄ってきた。「まあ、マーロン起きたのね!? 良かったですわ〜」

オイラの顔を覗き込んで、安堵の声を漏らす。

「あの、一体何が…?」

「ええ、レッスンの時間が迫ってるのに2人が来ないから、ウォーテルに呼びにってもらったの。ウォーテルも遅いから、私が見<sup>わたくし</sup>

行ったら、2人とも気絶していて…。

ウォーテルが来たときは既に2人とも倒れていたんですって。何があったの？何者かに襲われたんじゃないかって…？」

サラサ様は少々、違うが状況を説明してくれた。マレーヌも気絶していた…。どうして！？まさか、ウォーテルさんに何かされたのだろうか。しかし、それをサラサ様に聞くことは出来ない。

「オイラも混乱してて、よく分かりませんマロ」

とりあえず、そう答えておいた。サラサ様にウォーテルさんに殴られましたなんて、口が裂けても言えない。

「そうです…。でも、無事でよかったですわ！！マーロン、あなた殴られた痕があるって聞いたけど、痛む？」

「かなり、痛みますマロ…」

ここは正直に言っておいた。それに、背中も打ったみたいで、少しながら痛みを感じる。

「本当！？医者を呼んでおくから、手当てを受けてくださいね？」

「あの、マレーヌは殴られた痕とかあるマロか！？」

オイラは自分のことより、ベッドで眠る主人のほうが気になった。静かに寝息を立てるマレーヌ。そんなマレーヌが殴られたりしたら、とんでもない。オイラはお供失格だ！

「マレーヌは、危害を加えられた形跡はないの。でも、薬剤みたいなもので内面をやられたようなの。それで、気を失ったみたいで…あつても今は、眠っていますわ？」

薬剤で気を失い、今は眠らされている。本当に大丈夫なのだろうか…。

「今のところ異常はなくなつてよ！？」

サラサ様が気遣ってくれたのか、安心させてくれるように慌てて言った。

「そうマロか…。ウォーテルさんに会うことは出来ますか？」

きつと、マレーヌを眠らせたのはウォーテルさんだと確信して、会えるかどうか聞いてみた。

「明後日の対談の準備があつて無理ですわね…。明日、出発ですし、その放送は聞きました？」

どうしても会つて、何をしたか聞きたかつたけど、無理なら仕方ない。オイラはサラサ様の問いに頷いて、話を聞いた。

「緊急だったから、今日中にやらなきゃならないことがたくさんあるんですわ。だから、今日も明日も会えないかも…」

サラサ様が言葉を濁した。オイラも、何も言うことは出来ずに黙り込んだ。

一体、マレーヌに何があつたのだろう。

サラサ様はついさつき帰つていった。明日の出発式に参加するかと聞いてきたが、オイラは遠慮した。マレーヌの傍から、一步も離れたくなかつた。

お医者様も来て、オイラの腹回りに包帯を巻いてくれた。起き上がるとき身がよじれるほど、痛かつたが、そのおかげで少し動けるようになった。と言つても、そう簡単には動けない。だから、結局出発式には参加できなかっただろう。

そして、お医者様はマレーヌの様子も確認した。しかし、何故こうなつたのかも、これからどうなるかも分からないと言つて、部屋を後にした。異常があれば、呼んでくれと言つたが、多分頼りにはならないだろう。

スヤスヤ眠るオイラの主人。寝息はオイラを落ち着かせ、優しい表情はオイラを苦しめるのであつた。

〜翌日〜

結局、マレー又は昨日、目を覚まさなかった。オイラもいつの間にか眠っていて、時計の針が9時半を指していて驚いた。寝ている間マレー又はまた汗をかいていたみたいだ。心底心配しながら、汗を拭いてあげた。

朝食を食べるで、何もすることもなく、ひたすらマレー又を見つめていた。早く目を覚まして、活気ある姿を見せてほしい。

こうなってしまったのも、全てオイラのせいだ。お供として、守らなくてはいけなかったのに。怖くなんてなかった。体を張りたかった。しかし、こんな小さな妖精では反応も遅く、リストバンドを外さないと力を発揮できない。自分が人間であれば、しっかりマレー又を守れるのと思う。それに…。

謝罪の気持ちとして、ウォーテルさんを問いただしても良かった。でも、それは違う。ウォーテルさんに会う事だつてできなかったし、仮に問いただしてもきつとマレー又はそんなこと望まない。

おてんばでハチャメチャだが、自分の思いより他人を優先する。とても優しいマレー又を思い出すと、自然と笑みがこぼれる。懐かしく思い、胸が引き裂かれそうにもなる。守ってあげたいのに、頼りないお供として見られる。

マレー又のことを思うと、いつだって胸がきゅくつに…切なくなるんだ。

マレー又から視線を時計へと移す。出発式まであと少し。王様達

は既に城を出て、出発を待ち構えているだろう。  
最後に、ウォーテルさんに話を聞くべきだったと後悔するのであった。

この日、夕日が山に姿を隠す頃、事態は急変した。

街からの買出しを済ませ、城に戻ってきた。すると、城中のメイドや家来達が騒がしく走り回っていたのだ。1人のメイドに聞いてみると、

「王様達が襲撃されたんです!!! 土の国近くの森で!!!」  
と言つて、慌ただしく走り去っていた。

王様達が襲撃された!? 情報が少なすぎて、何が何だか分からない。慌しい状況に動揺するしかなかった。

部屋に戻り、買ったものを置いて、マレーヌの様子を確かめる。

マレーヌはまだ起きていないし、起きる気配もなかった。

大丈夫なことを確認して、コテツチの元を尋ねることにした。しかし、部屋にコテツチはいなかった。

「マロツチ!!! 探したよ!!!」

戻ろうとしたオイラ。そんなところにコテツチが来たのであった。

「コテツチ…何があつたマロカ!?!」

「襲撃についてこれから報告があるんだ! 急いで!!!」

返事をする暇もなく、コテツチの後に続く。よほど急いでいるのか、コテツチは珍しく飛んで移動している。コテツチはアザラシの妖精だから、飛ぶより地面を這うことを好む。這うより泳ぐ移動法を好み、普段は飛んで移動はしない。でも、飛んだほうが速度はかなり速い。

ズンズン進む、コテッチについていき、地下1階のホールに到着した。地下1階はその階、全てをホールとして、パーティ会場として使っているみたいだ。そこで報告するのだから、溢れるばかりのメイドや家来がいた。コテッチはその上を堂々と飛び越え、会場の隅で立ちすくむサラサ様を見つけ降り立った。

「サラサ様、マロッチを連れてきました！！あつ、まだ始まっていないんですね」

コテッチが少し安心したように言った。

「もう少しですわ。…突然のことで情報が少ないんですって…」

とても不安げな表情。自分の家族が襲われたのだから、不安でいられないはずがない。

「情報省が手を尽くしているらしいけれど、あつ！」

言いかけて、誰かを見つけたようだ。人だかりを掻き分けて入ってきた、眼鏡の男性。たくさんの資料を抱えていることからして、

サラサ様の言っていた情報省の1人か。

「皆さん、静かにしてください！！現状報告をいたします」

講壇に立つ男性。一斉にこの場は静まり返る。

「本日、土の国へ出発した王様一行の乗車した馬車が襲撃されました。」

場所は土の領地の前のエール森で、午後5時43分。王様、他の方たちの安否は不明。

襲撃者は馬にまたがった数十人のグループ。武装をして、剣や弓、銃を所持していたもよう。」

額から汗を流し、ずり落ちる眼鏡を何度も直す情報省の男性。メイドや家来は騒ぎまではしないが、不安感や緊張感にさいなまれて、落ち着きない。

サラサ様は話の途中で口を手で覆っていたが、報告を終えた今は目をきつく閉じ、祈りのポーズをとっている。隣でコテッチが落ち着かせようと、懸命に言葉をかけている。

不穏な空気の中、1人の女性がホールに入ってきて、男性に紙を

渡す。

「あ、新たな情報が入りました、王様達の安否確認についてです！」  
サラサ様がパツと顔を上げる。王様達は無事なのだろうか!?

「ま、まず、王妃様。背中にも弓が刺さり、全身に小さな切り傷。命に別状はないようですが、意識不明。メイド3人は軽傷。兵士5人のうち2人が軽傷、1人が重傷。」

王様と補佐・ロベル、ボディガード・ウォーテル、兵士2人は襲撃者に拉致された様子。

負傷者は近くの村に保護され、治療を受けています。拉致された方たちの現状は全く不明」

ホール内が一気にざわついた。サラサ様は泣き崩れてしまった。

「父上、母上」と呼びながら、大粒の涙を流している。

「現状はほとんど分かりません。報告はこれからも続けていきます。各自仕事に就いてください」

ざわつく人たちに情報省の男性が声を張り上げた。聞こえたのか、聞こえていないのかメイドや家来はまだその場をオロオロしている。情報省の男性に、大臣やメイド長などが加わって、この場にいた人たちが自分の仕事に戻った。

残ったのは情報相の男性と呼びかけにあたった位の高い人たち。

「ではこれから、緊急会議を開かなければなりません。いいでしょうか？」

情報省の男性が顔を見回した。みんな同意して、ホールを出て行った。サラサ様もメイド長に連れられ、会議に向かった。

オイラはおずおずと部屋に戻った。なんでこんなことになってしまったのだろう。

それでも、オイラはマレーヌを守ることを第一に考えないと。  
大好きなオイラの主人を、大好きなマレーヌを守りぬくんだ。

## 第9話 小さき供のせつなる想い（後書き）

どうでしたか？

マレーヌが眠っている間、とんでもない事態になってしまいました。

初めて、マレーヌ以外の視点で書いてみました！

私、実はマーロンが1、2を争うぐらい好きなキャラなんです！！

今回はマーロンの複雑な心情も混ぜ込みながらの第9話でした！！

最後まで読んでいただき、ありがとうございましたペコ

指摘&感想お待ちしてます〜！！！！（がんばって更新率あげたいですー！！）

## 第10話 かえられない現実（前書き）

どうもです！この調子で順調に更新したいですね！！

今回は元に戻って、マレーヌ目線でお送りします。

何も知らずに出来事を話してくれたマロン。

ある事実を知りながら、話を聞き終えたマレーヌ。

悲しい現実突きつけられたまま…

どうぞ「ゆっくり

## 第10話 かえられない現実

「で、今日マロ」

マーションがこれまで起きたことを1つも漏らさず話してくれた。あたしが眠らされた次の日（つまり昨日）、王様一団が土の国に出発したけど、襲撃されて…とこんな感じ？とにかく状況は悪い。

「ありがとう、マーション。…水もらえる？」

「はい、マロ」

脇に置いてあった水を差し出してくれた。マーションは戸惑った感じだった。

「どうしたの？水に何か入ってるの？」

透明な水を怪しげに覗き込みながら聞いた。マーションは首を横に振った。

「違うマロ。こんな状況マロに、いつになくマレーヌが冷静だから

…」

「え？ああ、そう…かな？いや、未だに頭痛がしてね」

起きてから、ちよつと頭痛がしてた。頭に重いものを乗せられたみたい。ポーっとする。しかし、今の状況はかなりまずいと思った。マーションに言ってない、本当の事実があるから。

「大丈夫マロか？まだ寝ててもいいマロよ」

優しく伺うマーション。あたしは首を傾けて、

「心配しないで？食欲はないけど…何か食べたいな」

「じゃ、じゃあ、オイラの栗があるマロ」

とナイロン袋から栗を取り出した。ほらと差しだされて、あたしは静かに言った。

「ありがとう。でも、あたしは皮ごと食べられないの」

「あっ、そうマロね。うっかりしてたマロ」

勢いよく差し出した手を引っ込めて、照れながら皮をむいてくれる。マーロンは本気で心配して、あたしに頼まれたことは完璧にこなしたいみたい。さつきから、あたしのことを気遣って、てきぱき行動してくれている。

栗を丁寧剥いてくれてる。リストバンドを外して、上手に力を加え、皮をスルスル…。とめなければ、20こも30こも剥いていただろう。

「えへへ、マレーヌが起きたから。つい嬉しくって…」

と恥ずかしそうに剥かれた栗を手渡した。そんなマーロンを見ると微笑んでしまった。「笑うなマロ！」と彼に怒られた。こんな和やかな状態でいられるなんて、おかしくなつたのだ。ほんとならもっと深刻になっちゃうはずなのに…。マーロンが和やかにしてくれたんだよ。そういうように微笑んだつもりだった。

「オイラ、サラサ様たちを呼んでくるマロね？その間に着替えたりしておくマロよ！」

と言って、部屋を飛び出した。

初めにシャワーを浴びて、べとつく体をさっぱり洗い流した。シンプルな格好に着替え、濡れた髪を乾かした。鏡の前に来て、髪を梳かし、まとめようとした。しかし、鏡の中の自分を見つめてみた。茶色がかった目。低くも高くもない鼻。薄く、今は血色の悪い唇。顔に張り付く亜麻色の髪。疲れた顔してる。見たときの第一印象だった。目の色があせ、うつすらとくまが出来ている。

ちよつと無理しすぎたかな…？でも、まだこれからなんだ…！いろいろあつて、疲れが顔にまで出たみたい。あたしはいつもできるだけ、疲れとかを隠している。だって、周りの人が心配するんだもん。

目をギュツとつぶり、顔を2、3度叩く。気合いを入れなくちゃ！いつもどおり、髪を耳より高い位置で2つにまとめる。これは元気の証！あたしはいつだって元気で、笑顔でいなくちゃね。そんな

意味を込めて、ツインテールを作るのであった。

こんなこと考えてるのを誰かが知ったら、笑っちゃうね。起きたてで考えることがおかしくなってきたかも。

でも、本当におかしくなれたらいいのに。拉致されたじいやさんとウォーテルさん。その2人は滅亡企画に関わっている。襲撃者は絶対に土の国の人だ。だから、あの2人が土の国にいるのは間違いない。そう確信していた。しかし、その事実を言うことはできない。1番信頼しているマーロンにさえ、言っていない。こんなこと、言えない。言えないよ。

あたし1人が抱え込んだ所で、何も出来ないのは分かっている。こんな重大なことを何故言わなかったのか？

分からないけど、ウォーテルさんを悪役にするつもりがなかった。あたしにはどうしても、ウォーテルさんが完全に操られてとは思えなかった。あの寂しげな瞳を見ると、サラサのことも考えて、滅亡計画のことを口に出せなかった。

椅子から立ち上がったら、丁度マーロンがサラサを連れて、部屋に入ってきた。

「マレーヌ!!」

サラサがあたしに向かって駆け寄ってくる。そして、抱きしめてくれた。

「良かったですわぁ！心配しましたのよ？」

サラサがあたしを放して行った。あたしははにかんで、

「ごめんね。あたしが眠っている間に…、色々あったんだね？」

「ええ、話を聞いているなら早いですわ」

サラサが表情を引き締めた。

「何かあったの？」

「会議で決まったことをお話しするわ。座りましょ？」

丸テーブルの傍にあった椅子に座り、話を始めた。

まず、襲撃の情報が入ってから、医療チームや兵士を送り込み、たくさん情報を迅速に得たと言う。それから会議で、国民への発表、土の国と交信、襲撃者の搜索が決まりましたらしい。そして、

「母上たちがいる、村へ訪問することになりましたの。村への訪問には私も行きませわ<sup>わたくし</sup>」

サラサは簡潔且つ、正確に話した。

「オイラたちはどうすればいいマロか？」

「そう、そこですわ。できれば、2人にも来てほしいという意見が出ているの。でも、マレーヌは起きるかどうかわからなかったし、起きてても体調は万全じゃないだろうと思って。私は反対<sup>わたくし</sup>しましたの。でも、マレーヌが行くと言うのなら止めませんわ。マレーヌの意志でいいわ。決めていただきます？」

ためらいがちに聞いてきた。あたしは迷った。あたしはその村に行つて何をすればいいの？行つても、足手まといになるだけじゃないかな？何の意味もなく行くななんて駄目じゃないかな…。

「ねえ、あたしは村に行つて何をすればいいの？」

と尋ねると、サラサもマールンも驚いた顔をした。

「お得意の魔歌があるじゃない？」

「…そうだよな」

本格的に頭をやられてしまったのだろうか。あたしは魔歌探しの為にここにきて、唯一魔歌が好きなのなのに…。その魔歌さえ忘れるとは。ずっと眠っていて、頭がちやんと働かない。

「マレーヌ、大丈夫マロか？」

何気にマールンが聞いてくる。大丈夫じゃないよ。それすら答えずに、自分でも分からないまま微笑んだ。

「それで、行つてくださるの？」

「もっちゃん！万全って訳じゃないけど、あたしを必要としてくれるんだもの。行くわ！！」

あたしは期待を込めて聞くサラサに、歯を見せて笑った。

「マレーヌが行くなら、オイラも行くマロ!!」

「分かりましたわ。出発は明日の朝の予定ですわ。今日はゆっくり休んでくださいね？」

準備はしつかりね。滞在期間が未定ですので…。お願いしますわ」  
サラサはそう言い残し、部屋を去った。そんな彼女の姿を見て、言葉が零れた。

「サラサ、今とつてもつらいはずなのに。強いよね…」

「そうマロね。家族みんながひどい目に遭っているマロ」

その中の1人が水の王国を滅亡させる計画に関わっていたら？  
言葉を飲み込んで、遠くを見つめていた。

「あの、マレーヌ？何かあったんじゃないマロか？」

マーションがあたしに聞いてきた。心臓がドキリと音を立てる。きつと滅亡計画について感づかれた？マーションはいつだって、あたしが悩んでいたりとすると、すぐに分かる。普段なら、マーションに話していただろう。でも、

「ええ…なんにもないけど…」

今回ばかりは誤魔化すしかない。無理だもん。滅亡計画なんて、怖くて話せないよ。マーションはあたしの目をじっと見つめる。

「だから、大丈夫だってば!とにかく、明日のことを第一に考えなきゃ」

目を逸らし、握りこぶしをつくる。マーションは納得いかない様子。「そりゃ、明日のことを考えなきゃいけないマロ。でも、オイラはマレーヌのことを第一に考えないと…オイラはマレーヌのお供なんだから」

弱弱しく語るマーション。きつと、あたしが危険な目にあったことに責任を感じているのだろう。

「分かってるよ。マーション、心配要ら「本当マロか!？」」

あたしの言葉を遮るマーション。

「絶対におかしいマロ。だって、あの時、オイラ、ウォーテルさんに殴られたマロよ！そのまま、マレーヌだって…何されたマロ!？」

「マーション…」

「なんで言ってくれないマロ…?」

マーションの言葉に俯くあたし。彼は心の奥からあたしのことを心配している。

「オイラが頼りないマロから?」

「違う、違うよ!？」

あたしは必死に否定した。マーションは誰よりも頼りになる人だ。

「じゃあ、言ってるマロ…」

訴えかけるように呟く。そんな消え入りそうな声に、あたしは答えられずにいた。

「そっか、やっぱりオイラは頼りないって…ことマロね。オイラ、外へ出てくるマロ…」

ぼつりと言った。そして、空中を滑って部屋を出て行った。

呼び止めることさえしなかったあたし。…最低だ。

大切な人を傷つけた。こんなあたしがまた一人、また一人と誰かを傷つけてしまうんだ。

## 第10話 かえられない現実（後書き）

どうでしたか？

マレーヌとマーロンがまた喧嘩！しかも、ただの喧嘩じゃないです…。

マレーヌはマーロンを1番頼りにしているのに…  
もどかしい想いでマーロンは立ち去っていく…

届かない想いが2人をかえってギクシャクしてしまう。

最後まで読んでいただきありがとうございました！

次回、このまま王妃様たちの待つ村へ…

お楽しみにペコ

## 第11話 現実を語る（前書き）

更新です！！

今日は、文化祭の振り休なんです。ふとーこーじゃないです！！

シーイブ村で、王妃様たちと再会します。

マレーヌは未だに滅亡計画について悩むのですが…

じじじじじじじじ

## 第11話 現実を語る

青々と生い茂った木がどんどん視界に入り、消えていく。

「マレーヌ、もうそろそろ到着いたしますわ」

隣に座るサラサが言った。「うん」と小さく返事をした。

今あたし達は襲撃された王妃様達を保護している、シーイブ村に向かっている。今朝は8時に出発した。

シーイブ村は王都から離れていて、土の国に近い森の中にある。だから、医療機関が不十分であり、派遣した人たちと交代できた、医者達は準備万端で来ている。かなり厳重な警戒態勢で、20人以上の人を引き連れている。

「皆さん、到着しました！」

運転手が車を止め、車内の人たちに声をかけた。呼びかけられて人たちは、列を成して外に出る。あたしは邪魔にならないよう、サラサと最後に出た。あたしは外から取る荷物もないし、久しぶりに着たドレスで狭い通路を塞いでしまう。あたしの前を歩くサラサは心なしか小さく見える。きつと心配で1番に行きたいはずなのに。王様もウォーテルさんもいなくて、家族ですぐに会えるのは王妃様だけだから。

コケの生えた村の門をくぐると、村長さんが歓迎してくれた。そして、そのまま王妃様たちを保護、治療している診療所に案内してくれた。古い2階建ての小さな診療所。その3階の個室に王妃様たちが痛々しい傷を見せ、待っていた。

サラサは王妃様を見つけるなり、顔をくしゃくしゃにして泣き出した。王妃様はサラサの髪を優しく撫でた。この場にいた誰もが2

人に暖かいまなざしを向けていた。

感動の再会も束の間、王妃様と兵士の一人が手術を受けることになった。命に別状はないが、医療の劣ったこの村の処置だけでは危ないみたいだ。王妃様と兵士はそれぞれ、別室で手術を受けた。

その間、あたしたちはこれから止まる宿へ案内された。診療所の向かいの寂れた宿屋。

荷物を置いて、診療所に集合。マーロンのリュックからあたしのキャリーケースを出し、部屋の隅に置いた。これだけなので、時間もかからなかった。部屋を出て、隣の部屋のサラサを待つことにした。

昨日、部屋を飛び出してから、今日まで言葉を交わしていないあたしとマーロン。お互いの目を見ようとしない。あたしはどうしても、マーロンの誤解を解きたかった。飛び出したときのマーロンの儂い顔が脳裏に焼きついて、ひどく心を痛めた。

マーロンは一番頼りになるし、信頼できる人だ。それでも、話せないことだってある。滅亡計画について、これはどうしようもないもの。

とにかく、ため息が止まらない。またため息をつく。と、ドアが開いた。

「マレーヌ、お待たせしましたわ！」

サラサがやっと部屋から出てきた。その姿にあいた口が塞がらなかった。

「サラサ、どうしたの!？」

「着物では動きにくいので、こちらの服に替えただけですわ」  
くるっと一回転して、微笑むサラサ。

いつも着物のサラサが、水色のチュニツクにピンクのボレロを羽

織り、黒のスキニーパンツでびしっと決めている。髪も下ろさず、ポニーテールにして働く女性をイメージづけた。

「どうですか？マレーヌの雑誌を参考にしてみましたの。これでどンドン働きますわ！！！」

「う、うん。すっごく決まってるよ。やる気満々だし……」

いつものギャップに驚きが隠せないあたし。移動中、興味身心にストポ（ストロベリーPOP）を読んでいた。絶対に着物しか着ないと思っていたけど、やっぱりサラサも普通の女の子なんだなと実感した。

「サラサがそんなにやる気出してるなら、あたしだって！！」

あたしは思い切って、アームカバーを外し、ドレスも脱ぎ捨てた。サラサもマーションも部屋から出てきたコテツ君もあんぐりである。いやいや、ちゃんと着てますから。白地にスパンコールがちりばめられたTシャツに、かつちりした黒のミニスカートがあらわになった。

「マーションこれしまつてて！」

「う、うんマロ」

脱ぎ捨てたドレスとアームカバーをマーションに渡した。リュックに突っ込むマーション。さつき何気に返事してもらえて、ちよつぴりうれしかったのは秘密。

「まあ、マレーヌ、素敵ですわぁ！」

歡喜の声を上げて、拍手をくれるサラサ。横にくっついていたコテツ君も目を見開いて、あたしを見つめる。

「さっ、行きましょ!？」

恥ずかしくなって、せかさように言った。

診療所では特にやることもなく、おしゃべりしながら待っていた。相当な時間をかけて、手術は終わった。王妃様も、兵士も異常はなく、安静にしていれば、徐々に良くなるという。

「では、現状報告を致します」

手術が終わり、現状の分からない王妃様達に報告することになった。個室の真ん中で、サラサが話し始めた。ここにいるのは、あたしにマーロン、サラサ、コテツ君、負傷者7名、シーイブ村の村長さんに、つれてきたメイド2人。

サラサは、手元の資料を読み進めながら、簡潔に話している。あたしもちやんと聞いたのは初めてだ。しっかり聞いていくうちに、胸騒ぎがした。改めて聞き、状況はかなり悪いと打ちのめされた。襲撃者は不明らしいけど、計画を企む土の国の人だろう。拉致されたじいやさん。ロベルは土の国で新たな計画を練っているのだろうか。もしかして、もう動いてるかも…。

「以上ですわ」「ちよつと聞いてください!」  
サラサが話を終えたとき、あたしは覚悟を決めた。みんな驚いた表情。

「急にごめんなさい。あたしがこれから話すこと、信じてください」  
「マレーヌ…?」

マーロンが心配して、隣に来てくれた。

「あたし、聞いてしまったんです。ロベルさんが話していた、ある計画を…」

「ロベル?ロベルが何を計画しているの?」  
ベッドから王妃様が問いかける。

「あの1ついいですか。ロベルさんってどこの国の出身ですか?」

「ロベルは、確か土の国でしたわ。優秀だから、王宮で働くことを決意してっ…」

王妃様の返答に口をきゅつと結んだ。王妃様はロベルのことをとても信頼している。

「…実はロベルさんが、土の国の誰かと手を結んで水の王国を滅亡させようと企んでいるんです…」

誰もが息を呑んだ。長年水の王国に勤めてきたロベルさんが、水

の王国を滅亡させようなんて考えるはずがないし、土の国が水の王国を滅亡を企んでも、無謀な計画に過ぎないから。

初めに口を開いたのはサラサだった。

「マレーヌ、本当ですか？じいやが…」

口を手で覆い、いまだに信じられないでいるサラサ。サラサは、ロベルに小さな頃からお世話になっているのだから、信じられるはずがないだろう。

「あたしのこの耳で聞いたわ。本当のことなの…！」

あたしは力強く訴えた。サラサが持っていた資料をぐしゃっと握り締めた。周りの人は俯き、黙り込んでしまった。

「あと、王妃様に伝えたいことがあって…。皆さん、1度席を外してもらえますか？」

静かに告げた。もう1つ言っておかなきゃならないことがある。

これは多くの人に聞かれては困ることなのだ。数秒後、1人が動き出し、ほぼこの部屋から人がいなくなった。

「サラサ、部屋を出なさい」

残っているサラサに促す王妃様。コテツ君もズボンの裾を引っ張っている。マールンもいるが別に問題はない。

「私も同じ王家の者として聞く権利がありますわ！」

「サラサ…」

決意のこもった言葉に王妃様言い返せずにした。

「大丈夫です。いずれサラサも知ることになるだろうし、サラサにも関係がありますので…」

そつと言い、手招いてサラサとベッドの脇のいすに腰を下ろした。お供2人はあたしたちの足元に座った。

本当は言いたくない。でも、言わないと、

「まず、サラサに謝らなければならぬ。あたし、サラサとウオ―テルさんの話、立ち聞きしちゃったの。ごめんなさい」

「オ、オイラもマロ。ごめんなさいマロ」

あたしに続けて、マールンも謝った。サラサが優しい瞳で見つめ

ている。まだ、何のことが分かっていないのだ。

「サラサとウォーテルさんが…兄妹って。土の国へ行くための会議のとき、話してたよね…？」

サラサが視線を泳がせながら、唇を噛む。今にも泣き出しそう。

「王妃様、ウォーテルさんは確かにあなたの息子さんなんですね？」

王妃様はすぐに口を開かなかつたが、懐かしむように、

「ウォーテルが生まれたときは本当に感激しましたわ。この子は、水の王国を治める立派な王になれるってね…」。

でも、あの子に魔力がなかった。魔力がないことには、国や民を治め、まとめあげることができない。初めは、成長すれば魔力が備わるかもしれないと見守っていたの。けれど、サラサが生まれてからも魔力は備わらなかった。

それで、ウォーテルに魔力はなくても、時期王となったサラサの補佐役になつてもらおうと思っていました」

そこで、一息吐いた。過去の苦しい思いがよみがえつたのだろうか、辛そうな表情をしている。

「でも、それは許されないことだと。一人の占い師に言われたのです。魔力を持たない王族が王家にいれば、国を滅亡へ追いやると…。その言葉に誰もがあの子の存在を否定した。

そして、病気で亡くなったことにし、あの子を王都から離れた田舎の村の養子にしたのです。様子を見に行ったり、里親からの手紙を貰ったりして、気にかけていました。普通の子として、平和に暮らしていたと思っていました。しかし…」

王妃様もサラサも涙をとめどなく流していた。あたしは必死に堪える。

「サラサが11歳になった時、執事を配属することになりました。

その子は、執事育成学校の逸材だと聞いて…。でも、その子はウォーテルでした。あの子は里親にも伝えず育成学校を通い、寮生活ながらも飛び級で合格した。名前も出身なども全て偽って、水の王国に来たのです」

「その後どうしたの？ウォーテルはお兄様は、残っていらっしやるわ」

サラサの質問に、王妃様は彼女の手を取って答えた。

「あなたの傍に居たいって言うウォーテルのまっすぐな意思を尊重してあげたのよ。」

あなたや、いいえ全ての者にウォーテルの存在を気づかれなければ残っていない。1人にでも悟られたら、村に戻るだけでは済まない、国外追放の条件でね…」

「おかしいですわ！お兄様は悪いことなんて何一つやってなんかありませんわ！！」

サラサが耐え切れず、喚いた。

「魔力がなかったただけで、王家に認めてもらえなかったお兄様を、国外追放だなんて。そんなのひどいじゃないですか…」

涙声で訴えるサラサに、

「サラサ様、それは違います。王妃様たちはウォーテルさんを守るためにそのような条件にしたのです！」

コテツ君が呟いた。続けて、

「本来ならば、この時点でウォーテル様は辞めさせられていました。亡くなられたウォーテル様が、生きて執事をやっているなんて、国民にばれたら一大事になりかねませんから。」

サラサ様のために死ぬ気で頑張られたウォーテル様を引き離すなんてできなかつたんですよ！？」

最後の言葉は王妃様に向けてだ。王妃様は弱弱しくだが、確かに頷いた。コテツ君がサラサのほうを見て、

「ウォーテル様は今までサラサ様と別れないように、兄妹だということを確認なかつたのです」

「じゃあ、なぜ？」

あの夜認めたのか？サラサはそう続けたかったのだろう。

「あの、少し話が飛ぶんですけど、まずこれを言うべきでした。ウォーテルさんはロベルさんに操られています。」

それが関係して、認めたのじゃないかなって…」

こんなこと言いたくなかった。でも、言わないわけにもいかない。「ロベルさんが、王子を使うとか、執事は手の内だと言っていました。どちらもうォーテルさんの事だって気づいたんです」

「えっ、じゃあお兄様を利用して、水の王国を滅亡させようとしているの？」

サラサが不安そうに尋ねる。あたしは小さく頷いた。ここでマールオンが、

「もしかして、ウォーテルさんのことをばらすんじゃないマロか！？」

顔の色を青くした。

「国民にばらして、混乱させて…そうやって滅亡させようとしているんじゃないマロか！！」

早口にまくし立てる。あたしたち全員が青ざめた。その瞬間、「皆様！誘拐された王様達が戻ってこられました！！」

槍を片手に兵士がドアを開けて叫んだ。王妃様以外が立ち上がり、顔を見合わせた。そして、すぐに3人が運ばれてきた。大きな傷はないが、土や泥で汚れていた。慌てた様子の王様があることを告げた。

「我らは土の国に捕まっていた。ロベルは土の国の者と、悠々と話していた。そして、我らを牢屋に閉じ込めた。ウォーテルだけを残り、我らにシューイブ村に行つて、ある事を伝えるように言つて、ここまで歩かされた…」

王様は深呼吸をして、「古の巻物を渡さなければ、ウォーテルが…王族だということを世間に公表すると…」

この場に居た人々は理解できずにいる。ウォーテルさんが王族だなんて、知るよしもないのに。

あたしやサラサたちは、マールオンの察したことが当たり、動揺していた。

王様は固く口を閉じ、深刻な表情で黙り込んだ。

そして、あたしはその真意が分かるように、この場に居た人たちに全てのことを伝えた。しかし、早口で簡潔に。

伝え終わった後も、沈黙は続いた。誰も、信じられないのだ。ついさつき、ロベルさんが滅亡計画を企んでいることを知ったばかりで動揺しているのに。しかし、馬鹿な人たちが集まっているわけではない。みんな分かったいるだろう。滅亡計画が本当であることを。「父上、どうなさるのですか？お兄様のことが国民に知らされれば、国は混乱に陥ります。招いてはいけない事態を起こしてしまいますわ。それが、土の国の思う壺なのです」

さつきまで、泣いていたサラサが、一番冷静だった。みんなの前では弱さを見せない。みんなを混乱させないように、しっかりと構えている。

「土の国は巻物の半分と豊水のハープを手に行っている。こちらの巻物を手に入れて、魔歌を復活させようとしているのだな…」。

魔歌と豊水のハープで水をはぐくむという言い伝えがあるからな。水不足の土の国はそれを狙っているのだ。

しかし、巻物を渡してしまえば…。だからと言っても、3日後に巻物を渡さなければ、ウォータールのことを公表されて混乱を招きかねん」

と言って、頭を抱える。そんな王様に駆け寄り、優しく肩に手を乗せるサラサ。

「大丈夫ですわ。父上、こちらも何か考えなくては。巻物もハープも水の王国の物ですし、ウォー、お兄様だって…。みんなが無事で済む策を考えなくては…」

凜とサラサが言った。

しかし、いい策がすぐ見つかるはずない。

どうすればいい？状況はとても不利だ。何かいい方法はない？この状況をうまく使って…。王様達は巻物を渡して、国民の反感を買うと恐れている。渡さなければ、ウォーテルさんが王族だということとをばらされて、国民の混乱を招くことも恐れている。

この状況をうまく使えれば…？王様達はどっちを取っても、国民の反感を買うと思っっている。そこをうまく吐いたのが土の国。これって、土の国が悪いだけじゃない…？

「王様！ウォーテルさんは確実に王家の血を引いているんですね！？」

「ああ、そうだ…」

「そうです。それですよ！！」

「何がどうしたのだ、マリアンヌ姫よ」

あたしはみんなが唾然とするような秘策を口にした。

月が怪しく光っている。

第11話 現実を語る（後書き）

マレーヌが思いついた秘策…！？

どんな秘策なのでしょうか…！

問題だらけの中、水の王国の危機を救うため、マレーヌたちが！  
！！（ネタバレしそうなので強制終了）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

次回もがんばりますペコ

第12話 作戦実行！？（前書き）

遅くに更新します！！

いよいよ、物語も終盤に差し掛かります！

水の王国の滅亡を阻止するため、魔歌とハーブを取り戻すため、

そして、ウォーテルさんを助けるため！！

マレー又たちが行動を開始します。

どろどろゆっくら

## 第12話 作戦実行!?

（3日後）

まだ雨は降っていないが、空は灰色の雲で覆われている。

あたしが思いついた秘策はともいとは言えない。しかし、この状況をうまく使うにはこれしかなかった。

今日はこのシーイブ村にたくさんの人が集まっている。窮屈なこの村に設けられた、小さな会見場。集まったのは記者やカメラマン達。大至急、水の王から緊急連絡があると発表されたからである。それを嗅ぎつけた各国の記者たち。

何が発表されるのか？と興奮している記者たちの前、会見が始まった。

「皆様、お集まりいただきありがとうございます」

壇に上がった王様が一声かけ、それに合わせて王妃様とサラサが礼をする。フラッシュが飛び交う。脇で見守るあたしは不安でいっぱいだった。

あたしが考えたことだが、これからやることに心臓の高鳴りがうるさい。もしかしたら、この会見は逆効果かもしれない。しかし、それも覚悟で会見を開くことにしたのだ。

「本日の会見はあることをお伝えするためのものです」  
フラッシュの嵐はあたしの心臓と同じように激しい音を立てている。

「15年前、水の王国には王子がいました。が、病気で亡くなった。しかし、それは…事実ではありません」

重々しい口調。対照的にフラッシュは軽快に鳴っている。

「王子の名はウォーテル・イネット。ウォーテルには生まれつき、魔力がなく、王家に向かい入れる決断ができませんでした。ウォーテルは亡くなって…いません。ウォーテルは王家の者としてではなく、一般人として生きてもらう道に進んでもらいました」

そこまで告げると、ある声が飛んできた。

「今、誘拐されている執事の名前が…」

「それについてもお話致します」

王様が途中で遮って、話を続けた。

「今、現在誘拐されているサラサ姫の執事兼ボディーガードはウォーテル・イネットです。」

彼は養子に引き取られた末、独断で執事育成学校へ通い、卒業しました。そして、水の王国で執事として働くことになりました。

すぐに辞めさせるつもりでいました。しかし、ウォーテルの…いえ、私達の甘い決断の末、彼を執事としてひきとめました」

そこまで言って、王様が言葉を詰まらせた。会見は作戦のうちであるが、王様達にとっては大きな覚悟が必要となった。

この会見で、ウォーテルさんを王族だと認める。そうすれば、土の国に少しでも優位な立場に立つ。それが目的ではあるのだが…。

しかし、いつまでもここで会見を見ているだけではいけない。王様が泣き出すサラサを促し、壇から下ろして話を続けた。震えるサラサをあたしが村の奥へと連れて行く。

マーロンとコテツ君が待つ馬小屋へ。次はウォーテルさんを助け出す！それから、古の巻物と豊水のハーブを奪い返す！！

「マーロン、コテツ君！」

それぞれが馬の上で待っていた。あたしとサラサが馬に飛び乗り、手綱を引く。馬がカツンカツンとひづめの音を鳴り響かせて、村の裏にある小道を抜ける。サラサの後にあたしが続く。

「うまく抜け出せましたわね！土の国まで急ぎますわ」

サラサがそう言い、手綱をもう一度強く叩く。

「王様達がうまく気を引いてる間に…ね！」

あの会見はカモフラージュも意味する。あたしたちは土の国へこっそり忍び込むのだ。

ロベルたちが待つ土の王の家の地下に、ウォータールさんが捕まっている牢屋があるらしい。王様達もそこで捕まっていたらしい。そこへ入り込める抜け道のようなものがあるらしく、あたしたちは今馬を走らせている。

「僕達だけでできますかね？やっぱり王様達もいたほうが…」

「私は…私を守ってくれたお兄様を助けたいのです。お兄様を利用して、巻物もハーブも奪って、水の王国を滅亡なんてさせませんわ！！！」

コテツ君の弱気な発言に対し、サラサは強気だった。サラサの言葉を聞き、手綱を握る手に力が入る。

「そうマロ！どうなるか分からないけど、やるしかないマロ。後で兵士の人たちも駆けつけるって言ってたマロよ。それに、馬に乗れるお姫様2人は心強いマロ！！！」

マーロンが少しふざけた感じで言った。

「まあ、うふふ！馬術のレッスンもして、正解でしたわ。マレーヌもかしら？」

サラサがおどけた調子で言った。その質問にはなぜか、マーロンが答えた。

「マレーヌは小さい頃から、城の敷地内を馬で走り回っていたマロから！！！」

「んなつ！ま、まあ、とつても頼もしい小さいお供と真ん丸いお供がついていれば心配ないわね」

皮肉っぽく言ってみた。すると、お供2人が「そんなことない」と声をそろえるから、噴出してしまった。

どんだん村が遠くなり、土の国が近づいてくる。もう後戻りはできない。ひづめの音だけが森に響く。

「皆さん、もう着きますわ。呼吸を整えて、ここからはお慎重に」  
サラサが木の陰から何かを見つけて、そう言うと、一気に緊張感が高まった。

馬から下りて、馬を木につなぐ。サラサが木の陰から観察している。あたしも見てみると、頑丈な鉄の扉に囲まれて、入り口は1つだけのようだ。入り口には見張り役の人がいて、簡単に入るわけにはいかなさそう。しかし、あたしたちは入り口から堂々と入らない。牢屋への抜け道を探さなくちゃ。

「あの大きな建物が土の王たちが待つ家ですわね。反対側へ回りましょう」

森を大きく迂回して、入り口とは反対側に足を忍ばせる。こちら側になると、大きな建物が近くに見える。そして、扉の外には、今にも崩れそうな井戸が3つ。少女が水を汲んでいる。

「あの井戸ね」

あたしがそつと呟いてみんなが顔を見合わせる。

「いいですか？真ん中の井戸に入ると、牢屋につながる道があるのですわ。そして、まだ薬で操られてるかもしれないウォーテルをマレーヌの魔歌で目覚めさせる」

「了解です、サラサ様！」

コテツ君が威勢のいい返事をした。あたしもマーションも静かに頷いた。

あたしがいつも歌う魔歌は、体や心の傷を癒す魔歌。しかし、魔歌にもいろいろな種類がある。例えば、一時的に人を眠らせる魔歌。失った記憶を思い出させる魔歌。感情を変化させる魔歌など、たくさんあることを、本を読んで知った。でも、それには技術と強い魔力が要り、簡単にできるものではない。

魔歌も普通の魔術もだけど、人によって、ある程度魔力を持っていても、できるものとできないものがある。

そして、今回歌うのは、翻弄されている薬の解毒をして、サラサ

の想いを届ける…みたいな魔歌。薬の解毒ができなくても、サラサの想いが届けば、きつとウオーテルさんを元に戻せる…気がする。上手くいくかどうかは分からない。初めて歌う魔歌だし、できる魔歌なのかできない魔歌なのか、怪しい。それでも、今回の秘策ではあたしの魔歌が大事になってくるわけで、かなりのプレッシャーである。

「皆さん今ですわ、走って！」

水を汲んでいた少女がいなくなったのを見計らって、サラサが合図を送った。一斉に、真ん中の井戸に向かって全力疾走。

井戸は大人2人でも、余裕なスペースがあった。ということ、飛べる2人の妖精お供に抱きかかえられ、暗くじめじめする井戸の中へと入っていた。

暗闇の中、バランスを崩しながらも井戸の中についたが、真つ暗でも見えない。冷たい水がひざの位置で流れて、体に堪える。

マーロンがカンテラを持っていなければ、先に進めなかっただろう。カンテラの淡い光で、水路をどんどん進んでいく。この先の岸に上がれば、牢屋にいけるのだが…。

「ほへ？行き止まりじゃん」

岸が上がって少し進むと壁に激突した。行き止まりで先に進めそうではない。でも、他に曲がる道なんてなかった。壁に近づいて、触ってみる。

ざらざらした土の壁。でこぼこしていて、かなり脆い。仕掛けがないかと周辺を触るが、何も無い。

あたしは「どうする？」と肩をすくめた。サラサも困った表情で、コテツ君を見つめる。

視線を感じたコテツ君はどこからともなく、巾着袋を取り出した。何かが入っているみたいだけど…？

「それはなんですか？」

「まあ、見ていて下さい」

コテツ君は汚れた巾着袋をあけ、ヒレでひとすくい、中から砂を取り出した。きらきら光る赤っぽいその砂を、壁の真ん中のほうにかけた。

すると、驚くことに土の壁はサーッと音を立て、穴を開けた。声を出す暇もなく、コテツ君に促され、穴を通り抜けた。赤い砂がかかった部分だけが穴が開いて、ぼろぼろと崩れながら形を保っている。

通り抜けて、お忍びように着たマントの埃を払う。その間に、穴はだんだん小さくなり、元通り壁に戻った。

「さっきのはどうやったマロ？」

「僕も原理は知りません。でも、ここを通るときに使って、兵士さんに渡されました。」

この壁にかけたら、壁の土が反応して、一時砂になって崩れるんですね…ここは？」

説明してから、コテツ君が辺りを見渡した。それにつられて、あたしたちも見渡す。

ずっと並ぶ柵。これは牢獄だ。あたしの視界に入る牢獄の中に、誰も入っていないかった。と思った。

「お、お兄様…」

サラサがすぐ左の牢獄に近寄った。その牢獄の奥で、壁に寄りかかって、あぐらをかいて座るウォーテルさんの姿。破れて汚れたぼろぼろのスーツを着て、サングラスはつけていなかった。前見た、涼やかできりつとした瞳は以前と違い、濁り虚ろとしている。顔面蒼白で、疲れきっていることが分かった。

「お兄様、私わたくしです！サラサです！」  
柵にしがみつき、必死に訴えている。

「サラサ様、お静かに！気づかれています。落ち着いて下さい  
！！！」

「でも、だっってお兄様が…！！」

崩れ落ちて、震えるサラサ。しきりに「お兄様」と繰り返している。隣でコテツ君がうるたえている。ウォーテルさんは身動きしない。

「マーロン、柵を壊して！」

マーロンはあたしの指示を聞き、すぐさまリストバンドを外す。柵をぐつとつかみ、歯を食いしばって力を込める。

グニャっに変形した柵の隙間から、マーロン、サラサ、コテツ君、あたしと中へ入る。

「お兄様、しっかりなさって」

サラサがウォーテルさんに手を伸ばす。

”パシッ”

伸ばした手はむなしくも拒否されて。

拒否された手をもう一方の手で覆い、目に涙を溜めるサラサ。目にかかる髪の間隙から、妹を睨むウォーテルさん。

「どうして…？」

震える声でサラサが兄に問いかける。

「俺は…あなたを…守りきれなかった。俺は…あなたたちを、裏切ったんだ…。ロベルの手下となり…俺を切り捨てた水の王国を…」

違う、でも…いやっ、くっ！！」

ウォーテルさんは途切れ途切れで心境を語る。しかし、頭の痛みでサラサを拒否した手で頭を押さえた。

「お兄様、大丈夫ですよ！？」

もう1度手を伸ばす。しかし、「触るな」と言うように、ウォーテルさんが空いている手を振り回す。

「近づくな、近づかないでくれ！」

尚も手を振り、叫ぶウォーテルさん。

そんなウォーテルさんをサラサがふいに、優しく包むように抱きしめる。驚いて、動きを止めるウォーテルさん。サラサが囁き、話しかける。

「お兄様は何も悪くありませんわ。魔力が備わっていなかったのも、

じいやに利用されたのも…。私をずっと守ってきてくれたじゃありませんか。守りきれなかったなんて、そんなことありませんわ？」サラサが背中に回した腕をきつくしめる。その行動に、体をびくっと震わせたウォーテルさん。しかし、それでももがき、サラサを引き剥がそうとする。

「うそだ、うそだ！だって、俺は…！」

暴れだすウォーテルさんを必死に抱きとめるサラサ。体を叩かれても、引っかかれても、絶対に離そうとしない。

「マレーヌ、早く魔歌を歌うマロ！2人とも危ないマロ…！」  
マントの裾を引っ張り、急かすマロン。こくと頷き、深呼吸する。そして、もう1度深く息を吸い込み、ウォーテルさんへ向けて魔歌を紡ぐ。

くどうして 悲しい顔をするの

泣かないで 笑顔が見たいよ

心に溜め込んだ水が あなたの頬を濡らす

止まらなくなっちゃったんだね

いいよ カラカラになるまで 全部流しても

僕が全てを受け止める 思いっきり声をあげて泣いて

あなたの水はともきれいだ

全て流せば 清らかな川になって 輝く海となるよ

いつも傍で見守ってくれた 傍にいてくれたのに

いつの間にか 溢れるほどになった水

気づかなくて ごめんね

だから

僕が全てを受け止める　いつどんなときでも  
あなたの傍に僕がいるから  
僕を守ってくれるあなたを　僕が支えるから

泣いていいよ　笑顔になっってくれるなら

「サラサ、ありがとう」  
感謝する兄の声。

涙を流すウォーテルさんの姿。サラサに寄りかかって、泣いてい  
た。

サラサの左目から一筋の涙が頬をつたっていた。

コテツ君は唇をかみ締めて、穏やかな表情で兄妹を見つめている  
隣でマールロンは腕で顔をぬぐって、笑いかけてくれた。

あたしは瞬きして、笑い返した。目の端で涙がはじけた。

第12話 作戦実行！？（後書き）

どうでしたか？

ウォーターさんが…戻ってくれたあ（泣）

最後の一人一人の泣き、に力を入れてみました。頑張りましたあ！

コメなどお待ちしております〜！！

最後まで読んでいただきありがとうございましたペコ

次回もよろしく願いしますペコペコ

### 第13話 勝利か、敗北か（前書き）

かなり遅くなってしまいました（汗） 13話更新です！！

水の章、最終話。最後に待つのは勝利の微笑み？敗北の叫び？

マレー又たちの活躍はいかに！？

まじげいじゅくくじ

### 第13話 勝利か、敗北か

「ここだ、柵を壊してくれ。あれは王様達が保管するために作り出した、水の玉だ。ウォーター・ボールそこに、ロベルたちが毒を仕込んだ。ハープに害はないが、人が触れれば溶けてしまう。

サラサ、あれを浄化できるか？」

フラフラのウォーターテルさんがマーションに指示を出し、ハープを包む紫色の玉について説明した。

ウォーターテルさんは操られていてもなお、サラサを守りたいと言う気持ちもあつて、見事、元に戻ることができた。そして、ハープのある牢屋に案内してくれた。

「できますわ！」

サラサが自信満々に答え、あたしがウォーターテルさんの体を支える。ウォーター・ボール

水の玉の前で止まり、サラサが両手を横に突き出し、集中する。すると、手首の周りに水分が集まり、リングになった。

「水よ、穢れを浄化せよ！」

声と共に、両手を水の玉へと突き出す。リングはサラサの腕から離れ、紫色に濁った水の玉を包み込む。ウォーター・ボールリングがくるくると回転して、水がきれいになつていく。

いつしか透き通り透明になつた水の玉が割れた。ウォーター・ボールハープは落ちる前にサラサが優しく持ち上げた。

こちらを振り返り、朗らかに微笑むさまは女神のようで。

「結構簡単でしたわ。さあ、お兄様、土の王のところまで案内してください」

コテツ君にハープを預け、あたしに加勢してウォーターテルさんを支

える。

「本当にいいんだな？交渉して、すんなりいく相手じゃないぞ？」

ウォーテルさんが眉を顰めて、サラサを見る。

「巻物を半分取り返さなくてはいいけませんもの。マレーヌの為にも、ね？」

サラサが首を傾けて微笑む。

ウォーテルさんは折れて、部屋まで案内してくれた。フラフラな足取りだ。無理しなくてもいいと言ったら、

「俺はサラサを守らなくちゃならない」

と返された。

あたしの魔歌で回復しても良かったのだが、そうになると、今度はあたしがフラフラになる。というか、さっきの魔歌を歌ったせいで、体は限界に達して、魔力も残りわずかだった。それでも、最後まで頑張らなくちゃ。マリアの魔歌を手に入れなければならぬ。

「危なくなったら、俺をおいて逃げるんだぞ？いいな」

とドアの前に来て、ウォーテルさんが呟いた。

「何言ってるんですの？そんなこと絶対にしませんわ」

「そうですよ。みんな水の王国に帰るんですから」

サラサもあたしも力強く言った。ウォーテルさんはばつ悪そうにしたが、フツと笑って、あたし達の肩から腕を下ろし、自分の足で歩み、ドアを開けた。

”バンッ”

「なんじゃ、おぬしら!？」

派手に開いたドアの音に、部屋のソファに座っていたロベルが立ち上がって叫んだ。その右隣にロベルと同じ年くらいの男がぎょつと目を見開いている。黒い肌で白髪交じりの男。この男が土の王かな？

「サラサに、風の小娘！なぜここにいる？シーブ村にいたはず…」  
ロベルは自分を偽らず、本性をあらわにした。テレビとあたしたちを交互に見ながら、混乱している。土の王はウォーテルさんを指差して、

「お前、いつ牢獄から抜け出した！？」

「ついさっきだ。俺はもう、お前達の操り人形じゃない！」

「くっ、なんだと！？どういことだ、薬の効果は絶大ではなかったのか、ロベル！」

土の王はウォーテルさんの言葉を聞いて、ロベルに向けて怒鳴る。ロベルは縮こまり、

「わしにも分かりません。まさか、風の娘、お前の魔歌で…！？」

とあたしの顔をぎっと睨んだ。

「そうよ！それに、あたしは風の小娘じゃない！」

あたしは鋭く言い放った。

本当は、魔歌のせいで疲労がたまっていて体がだるい。しかし、悟られるわけにはいかない。状況が不利をこれ以上不利にさせるわけにはいかないもの。

「おぬし達、あの会見はトラップか。我らの目を少しでも、あちらに向くよう…。そして、おぬし達だけで乗り込んだと言っのか」

頭の回転が速いロベル。全て当たっている。

「話が早いですわ。さあ、古の巻物を返してもらいましょうか？」

サラサが要求する。土の王がきらびやかなローブの中から、巻物を取り出し、巻物を開ける。巻物は半分で切れている。

「これが欲しいのか？ほう、いい度胸だ。しかし、こやつ」

とウォーテルさんを指差しながら話すが、サラサが割って入った。「会見はあなた方の目を欺くだけではありませんわ。お兄様のことを世間に公表するためのものでもあってよ？だから、その手はもう通じませんわ！！」

土の王たちは驚い ことなく、余裕の笑みを浮かべた。不適に笑う姿に、背筋が凍った。

「そうだったな。分かっておるぞ、我が友たちよ？」

「わしらだつて馬鹿じゃない。出てきてよいぞ！」

次の瞬間、2人の声に反応して、四方から体のごつい男達が現れた。天井から、カーテンの裏から、ドアから。って、ドアの脇ではマーロンとコテツ君が潜んでいたはず。コテツ君は豊水のハーブを抱えたままではないか！？

「放すマロ！痛いマロ！」

「やめてください！放してください！！！」

振り返ると、お供2人はごつい男に捕まっていた。しかし、ハーブがない。

「マーロン、コテツ君！ハー……」

あたしが呼びかけたが、マーロンの目を見て、言葉を飲み込んだ。ハーブはリュックに隠したのだろう。マーロンがあたしの目をまっすぐ捉えたからそう悟った。ハーブを取り返したことがばれたらまずい。

気がつくのと、あたしもサラサもウォーテルさんもそれぞれ捕らえられていた。抵抗しているが、ウォーテルさんでさえ、太刀打ちできていない。

「さあ、どうする？この状態では、何もできんのう。ひっひっひ」

ロベルがひきつった笑いで歩み寄ってくる。

「巻物を仲間達に持ってきてもらうよう頼むか？そうすれば、逃がしてやってもいいぞ」

土の王も不気味に笑う。男達も声を上げて、嘲笑う。

巻物はマーロンがリュックの中に隠し持っている。しかし、渡すわけにはいかない。

男に捕らえられてまま、唇を噛む。考えが甘かった。ロベルたちが2人で悠々と待つてるわけなかったのに！どうして、気づかなかったの！？

「さあ、どうする？」

古の巻物と豊水のハーブで大雨を降らして、我らが本当の水の王国をつくろうぞ！水の豊かな国はどちらか？我が小国は一気に王国になるなあ！！」

王がじりじりと近づき、手を広げて夢を見る。

「そんなこと絶対にさせない！！」

「そうですね！あなた方の考えは間違っていますわ！」

兄妹が叫び、抵抗する。その間、あたしは頭をフル回転させていた。

大雨を降らせる？雨…、今日はまだ天気が持つ。風向きは東から西。やるっきゃない！

「あんたたち、あたしから離れなさい！あんた達を殺す呪いの魔歌を歌ってあげるわ！！」

狂ったように喚き散らした。これには驚き、男達は全員あたし達から離れた。みんな自由になった。サラサたちは目を見開いてあたしを見る。

「こんな狭いステージじゃあ、歌えないわ！みんなあたしを掴んで！風よ、汝を軸に嵐を巻きたてる！！」

あたしは呪文を唱えた。そして、みんなあたしの服や腕を掴む。これでみんな無事！

”ゴォー……”

何もかも、吹き飛ばすような風が吹く。耳を塞ぎたくなるような音。あたしたちを中心に嵐が巻き起こる。屋根がミシミシと音を立て剥がれていき、ロベルたちも吹き飛ばしていく。悲鳴も響き渡る。土の王が手にしていた巻物が宙に吹っ飛ぶ。それを見て、あたしがマーロンにむかって叫んだ。

「マーロン、巻物を出して!!」

マーロンがあたしにぴったりくっついたまま、巻物を取り出し受け渡す。

「次は 風よ、旋風を巻き起こせ!!」

嵐の勢いは残ったまま、今度は旋風が巻き起こる。あたしは旋風と共に、空へ舞い上がった。そして、旋風を使ってあるものを呼ぶ。

巻物は?どこにある?空をさまよいながら、巻物を探す。

あたしの持つている巻物が淡い光を放ち始めた。あたしの真上でも淡い光が…!

上空に飛ぶ巻物を手にとり、2つの巻物の破れた部分をつなぎ合わせる。その瞬間、青い光があたしを包み込む。眩しくて、目が開けられない。

ふと、あるメロディがあたしに流れ込む。体全身が水のように冷たく、潤っているように感じる。涼やかな魔歌、水の魔歌。

目を開けた。目の前の空が上に進んでいく。違う、地上の景色が

近づいている。あたしが落ちてる！魔力を使い切り、そよ風さえ出せない。口から出てくるのは、呪文じゃなくて叫び声。

「いやー！ー！ー！ー！まだ死にたくないー！ー！ー！ー！」

何を言っても落ちるだけ。誰かあたしをとめてっつっ！！

落ちる。地上の景色がもう少し。

落ちる。地面が見えてきたあ。

落ちる。鋭い痛みが襲う。

”ボスッ”

体が柔らかく沈む。そのまま、スツと地面に足がついた。じゃなく、つかせてくれた。

「マレー又、大丈夫：マロ？」

受け止めてくれたのは、マーロンだった！

「あーん！死んじゃうかと思ったー！ー！！！」

マーロンに飛びかかり、たかつたけど、足に力が入らずその場に崩れておいおい泣いた。

「死ぬかと思ったのはこっちマロ。マレー又、急に狂ったし、魔術で嵐も旋風も起こすし、マレー又重：なんでもないマロ」

マーロンを睨んで最後の言葉を言わせなかった。辺りを見渡すと、土の王の家はぼろぼろになり、周囲の家にも少し被害が出ていた。

ここまでやるつもりはなかったのに。

「どこにそんな魔力があったマロ？魔歌を歌った時点で魔力はもうなかったんじゃないマロか！？」

マーロンはよく分かっているなあ。そんなこと一言も言っていないのに、お見通しのような。

「それは あっ、みんなは！？」

言葉を遮り、もう1度辺りを見渡した。あたしの少し手前に体を起こすサラサとそれを手助けするコテツ君。

その数10メートル先に、横たわるウォーテルさんの姿。気絶しているようだ。

そして、地面を這いながらウォーテルさんに近づく、ロベル。鈍く光るナイフを片手に持って。

「ウォーテルさん！」

あたしは声をあらん限りにして叫んだ。気絶して動けないウォーテルさんのもとへ行きたいのに、体が言うことを利かない。他の人も気づき、走り寄る。が、ロベルのほうが早い。

「こやつのもどだけでも搔っ切つてやるわ！！」

上半身を起こし、ナイフを振り上げる。だめ！！そう思ったとき、やめなさい。もういいわ。あなたたちには失望した」

冷酷な声が響いた。ロベルの前に黒いローブを着た女性が立っていた。ロベルを見下ろしているようだが、こちらからは顔が見えない。

「おぬし！計画は失敗だ！こやつのは喉だけでも…！！」

「もういいって言ったでしょう？ 闇よ、万物を圧縮せよ」

ロベルの手首を掴み、呪文を唱えた。すると、ナイフが黒い闇に包まれて、消えた！？一瞬にして、体が凍りついた。

あの人は魔術を使った。しかも、王族でないと使えない、属性魔術を。あたしは風の王国の王族だから、風の魔術が使える。だから同じように、あの人は闇の王国の王族だから、闇の魔術が使える。しかも、この人は黒いローブを着た女性。ロベルが知っていると言うことは…水の王国滅亡計画を企んだ人！？

「ひいいい！な、何をした！？おぬし、我らを裏切る気か！」

ロベルが立ち上がって叫ぶ。女性は全く動じていない。

推測だけこの女性は火の王国で香水を配っていた人！？

「裏切るも何も、あたしはあなた達の仲間じゃない」

女性が冷淡に言い放つ。香水を貰ったときに聞いた声。でも、他

のときにも聞いたことあるような…？

「ふざけるな！計画を立てたのはおぬしだし、我が国の薬だって渡しただろうが！！」

「そうね。分かったから、黙りなさい」

声を潜め、腕を突き出す。ローブの中から黒いうねうねしたものが…。よく見ると、髪の毛！？漆黒の髪が伸びてきて、ロベルの体に巻きつく。

ロベルは声も出せずに、恐怖に顔を歪めている。みるみるうちに顔が青白くなる。そして、女性は子供が飽きたおもちゃを捨てるように、ロベルの体を放り投げて、舌なめずりをした。髪はローブの中に戻っていく。

「まだ足りないけど、仕方ないわね」

はぁとため息を吐いて、空を見上げる。いつの間にか、空は厚い雲に覆われ、小雨が降り始めていた。

「マレーヌ、よく考えたわね。あなたにしては上出来じゃない」

空を見上げたまま、呟く。頭に被っているローブがはらりと落ちる。

「あら、まだ駄目ね。あたしの正体を知るのはまだ早いわ」

ローブを漆黒の髪にかけなおす。あたしは震えながらも、

「あなた一体何者！？なんで、あたしの名前を知ってるのよ？」

奮い立たせ、女性に向かって叫んだ。しかし、女性はロベルのときと同じで全く動じない。

「またすぐ会えるわ。次は…まあいいわ。じゃあね、マレーヌ。あと、かわいいお供のマーロン君」

と言い残し、地面を蹴り上げ森に姿を消した。

何もできずに灰色の空を見上げる。

すでに土砂降りへとなり、激しく音を立てる。

声にならない叫びが体の奥底から湧き上がる。

全身を濡らすのは雨です。

第13話 勝利か、敗北か（後書き）

どうでしたか？

この結末は勝利か？敗北か？

それは皆様の考えでおまかせします。

水の章、やっと最終話までこぎつけました。

最後まで読んでいただきありがとうございます！！

ご意見、ご感想、待っています！！

## エピローグ 晴れ渡る空の下

さんさんと太陽の光が降り注ぐ。今日は快晴。

「マレーヌ、もう行ってしまふの？」

初めて出会ったときと同じ着物を着ているサラサは、凜としていた。その斜め後ろに立つウォーテルさん。妹を優しく見ている。

あの後、医療班や兵士がすぐ駆けつけた。ウォーテルさんやロベルといった負傷者を手当てして、シーイブ村へ戻った。その日のうちに水の王国にも帰ることができた。

土の王たちから聞いた話。数年前、ローブの女性がふらつと現れたそう。そして、ウォーテルさんが水の王家だということを伝え、大まかな計画を話したという。

その計画を水の王国で働いていたロベルにも伝え、計画が実行可能だと分かり、細かい計画を練っていた。あたしが水の王国に来ることも女性は分かっていたらしく、あたしが来てから実行することになっていた。どうして、あたしが来てからなのかは分からないけど…。

細かいことを話していると長くなってしまふから簡潔に言うけど、土の王やロベルは数年間の間、女性に託された計画を細かく綿密に練り、ずる賢い蛇のように計画を実行した。

しかし、計画も失敗に終わり、全てが水の泡になって消えたのだ。

「うん。いつまでもここにいられないしね…。水の魔歌は手に入れられたし…！」

あたしはにこやかにVサインを作っ て見せた。

「そうですね…。それなら結果オーライってことで、ベリーグッド？」

「サラサ、無理に英語を言う必要はないと思うが…」

「まあ、本当のことですから。いいじゃないですか、アハハ。兄妹で息ぴったり!!」

サラサの天然ボケ(?)に、ウォーテルさんのナイス突っ込み。

座布団3枚!!

「何もかも、マレーヌさん、あんたのおかげだよ。本当にありがとう」

ウォーテルさんが心からお礼を言う。操られていたときより、随分明るく爽やかに笑う。

ウォーテルさんは土の国の薬で操られていた。それでもサラサへの想いは揺ぎ無く、その間で揺れてごちゃごちゃになっていたらしい。だから、真実を思い出そうとすると、頭痛を引き起こしてしまうようだった。これも、薬の影響だと考えている。でも、あたしの魔歌でサラサを守るって言う想いを再確認できて、元に戻ることができた…。ようつで。

2人は初めて会ったときよりも、快い顔つきになっているような気がした。

「そんなことないマロ」

なぜか、ウォーテルさんのお礼にマーロンが答えた。あたしが視線を送るのだが、全く気づいてない。そして、コテツ君があたしにあることを問いかけてきた。

「最後にマレーヌ様にお聞きしたいのですが、土の国で雨を降らせましたよね？あれはどうやったのですか?!!」

「ああ、あれは…。あの日は東から西向きの風が吹いてて、夜に雨が降る予報だったの。それで、風の魔術で、雨雲を呼び寄せたってわけ」

その結果、土の王はサラサがハープで、あたしが魔歌で、雨を降  
らせたと勘違いした。それで、あっけなく降参しちゃって…。水の  
王国の兵達に連れて行かれたのである。

「そうだったのですね。私もわたくしすごく気になっていて!!」

「えへへ、とっさに思いついたことだから、上手くいくか分からな  
かったけどね」

あたしは正直に感想を言って、頭を掻いた。

「まっ、あんなすんなり信じると思ってなかったマロね?」

「ふふ、あの人たちの事思い出すと、今でも笑えてくるから!」

みんな、頭の中で、土の国の人たちが一列に並んで土下座したい  
る光景が浮かんでいるだろう。顔がにやけてくるぞお。

「さあ、サラサ、いつまでもマレーヌさんを引き止めても駄目だぞ」

沈黙が少し続いたので、ウォーテルさんが名残惜しそうに切り出  
した。サラサが頷き、目を潤ませてあたしに近づいてきた。あたし  
も自然と足が出る。

「…マレーヌ、短い間でしたけど、いっぱいいっぱいありがとうで  
すわ〜!」

「あたしも!!サラサのおかげですごく成長できたんだよ〜!」  
お互いに抱き合って、声をあげて泣く。

その隣で男の人たちの別れの挨拶が行われていた。握手をして、  
頷きあっている。おお、なんだか、かつこいいじゃないですか!!

あたしたち女の子は、「こんなことあったね」とか思い出を語り  
合っている。そして、落ち着いてから(サラサと抱き合ったまま)、  
ウォーテルさんに声をかけた。

「絶対にサラサを守ってくださいね!あたし信じてますから。これ  
から、いろいろ大変かもしれませんが、2人なら大丈夫ですから…  
!」

これから、2人に襲い掛かるのは王家の問題。会見は無事に済ん

だそうだが、これからウォーテルさんをどうするかとか、後継者がどうしたらこうたらで大変になってくるはずだ。

「ああ、必ずやりとげる。サラサは俺が守るから……。本当に何度礼を言っても足りないくらいだ。ありがとう」

ウォーテルさんがさわやかに微笑む。大丈夫だと確信し、サラサから離れ、スクーターを出す。

「じゃあ、サラサ、また会おうね！」

「ええ。マレーヌ、絶対にまた水の王国に来てくださいね！」

「もっちろん！」

「マレーヌさん、魔歌集めの旅、頑張れよ……！」

「はい！」

「マレーヌ様、ご健闘をお祈りしています……！」

「ありがとうコテツ君！」

「マロツチ、マレーヌさんを守ってね……！」

「お供として、当然マロ……！」

みんなと一言ずつ交わしていく。さつとスクーターにまたがり、エンジンをきかせる。そして、まっすぐ前へ走り出す。

「ばいばい……！」 「さようならマロ……！！！」

あたしとマローンの声がこだまする。3人が黙って手を振り続ける。

最後に見たのは、柔らかな笑みを交わし、寄り添う兄妹の姿でした。

## エピローグ 晴れ渡る空の下（後書き）

水の章完結です！！お疲れ様でした。。。

仲良しなきようだいつていいですね。

次回からの花の章でもきょうだいが出てきます。しかもとてもユニークな！！

来週からテスト期間で更新できませんが、終わり次第、必ず更新します！！

その時まで待っていて下さい><

最後まで読んでいただきありがとうございますペコ

次回からの花の章もよろしく願いしますペコ

プロローグ 恋と愛（前書き）

## プロローグ 恋と愛

よく思うことがあるの。

愛と恋の違いってなんだろうって。

なんとなく違いは分かる…。

愛は家族とかから受けるもので、恋は好きな人に…そんな感じ??

あたし、家族からの愛情ならたくさん受けてるんだけど、

恋ってのは経験ないんだよね。

恋に憧れることもあるけど、周りにそんな人いないから、ね？

まあ愛でも恋でも共通してるのは、

大切な人がいるってこと。

そうあたしは思うんだ。

花の王国。色とりどりの花が溢れる花の国。

きっと花のように素敵な個性を持って、

花のように儂くも強い人が待っているのかな。

そんな花の王国の魔歌は花のように華やかで煌くような魔歌なん  
だらうな。

## プロローグ 恋と愛（後書き）

久しぶりの更新です！！

やっとテスト期間が終わりましたああ<>

結果は気にしません！！

今回から花の章に入ります。

気合入れて、がんばっていきたいと思います。

よろしく願いますペコリ

## 第1話 街での出会い

暖かなぼかぼか陽気の中、街中を歩く。

”ざわざわ”

あの人だかりは一体なんだろう？女の子達がマイコン片手に何かを取り囲んでいる。

ようやく着いた、花の王国。花の城に向かうため、この街中を通っていた。なんてったて、かわいいお店がいっぱいあって、ついつい立ち寄っちゃうわけで！この1時間で紙袋3つ分は買いましたよ。あてもなく（いや、あるよ！）、街中をふらついていたところ。

あたしと同じ年くらいの女の子達が「かわいいー」とか、「こっち向いて〜」とか、キャピキャピした声を上げて、人だかりをつくらせていたのだ。

「何あれ？ちよつと気になる〜」

「んなつ！？待ってマロ〜」

その場で背伸びしても見えないと分かり、人だかりに近づくあたり。マーロンは散々な目（あたしの買物）にあつて、こりこりした様子。前に進もうとしても、ぎゅぎゅに何かを囲んでいて、誰一人として動こうとしない。

うう〜、おつ！こつて、噴水の周りではないか！反対側からなら、見られるかも。

あたしは駆け足で、反対側に。

「ん〜、水が流れてて見えない…」

勢いよく流れ出る水。何があるのか、全く分からない。水がだんだん弱まり、視界が開けてきた。

カメラで撮る人。メイク道具を持つ人。照明を支える人。ポーズの指導をする人。ポーズをとる、顔もスタイルもばっちり決まっている子。

そう、これは撮影の様子。いけてる子たちは、見覚えがある。まさかと思っただ。

「ストップベリーPOPの撮影現場じゃない!?」

なんてこったい!!マレー又愛読の『ストップベリーPOP』の撮影をやっているではありませんか!!夢見たい…。一度、本物を見たいと思っただけど、こんな形で見られるなんて。女の子達が騒ぐのは無理もない。

ストップベリーPOPこと、ストップは全国3人に1人の割合でいまどきの若い女の子達が読んでいる。超人気ファッション雑誌ですから!いまどきの女の子達はファッションやおしゃれに目がない。だから、この雑誌はかわいいモデルを集結させ、おしゃれの情報などを発信し、人気を手に行っているのである。

そして、あたしの後ろのあのワゴンはまさか!?

「あらら、こんなに人集まっちゃったか。捕まらないようにね」「だいじょぶ、だいじょぶ!女の子にそんな力ありません」

あたしが見つめていたワゴンから女の人が2人出てきた。女性スツッフさんとあたしの憧れの人!

小顔で透き通るような白い肌。程よく化粧もされていて。澄んだ青い瞳はくりつきり。小さく、筋の通った鼻。ぷるぷるの健康的な唇はあひる口でキュート。腰まで伸びる金髪の緩めカール。細かいから体に白い総レースのワンピースがお似合い。ロリータ系のファッションをあたしたちに流行らせたその子はストップでも1、2を争うほどの人気を誇り、あたしが1番あこがれるモデルさん。

「アイリス!アイリス・P・ポリアンサスさんですよね!?!」

あたしがそう言い、駆け寄る。間近で見る彼女はまるでフランス

人形。

「そうだけど？もしかして、アタシのファン!?」

口に手を当てて、驚きの表情を浮かべる。手もすべすべで、爪は花柄のネイルが施されている。

「そうです！会えて光栄です！いつも応援してますー!!」

「ええー！ありがとうございますっ！アタシ、ちょーうれぴっ」

きゃっきゃつとはしゃぐあたしとアイリス。とここで、スタッフさんが、

「ごめんね。すぐ撮影だから。…アイリスちゃんいちいち相手してたら、身が持たないわよ？」

と最後の言葉はあたしに聞こえないように声を潜めていたけど、丸聞こえだ。そりゃ、わかってるけど…。別に、応援してるだけだからいいでしょ!?

「いいじゃないですかあ。じゃあね、これからも応援よろしく!!」  
スタッフさんをたしなめて、ウインクをして走り去って行った。

「あたし、めっちゃめっちゃ幸せものだあ!!あのアイリスと話せたし、ウインクまでされちゃったよ!!」

口角が緩む。本物のアイリスを見ることができただけで嬉しいのに!!あたしは世界で1番幸せ者だ。

「よかったマロね。ねえ、アイリスって…」

「ああ！サイン貰ってない！握手もしてない！あ、あたしって不幸せ者だ〜!!」

マーロンを遮り、頭を抱える。せっかく会えたのに、大事なサインも握手もしてないなんて、大失態だ!

そして、うなだれるあたしは視線を感じた。

「さっきは幸せ者だって言ってたマロ…。マロオ!?!」

あたしは突然、マーロンを掴み、その場を離れた。

「シヨップिंगの続き、行くわよ！サインと握手分、買っわよ」

マーロンを掴んだまま、ずんずんと街中を進む。

こめかみから、冷や汗が吹き出る。すれ違う人たちの視線が怖い。急にマーロンを掴んで、その場を離れたのには理由がある。アイリスが撮影に向かった直後、話し声が聞こえた。

「何あの子、アイリスと話しちゃって」

「私達、さつき拒否られたのにな…」

「舞い上がりすぎじゃない？なんかむかつく…」

あたしに対しての冷ややかな声。3人組の女の子がひそひそと話していた。視線が痛かった。昔のようだった。もっとひどかったけど…。いつのまにか、瞼に溜まる涙。

やっぱりあたしは弱いまま？マーロンは変わったって、強くなっただって言うてくれた。リリーやファイリー、サラサと普通に話せるようになった。もしかして、いい気になってただけなの？

心の奥底では分かってたんだ。あたしは変わらない、弱いままだつて。

少し、怖い目で嫌味を言われただけじゃないか。無視して、通り過ぎればよかつたじゃないか。

もがくマーロンを強く掴んで放さない。すれ違う人ごみをうつむき歩き、スピードを上げる。

全てが順調に進んでいたのに。全てがいい方向に進んでいたのに。でも、あたしは弱いから。あたしの心はシャボン玉のように、少し触れただけで簡単にはじけてしまう。

誰も居ない公園のベンチに座り込む。手をぎゅっと握り締める。

こらえて！泣きたくなかない！

「マレーヌ、どうしたマロ?!」

マーロンはせっつかくあたしから抜け出せたのに、この事態におろしている。マーロンに心配力ケタクナイ…。

「うっわ、ごめん。目になんかはいちゃって…。興奮しすぎちゃったね、あたし…」

俯いたまま、目をこするフリをするあたし。嘘つくのも下手だな。それなのに、マーロンは、

「もう、びっくりしたマロよ。さっ、目洗ってくるマロ」  
とあたしを一人にしてくれた。トイレに駆け込んで、顔を洗う。

なんとなく、なんとなくだけどさ…？

マーロンに、避けられてる？ 違うよね。

でも、前、水の王国でちょっと口論になったときから…。マーロンに頼れなくて、それでマーロンに心配をかけてしまった。その時、彼はひどく辛そうな顔をした。儂く消えてしまいたいほどに、辛く悲しい顔。

誤解は解けたけど、あたしたちの間には微妙な距離感がうまれた。マーロンの返事が素っ気なかったりするんだ。あたしはマーロンと今までどおり仲良くしたいのに。

あたしを一人にしてくれたのは、彼があたしを避けているからなのか、今までどおりの優しさなのか、分からなくて辛かった。また昔みたいに弱いあたしになってしまふのかと辛かった。

気を落としたまま、とぼとぼと出てきたあたし。マーロンは笑顔で迎えてくれた。

「お城に行くマロよ！」

彼の優しさにはひどく救われる。顔を洗ってきたのに、また涙が溜まってきた。

ずんずん進んでいくマロン。遅れないように、  
でも、1歩めど  
をついていった。

## 第2話 藍色のバラ（前書き）

どうもです！急に寒くなりましたね。。。

皆さん、体にごをつけてくださいね。

長い前ぶりもつとおじいので、

どうぞいゆっくら

## 第2話 藍色のバラ

花の城に到着してすぐ、王様達に挨拶をしに向かった。

とても華やかなこの城は、気分を明るくしてくれた。花の城でもあるのだから、色とりどりの花が溢れんばかりに飾られていた。

王室もまた、華やかで上品な花がたくさん並ぶ。玉座まで上る階段にも、花が咲き乱れている。

王様も王妃様も派手な格好で、お茶をしながら優雅に待っていてくれた。派手すぎて、開いた口が塞がらない。

「ようこそ、花の王国に！！マリアンヌ姫、マーロン君！」

王妃様が指をパチンと鳴らす。天井から花びらが舞い降りる。びっくりして、何もできずに突っ立っていた。すると、王様が、

「どうも、妻がこんな性格だな。多めに見てくだされ」

あたしの驚いた様子を察して、頭を掻いて言った。服装こそ派手だが、性格はそれほどでもないみたい。王妃様が派手なんだね。尻に敷かれてる感じがこの短い間で伝わってきた。

「あついえ、そんなことないです。歓迎していただいてありがとうございます」

「今回は魔歌探しの旅だったね。既に火と水の魔歌は手に入れられたよ。実は花の魔歌なのだが…」

「どうなってるのか、分からないのよ。だめよねえ」

恐縮する王様をよそに、王妃様はからかうような目つきで見る。悪戯っぽく光る青い瞳は、子供の無邪気さを残している。

「分からないと言いますと…?」

「す、すぐに見つかるはずなのだ！探しているのだが…」

「見つからないのよ。でも、私言ひ伝え知ってるからあ」

軽い調子で言い、玉座の後ろに並べられた花を手取る。藍色っぽいバラの香りを嗅ぐ。王様は隣でぎよっと目を見開いている。

「そうだったのか？なぜ、それを早く言わんのだ！」

一時の間を経て、王様が我にかえったようだ。王妃様はバラを戻して、

「聞かなかったじゃない」

「そうだが…」

たじろぐ王様。王妃様は余裕そうな表情を浮かべているが、顔色が少し悪くなったような…。

「結局どんな言い伝えだったのだ？それが分かれば、かなりの手がかりになるぞ。なあ、マリアンヌ姫」

「ひえ！？は、はい！」

急に呼ばれて、裏返った声で返事をしてしまった。

「その言い伝えは…」

「ぐくつ。つばを飲む。」

「…あら？なんだったかしら？んーと、あれれ？」

首をかしげ、懸命に思い出そうとする。そんな王妃様の顔色は初めよりも、青白かった。

「もう、そうゆう誤魔化しはいらぬぞ」

「本当に思い出せない…」

王妃様は至って真面目に答えた。唇を噛み、眉を顰める。そのたびに、顔を歪めている。

「さっきまで覚えていたのに…。思い出そうとすると、気持ち悪くなるわ」

頭を抑え、玉座に肘をつく。王様もさすがに心配そうだ。

「王妃様、少しお休みになってください。顔色が悪いですよ？」

あたしは王妃様を気遣い、声を掛けた。そりゃ、早く魔歌を手に入れたほうがいいかもしれないけど、具合の悪い人に無理をさせることはしたくない。

「そうさせていただくわ…。本当にごめんなさい」

王妃様はよろめきながら、立ち上がる。王様も焦って、体を支え

てあげる。メイドも横から出てきて、王妃様を連れて行く。出てきたメイドに、

「あのバラはどこから持ってきたの？今すぐ処分して……」

王妃様がゆっくりと藍色っぽいバラを指差した。やっぱりあのバラが王妃様の具合を悪くした原因なのだろうか。

別のメイドがバラを持っていくのを見届けて、王妃様はメイドとともにこの場を後にした。

「王様、オイラたちはこれからどうすればいいですか？」

マーロンの言葉に、王様はこちらに向き直る。

「部屋を準備しておいたので、そこを使って下さいな。あと、我が息子娘がいるから、顔を見せやってくれ。元気な子達だから」

と子供の話をするときは嬉しそうだった。そして、「では」と言い残し、王妃様の後を追いかけるように去って行った。

王妃様は大丈夫だろうか。バラのにおいを嗅いでから、具合が悪くなったみたいだけど。今はゆっくり休んでもらいたい。

あたしたちはそのまま自分達が使った部屋へと案内してもらった。外で待っていたメイドが子供部屋に案内すると申し出てくれたが、荷物を置いた後に行く、と断った。

早めに挨拶に行くのが礼儀かもしれないが、今はそんな気分じゃない。

特に、王妃様が気分を悪くしたあの藍色のバラを見てからは、立ち直りかけていた心がまた不安にさいなまれた。

まだ、心は晴れないままで。

「疲れたね、マーロン」

ベッドにどかっと腰を下ろして、わざとらしく声を掛けた。こんなことするから、マーロンに気づかれたしまうのだろう。

「そうマロね。マレーヌ、今回もすんなりいきそうにないマロね」  
ここで、根堀葉堀聞かないマーロン。彼の優しさだ。でも今はかえってそれが、避けているようにも感じられる。いや、しかしそれは単なる思いすぎだ。

「とにかく気長にがんばるマロ」

そうだ、彼はあたしが話そうとするまで気長に待ってくれる。

なかなか言わないときは、背中を押す一言を言ってくれる。

彼の優しさには何度救われただろう。だから、迷惑かけたくない。だけど、水の王国で頼って欲しいといってくれた。頼っていいの？

「マーロン、今のあたしの気持ち分かる…？」

唐突に呟いた。

頼っていいんだよね、マーロン？

「辛くて、涙が出そう…マロ？」

落ち着いた声が部屋に響く。あたしの心に響く。

顔を上げると、切なげに微笑むマーロン。涙が溢れて、形振り構わず抱きついた。

弱虫で泣き虫なあたし。マーロンは全て分かってくれる。全て受け止めてくれる。

過去にいじめられたりしなければ、街での出来事も軽く吹き飛ばせることができたのかもしれない。昔のことがフラッシュバックして、耐え切れなくなった。

声押し殺して、涙だけを流す。涙と一緒に、やなこと全部流せたら、どんなにいいことか。涙を流す度、そう願う。けれど、叶う

ことはない。

あたしは、小さな喜びに浸って、些細な悲しみ、辛さ、寂しさを喰らうと沈んでしまう。それはあたしが弱いから。変わらなきゃ、変わらなきゃと思いつつも、変わらないんだ。

そして、マーロンに甘えてしまう。このままじゃ、駄目だよな？  
これで、最後にするよ。だから、今だけ、弱いままでいさせて、  
「マーロン！」  
かすれた声で名前を呼んだ。彼だけなんだ。

「あたしは強くなんか… なってなかったんだよ」  
「そんなことないマロ！ オイラには分かるマロ。マレーヌ、自分に自信を持つマロ。」

火の王国のコンテストも、土の国でピンチになったときも、マレーヌは強かったマロ。堂々としていたマロ。自信に満ち溢れていたマロ」

しっかりと言葉をつむぐマーロン。  
大勢の人に緊張したけど、当日変更の魔歌を歌いきった。

みんな捕まった状況で、知恵を振り絞って、魔歌もハーブも手に入れた。

「でもあれはやるしか… なかったでしょ？」

あの時は何も考えず、突っ走っていく感じだった。自信なんてなかった。

「それでも、やり遂げたマロ。ばねにするマロ。今までやってきたことを」

マーロンはそう言って、一度あたしを離す。落ち着かせるように、ゆっくりと続ける。

「マレーヌは何度も苦難を乗り越えてきたマロ。それが、強さになるマロよ。人は誰だって強くない。何かを経験して、それを強みに

変えていくマロ。

実際マレーヌは強いマロ。心配ないマロ。

耐え切れなくなったら、オイラに言うマロ。オイラが話を聞いてやるマロ。

マレーヌを傷つけたやつらをギャフンと言わせてやるマロ！」

最後は握り拳を作って、にかつと笑う。自然とあたしからも、笑みがこぼれる。

「オイラはマレーヌのお供で、家族マロ。いつでも守ってやるマロ。オイラもそう決めたマロ！」

だから、泣くな、マロ？」

前にも似たような言葉を言われた。火の王国で喧嘩した時。でも今は、あの時よりも、何か熱いものが胸の中にある。「泣くな」でドキッとしたような…？

「ありがとね、マーション。あたし、ちょっと元気出た」

目に涙を溜めたまま、呟いた。

まだ、完全に吹っ切れたわけじゃない。だからって、いつまでもうじうじしてちゃ駄目なんだ。

「マーションにいつも迷惑掛けてばかりだね」

これで、最後にするって決めたから。いつまでも、マーションを困らせたくないから。いつまでも、頼ってちゃいけないから。

「マーションも、あたしに何でも言っただろ？」

今度はあたしにも、頼ってほしい。

黙ってうなずくマーション。照れ隠しに微笑んで見せた。

あたしには、マーションという大きな存在がいるから、きっと大丈夫。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4183v/>

---

歌姫物語（ディーバ・ストーリー）

2011年12月11日18時46分発行